

Reincarnation with Will. Century Of 21 in Infinite
Dendrogram

霖霧露

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生者が行く、ウィル子と『インフィニット・デンドログラム』の旅。

ブラック企業でのブラック労働が祟って死んだ一般人が、唐突に『インフィニット・デンドログラム』（ゲームの中）の世界に転生させられてしまった!?

転生特典なのか、『戦闘城塞マストラ』の『ウィル子』が付いてきてくれているが、修羅極まる世界で一般人がどう生き残り、どう生きていくのか。どうぞご期待!!

目次

第一話	その日、俺は運命に出会う。のかもしれない	1
第二話	プータロー	10
第三話	空を見る！あれは何だ!?	16
第四話	ピンチをチャンスに・上	24
第五話	ピンチをチャンスに・下	31
第六話	確認	38
第七話	困難な試練、されど……	45
第八話	死を告げる黒い鳥	52
第九話	同じ卓に着け・前編	59
第十話	同じ卓に着け・後編	65
第十一話	転勤	72
第十二話	強奪王	78
第十三話	撒かれた布石	83
第十四話	クレームルよ、さらば	89
第十五話	キセキの代償・前編	95
第十六話	キセキの代償・後編	102
第十七話	付けの清算・前編	108
第十八話	付けの清算・後編	117
第十九話	お節介焼のフォルテスラ	123
第二十話	答えは己で作り上げる	129

第一話 その日、俺は運命に出会う。のかもしれない

俺こと、川村英司かわむらえいじの話聞いてほしい。

終電ギリギリまで働いた会社からの帰り。疲労でフラフラだった足が駅の長い階段を踏み外し、頭に一瞬激痛が走ったかと思えば――
「……は？」

――砂漠のど真ん中に立っていた。

「いや、どういう事なんだ……」

「きつとあれですよ、それで死んで転生したのですよー」

「わあ、なんて在りがちな転生モノ。じゃあここはどっか異世界か」

隣に浮遊するオレンジ色の髪で、白を基調としたサイバーアイドルを思わせる服を着た少女がそうにこやかに言うものだから、俺も「きつとそんなもんだろう」と雑に受け入れた。

きつと神様もテンプレな転生導入するのが面倒臭くなったのだから。う。

「どうも、ゲームの中みたいですよ？ウイル子がこんな風にデータ改竄でPON☆とアイテム出せるので」

少女が指パツチンすれば本当に「PON☆(CV・ベネット)」と音を立てて馬車が生み出された。

「ゲームの中？『hack』か『ソード・アート・オンライン』か？」
「最近VRモノも多いですからねー。特定は難しいですよー」

確かに、少女が頭を捻るくらいにVRモノというのは最近溢れている。

まあ、俺はそういう世情に苦言を述べるつもりはない。一つのジャンルが様々な人に書かれるのは良い事だ。それだけ違った形が生まれ、各々読者に合った形が生まれやすくなるという事だからな。

というか、今気付いたのが。

「ん？どうしたのですか？」

「ウイル子じゃん」

「はい、ウイル子はウイル子なのですよー」

先程から俺に返事をくれていた存在。それは『戦闘城塞マストラ』

という作品に登場する電子の精霊、ウイル子だった。正式名称は『W
ill・CO21』だったか。彼女の相棒兼主人公が呼んでいた『W
ill・Century Of 21(21世紀を願う神)』という名
称はとてもかっこいいと思った(小並感)。

「にほほほ。ヒデオのあの呼称は、誇らしくもありますが、ちよつと
恥ずかしくもあるのですよー」

「まああの人、割と場の雰囲気でもない事言い出すし。ご愛敬
だろ」

空気を読みすぎたり酒の勢いでぶっ飛んだりする主人公が『戦闘城
塞マストラ』の主人公だった。良識はあるのだが、とかく行動が突拍
子もない。パンツ脱ごうとするしパンツ脱いだし。

「とりあえず、ウイル子が転生特典つてのは良いとして」
「軽く流しますね」

そうとしか考えられないからね。仕方がないね。

「この世界が何なのか特定しないと、二次創作転生者特典・原作知識が
使えないぞ」

「二次創作つて断言しちゃうんですね」

ウイル子が居る時点で著作権とかそこらで商業作品にはできない
からね。仕方がないね。

「何か手掛かりはないか……。腰のこれは、アイテムボックスか。え
くくと、ステータス欄とか、見ても区別つかないか。ん？なんじゃこ
れ」

ゲームのようなウィンドウを表示した時にかざした左手の甲。そ
こにはウイル子の額にあるマークと同じジグザグ配置の五つの四角
が描かれていた。

「これは、まさかっ！」

驚愕してすぐにキリつと真面目な表情をするウイル子。いったい
何を思いついたのやら。

「問おう、貴方がウイル子のマスターか」

「令呪を以って命ずる。自害せよ、ウイル子」

「よもや貴様！グワーツ！」

「ウイル子が死んだ！この人でなし！」

まあ、嘘だけど。

Fateの感動シーンをウイル子が再現し始めたので俺も感動シーン（愉悦）を再現した。付き合いの良いウイル子でもさすがに槍で貫くのは再現できなかったのか、マジックナイフで胸を指すフリをしてグツタリ倒れている。

「紋章は令呪じゃなかったな。FateVRとか面白そうだったが、デスゲームになりそうだから止めとこう」

月の聖杯戦争とかゲームっぽい宣伝文句でやっていたのがガチのデスゲームだった。ワカメはご愁傷様。月の裏側で蘇れ……蘇れ……。

「左手の紋章……。待てよ?」

「VRモノ」、「左手の紋章」で俺は記憶の取っ掛かりを掴む。ステータスウインドウを開いてその証拠を探した。

「あった……」

証拠となる項目、『ヘエンブリオ』。そこにはこう書かれていた。

虚数電神ウイル・センチユリー・オブ・トウウエンティーン

到達段階 i

Type イマジナリー・ワールド

スキル 《21世紀を願う神》
ウイル・センチユリー・オブ・トウウエンティーン

「……」

「ヘエンブリオ」という事は、『インフィニット・デンドログラム』みたいなのですよー」

うん、俺もその事実には気付けた。

2043年に発売されたダイブ型VRMMO《インフィニット・デンドログラム》、そのゲーム内とリアルを舞台とした作品『インフィニット・デンドログラム』。

詳しくは原作を見てほしい。今井神さん作画のコミカライズの方でも良いぞ！ただ、この作品はネタバレも多分たくさん含むからWeb版既読推奨だ！

「メメタア」

「メタ発言は許してほしい。色々頭が混乱してるんだ。後、ウィル子はそろそろ立ち上がって良いぞ。いつまで倒れてるんだ」

メタ発言による現実逃避と倒れ続けるウィル子へのツツコミで頭をリセットし、思考を目の前の疑問に戻す。

「到達段階i」って?」

「ああ!」

ウィル子が遊戯王風の作画をしてまで無駄な合いの手を入れるがスルーだ。二次創作だからウィル子に著作権への遠慮がない。

「管理AIたち、って言うかへエンブリオ」の先達たちの到達段階がインフィニット

「∞」。他のプレイヤー、ゲーム内では『マスター』か。そいつらでも段階は「1〜7」だ。「i」、もしかして「イマジナリー」? 「虚数」って意味か? こんな到達段階はないはずなんだが……」

「原作壊さないようにするための特別措置ではないのですか?」

「あーなるほどー、なんか7段階とか∞段階とか増えちゃうと話に影響しそうだもんなあ」

管理AIたちの目的はへエンブリオ<7段階到達者を増やす事だつたはずだ。おそらくそれは最終目標の過程であり、新たな∞段階到達者を生み出す事が目的だと俺は考えている。当たっていたとして、それも過程だろうが。

「イマジナリー」ってのは話を壊さないために例外にしたのか。じゃああんまり深く考えなくて良いな」

一つの疑問が解消した。次だ。

「Typeイマジナリー・ワールド」って何だよ」

「世界をなんやかんやするのではないですか?」

「なんやかんやって何だよ」

「なんやかんやはなんやかんやですよー。ほらこの通り」

ウィル子がまた指パッチンし、今度は機械の馬を生み出す。馬車はもう出しているからお逃れ向きだ。

「……。ウィル子、これさ。この世界がゲームっていう事になってるから、電神ないし電子ウィルスよろしくゲームデータを改竄してるって事はないよね?」

不意に不安が湧いてくる、運営にBANされるような事をしていないかと。

「最初にデータ改竄してるって言いましたよ？」

「……」

通報されたらアウトだった。

「マスターはそもそもへマスターへではありませんが、ゲームプレイヤーではないので大丈夫ではないですか？」

「いや、ヘイレギュラーとして物理的に消されない？垢BANならぬ心臓BANNGされない？」

「……ファイトですマスター」

「ファイトです」じゃねえ！一蓮托生だ！」

テヘペロしながら他人事なウィル子に俺は現実を突き付ける。俺だけでは死なん。お前の魂も連れていく。

「まあまあ。やってしまったものはどうしようもないのですし、有効活用するのですよ。ほら、馬車に入って、どうぞ」

「ああ〜！クーラーの音オ〜！」

忘れていたが俺が居るのは砂漠のど真ん中。シユレディングアの猫的なあれやこれで先ほどまでは暑さを知覚していなかったから無事だった。しかし、ウィル子が開けた馬車の扉から吹く冷風が照り付ける日差しを思い出させる。

「限界だ！乗るね！」

「キンキンに冷えてやがる……っ!!のですよー」

俺は飛び乗ってその涼しさを堪能する。犯罪的だ……快適すぎる……。

「ウィル子、これってレジエンダリアの試作魔法馬車じゃないか？」

床で尺取り虫になりながら中を見回した俺は、その広さに違和感を覚えた。それでこのゲーム内で最もファンタジーな国、レジエンダリアで魔法により馬車内の空間を広げる魔法馬車の存在が頭を過る。

「にほほほほ。2LDK、シャワールーム付き、バス・トイレ別、空調完備の魔法馬車ですよー」

「……ひよつとしてだが。あの機械の馬も、煌玉馬だったり……？」

「さすがの私もゲーム内で0からオリジナルアイテムを作るのは手間がかかります。なので、名工フラグマン薫製の煌玉馬をオマージュして作りました。安心してください、オートメンテナンスシステム自動修復機能と動力炉も付けてありますので整備もMP供給もいらな**い**のですよー。ただ、性能は余り盛らず、《自動走行》と《空間固定》だけに留めました。名付けて、ジルコニア・ヌル【無之偽金剛】！なのでですよー」

自信満々にウイル子は語るが、ヤバい。大変ヤバい。煌玉馬は先々期文明という古代文明が残したプラントが見つかるまで、初代フラグマンの製造品しか残っていない。そのプラントが見つかったても、フラグマンの製造品の劣化しか作れない。劣化品は動力炉が作れず、MP供給を騎乗者が行う仕組みになる。

そう、ウイル子は現状誰も作れない物は、データがあるからと言って作り出したのだ。

「一応聞いておく、スキルの詳細は？」

「《自動走行》は命令しておけば後は自分で考えて勝手に走ってくれます。《空間固定》は名前の通り空間を固定して外部からの圧力で流動・変化しないようにします。簡単に言うとも見えない壁です。これでも走行及び牽引できるのですよー」

「……」

「空間を固定」とかいう辺りにヤバみを感じて悟りが開けそうだが、ゲームだったらただ単に透明なオブジェクトを置いただけだが、この世界は単なるゲームではない。

「ちなみに、リソースって言うか、代償に払ってるモノとかは？俺MPとか払ってるの？」

「いえ？ほとんど何も消費していませんよ？強いて言うなら、このゲームへの信仰心でしょうか。ウイル子は電子機器に対する良い感情が寄り集まった電子のカミなので。現状もそういう『戦闘城塞マストラ』のルールを押し付けている感じですよー」

「イマジナリー・ワールド」とはつまりそういう事らしい。別の世界のルールを押し付けているからテリトリー系の分類なのだろう。

「それさ、俺のMPを使うようにできんかな」

「できるでしょうが、出力が∞段階レベルから7段階レベルくらいまでに落ちますよ?」

「充分じゃないかなあ、そんなに暴れる気ないし。管理AIたちと戦ったら多分死ぬし」

強い力を手に入れても、もつと強い奴らが居るので暴れたくても暴れられない。

いや、そんなに他人に迷惑かけるような事をするつもりはないが。後、死にたくない。一度目はほぼ自覚できてないが、だからって二度も死にたくない。そもそも一度だって死にたくない。

「じゃあどうするのですか?せつかくの二度目の人生なのですから、何か好きな事とか」

「のんびりしたい」

切実にそう思う。ウイル子に「えー……」って呆れられようとそう思う。

なんたってブラック企業であくせく働いて死んだようなものだからな。忙しくなく生きる人生などもうこりこりだ。

「でも世界漫遊も面白そうではありますね」

「じゃあそういう事で。人間の生活圏まで、全力☆前進DA!」

ウイル子も嫌ではないようなので、とりあえずの活動方針を「のんびり生活」に設定した。俺は全力でのんびり生きる。

「で、生活圏ってどっちなのでしょう」

「……真つすぐ進めば町に出ないかなあ」

俺の第二の人生は、そんな不安しかないスタートを切った。



権限の有る者しか入れない異空間、宇宙船の一面を思わせる場所に数名の人物が集っていた。いや、彼らは人物と評して良い者ではない。

〈Infinite Dendrogram〉の管理AIであり、
〈無限エンブリオ〉。

絶大な力を持つ〈Infinite Dendrogram〉世界

の管理者たちである。

そんな者たちが、全員でないにしろ、その半数近くが集まっていた。「本当にデータ改竄されたのかい？それも、未遂じゃなくて？」

疑問を呈するのは『チェシヤ』と呼ばれる管理AI。彼の担当は補佐、いわゆる雑用であるために多くの分野を囓んでいる彼だからこそここに呼ばれていた。

チェシヤの疑問は当然である。今までも「Infinite Program」に改竄を仕掛けようと不正アクセスを働いた者は居た。しかし、その全てが未遂または失敗に終わっている。ただのゲームと高を括って挑んだチーターにこの世界が改竄などできない。同時に、そんな茶々を許す程愚鈍な管理体制ではない。

「ええ、どうおにも不正な方法でアイテムを製造されました。バンダースナッチが血い眼になって改竄の履歴を掴みまました。彼は今もそのチーターを血眼で探してまます」

道化のような笑みで答えるのは『マッドハッター』と呼ばれる管理AI。彼の担当はアイテム。今回の不正発覚がアイテムの不正創造なのだから、当然彼の管轄に食い込む。当人はあまり焦っていないが。

「私もさっきまでそのチーターを搜索していたけど、影も形もないわ」「データ改変ができるような「エンブリオ」の候補はいくつかあるけど、私たちにも隠し通せるくらいに育っているのは居ないわよ」

「私の監視する限りでも……そのプレイヤーの情報は……得られていない……わ」

補足するのが、プレイヤー保護機能及びアバター管理担当のアリス、〈エンブリオ〉担当のハンプティダンプティ、グラフィック担当のダッチェス。

彼女らの管轄であるアバター情報、〈エンブリオ〉情報、視覚情報においても、此度のチーターは判明できていない。

「以上から、我々の管轄にない存在である「イレギュラー」ではないかと推測されているのである」

最後に締めるのが『ドーマウス』と呼ばれる管理AI。彼の担当は

危険物。危険物の最たる「ヘイレギュラー」の可能性があるために彼は集わざるを得なかった。

「僕たちの管理を擦り抜けてデータを改竄する「ヘイレギュラー」。そんなモノを、いったい誰が……」

「無限エンブリオ」数名で管理するシステムに干渉できるとなれば、それは管理AIの同族、「エンブリオ」のはずなのである。しかし、チエシヤたちの管理している「エンブリオ」に今回のようなデータ改竄を行える物はない。チエシヤたちは全ての「エンブリオ」を管理しているのだから、そんな「エンブリオ」はこの世界の何処にも存在しないのだ。

もしそんな「エンブリオ」が存在すると言うならば、それはチエシヤたちが生み出した「エンブリオ」ではない。チエシヤたちを生み出した者たちが、新しく生み出した「エンブリオ」という事になる。

しかし、その可能性は恐ろしく低い。チエシヤたちを生み出した者たちは、チエシヤたちを生み出した時点で限界だったのだから。

「チエシヤ、今それを考えても意味はないのである。今すべき事は、我々の思惑を崩しかねない「ヘイレギュラー」を一秒でも早く見つける事なのである」

「ああ、そうだね」

彼ら管理AIはその「ヘイレギュラー」を何が何でも見つけ出さなければならぬ。自分たちが存在する意味を壊されないために。

第二話 プータロー

俺こと、川村英司の話聞いてほしい。

俺が6時間ほど不貞寝して8時間の睡眠を挿み、更に2時間の不貞寝をするくらいにはショックな話だ。

時は不貞寝をする前まで、16時間ほど前の話。これからののんびり転生ライフのために魔法馬車を走らせてすぐの辺りだ。

◇

「マスター、馬車は煌玉馬ジルコニアで平坦な空中を走らせるとはいえ、空中にもモンスターは居るので対策をした方が良いでしょう」

これからの具体的な方策を話し合おうとダイニングの椅子に腰を落ち着けた時、フヨフヨと浮かんだままのウィル子はまず安全の確保を提案した。

「平坦な空中」というパワーワードはさておいて。対策って言ったって、どうするんだ？俺たちは武器も防具もないから戦えんぞ」

「ウィル子たちに戦う力がないのなら、戦えるモノを用意すれば良いのですよー」

「……煌玉人作るとか言わないだろうな」

魔法馬車に煌玉馬と、強力すぎるアイテムを生み出した前例があるウィル子を俺はついつい訝しんでしまう。

いや、マジで言いそうでさ。

『インフィニット・デンドログラム』の作中、確認された煌玉人の数は少ない。1体は生産が専門で戦闘性能があるか疑わしかったが、別の1体はガチの戦闘型だった。

原作において、へエンブリオンが6段階とはいえ、超級職のへマスターンを圧倒していた。端的に言ってヤバイ。

「さすがに7段階の出力で煌玉人は作れませんねー」

暗に∞段階の出力なら作れるというお答えを頂いた。ウィル子にダイブ型VRMMOは与えちゃダメらしい。

「ここはマスターの戦闘力に依存しない、独立戦闘のモンスターを作るのですよー」

「モンスターなら7段階で行けるのか?」

「機械型のモンスターならマスターのHP・MP・SPと応相談で作れます。強さは払ったポイント量に左右されてしまいますが」

7段階、〈スベリオル超級エンブリオ〉としてのウィル子の創造物は〈マスター〉の消費HP・MP・SPに応じて性能を上げるらしい。さり気なくHPも勘定に入れられるのは少し怖いが、もしもの時に使えるだろう。

ちなみに、ウィル子がスキルを使う時はだいたい俺のHP・MP・SPを消費するようだ。

「して、ウィル子君。君の作れる限界で支払われる量はどれくらいかね」

「どのポイントかは反映せず、一律90万でレベル100の機械型モンスターが作れるですよー」

「レベル100!?うせやろ!」

レベル100はモンスターの上限だ。正しくは100以上もあるが、100と101には分厚い壁がある。それを超えられるのは一握り中の一握り、〈スベリオルユニークボスモンスターS U B M〉と呼ばれる存在である。

逆に言えば、レベル100というのは〈ユニークボスモンスターU B M〉の最上位だ。このゲームの難易度表記なら〈マイソロジー神話級〉に区分され、超級職と〈超級エンブリオ〉を携えた〈マスター〉に相性次第で勝利できる。

そんな物が作れてしまうと言うのだから驚愕するしかない。

「あの、すみませんマスター。さすがにウィル子の作ったモンスターは〈エピソードUBM〉には届きません。ギリギリ最底辺、〈逸話級〉に届くかどうかなのでですよー」

「え?それまたどうして」

「ウィル子の作り出せるモンスターの質が良くないのです。「レベルを上げて物理で殴る」という感じで、基本性能はそこらのMOBモンスターより強くなりますが、何の特殊スキルも持ちません。いえ、こっちの命令に従わせるための《従属権》は付与できますが、それ以外特別な力は持たないのですよ。例えるなら、「種族値の低いポケモンをレベル100にした」だけなのですよー」

「なん……だと……」

ウィル子が述べる事実には俺は冷や汗を流した。

ただそこそこ強いモンスターを侍らせるだけとは、少し拍子抜けなスキルに思えてしまった。この世界のチートじみた「超級エンブリオ」に比べると見劣りする。

「兵器の方を作れば楽なのですけどねー。あ、でもポイントさえ供給してもらえればいくらでも作れるのです。戦いは数ですよ、マスタ―」

「パーフェクトだ、ウィル子」

熱い掌返したがウィル子もションボリした後にしたたり顔になったのでお相子だ。

1体だけならそんなものは強者に捻り潰されるのがオチだが、数が揃えば話は別。なお、広域殲滅型は考慮しないものとする。

「だが1体90万かあ。今の俺で運用できるのかねえ」

払うポイントが安くない。転生したばかりの俺に支払えるとは考えられないので落胆しつつ、現状はどの程度使えるものかと自身のステータスウィンドを表示した。

「は？」

俺の目にあり得ない数値が飛び込んできた。

HP	99,999,999	999,999	999,999
MP	99,999,999	999,999	999,999
SP	99,999,999	999,999	999,999

「1億まで妖怪1足りない!!」

「あ、そっちなのですね」

横から覗き見るウィル子としては別のリアクションを期待していたようだ。

いや、確かにこの多さは驚きなのだが。ここまで行っているなら後1くらいおまけしてくれても良かったじゃないか。9が凄く並んでいて凄い（小並感）とは思うが。

「何のジョブもなしにこれはあり得ないな。今就いてるのは何だ」

ジョブの欄に書かれた文字列を確認する。そこに書かれていたの

はこんな文字だ。

メインジョブ 【山羊神】 1 v. 1

サブジョブ 空欄

「まさかの【神】シリーズかよ……」

予想していなかった自身のジョブに顔が引きつった。これも転生特典だろうが、さすがに【神】シリーズは身に余る気がしてならない。

【神】シリーズはスキル特化。その名称・性質に合わせたスキルを多く取得し、さらにはスキルを自身で生み出せる。スキルを作れるというのは、スキルが重要なこの世界において破格だ。

しかし、上手い話には裏がある。その【神】シリーズはジョブの取得条件が厳しいのだ。

この世界のNPCであるティアンどころか、プレイヤーであるヘマスターも就けた者は少ない。

「でも山羊の神ってなんだ？」

「動物の【神】シリーズとなると、例は【猫神】と【兎神】。どちらも管理AI用のジョブなのですよー」

「ふむふむ、つまりこれも原作を壊さないための特別措置か」

動物系【神】シリーズは管理AIが後付けした、この世界に元々ない職業だ。そして、管理AIでも自分たち用のジョブしか後付けできていない。

つまり、このジョブも俺用に後付けされたモノだと予想できる。

「それにしてもだ。猫と兎の例もそうだが、どんなジョブか皆目見当も付かんな」

「スキル見た方が早いのでは？」

「ご尤も。という訳でスキル項目、オープン！」

万感の思いを込めた俺のオープンウィンドウが神の恵みを指し示す。

スキル 《スケープゴート》

詳細 パッシブスキル。HP・MP・SPの最大値を「99,999,999」で固定する。STR・AGI・END・DEX・LUCの最大値を「9」で固定する。このスキルを無効化する事はできない。

「……」

どうにも目が疲れているようだ。一旦目を瞑り、眼精疲労を少しでも回復させてからもう一度スキルを確認しよう。

スキル 《スケープゴート》

詳細 パッシブスキル。HP・MP・SPの最大値を「99,999,999」で固定する。STR・AGI・END・DEX・LUCの最大値を「9」で固定する。このスキルを無効化する事はできない。
「……」

どうにも目が疲れてい——

「マスター、現実を受け入れるのですよ。後、文字数稼ぎが露骨です」
「ぶうううううううさん蹴るなああああああああああ——」

新世界の神のような怒号で叫ぶも、現実が変わらない。

「これは、神の贈り物（かつこ試練）（かつことじ）の方だったみたいですね」

「【神】シリーズでありながら、なんたる産廃ジョブだ！というか山羊の神ってか生贄の神じゃねえか！どっちかって言うと【サクリフアイズ生贄】の超級職だろこれ！ふざけやがって運営この野郎！メルボムしまくつてやるからな覚悟しろ！」

「多分このジョブ用意したのは運営ではないですし、メルボムしたらウィル子たちの存在がバレるのですよー」

「おいおいおい、死ぬわ俺」

興奮していた精神は己の命を縮める事実を聞いて冷静になる。躁鬱の落差で眩暈がしそうだ。

「はあ……。よし、寝るか」

「え？」

◇

という事で今に至る。

補足だが、寝る前にウィル子にレベル100モンスターを10体ほど注文しておいた。身の安全はバッチリで、快適な空の旅を過ごしている。

俺はショックだった。別に異世界転生で無双が是が非でもしたかった訳ではないが、ここまでお膳立てしておいて俺自身はほとんど

何もできない。

「これじゃあウイル子のヒモだなあ……」

枕に頭を預けたまま溜息を吐いても、吐かれた息は俺のやる気の如く霧散する。

「まあ、別に良いかあ。第一目的が「のんびりする」なんだし、俺自身が強くなっても……」

自己弁護を試みるも、消え失せたやる気は帰ってこない。

しばしの間、何かを考えるでもなく、また不貞寝に戻るでもなく、じつと天井を眺めていた。

「マスター！」

「なんだよウイル子。俺は寝るので忙しいだが」

自室の扉を勢いよく開けるウイル子を煩わしく思いつつ、しかし彼女に頼って生きるしかない俺はそのそと上体を起こす。

「ウイル子たちの護衛モンスターが次々にやられているのですよー！！」

「なんだと!?!」

10体のレベル100モンスター。個々はギリギリ〈逸話級〉程度だが、それでも10体だ。

それに、ジルコニアに付いて来られるよう、飛行ができるモンスターを創造した。野良のモンスターやそこら辺の〈マスター〉に負けるはずがない。

「い、今10体目が……!」

俺もウイル子も顔色が青ざめる。

「うい、ウイル子！次のモンスターを——」

ピンポーン♪

ウイル子に指示を出そうとした時、空中を走り続ける馬車のインターホンが鳴った。

第三話 空を見るろ！あれは何だ!?

俺こと、川村英司の話聞いてほしい。

馬車で快適な空の旅をしていたはずが、護衛のモンスターが全滅して絶体絶命。緊張感のない音色のインターホンとは逆に、俺とウイル子は緊張に包まれていた。

「し、新聞とセールスはお断りです!!」

「せめてインターホンに向かって言うのですよー!!」

「言えるか! 〈逸話級〉^{エピソード} モンスター10体を狩った相手だぞ! 勘弁しろ、ヤの付く不動産業者の土地売買より怖えぞ!」

ウイル子と震える肩を抱き合いながら泣き言を言い合う光景は虚しさすらある。

ピンポーン♪

慈悲なきセカンドコール。まだ連打されてないのが救いだが、そうなるのも時間の問題か。

「まままマスター、そろそろ出ないと実力行使も辞さないかもしれないのです。それをしていない辺りまだ交渉の余地があるのですよー!」

ウイル子自身もその可能性を一縷の望みとと思っているのか、涙目でもなんとも説得力に欠ける。

「ああそうだ、まだ助かるマダガスカル」

「それ、コンニョー!」

精神の安定を図るためにウイル子と共にボケつつ、インターホンの目の前まで至る。意を決して応答ボタンを押した。

「すいませくん、川村ですけど〜」

「まーだ時間かかりそうですかねー」

ウイル子、それは受け応える方の台詞ではない。

『やつぽー』

モニターには何故か逆さの美女の顔が映し出された。

俺はその顔、というか白銀のメツシユが入った赤髪、赤の右目と白銀の左目に記憶の引っ掛かりを感じる。

「徹底的なまでの紅白」、「逸話級」10体を倒せる程の実力」、「空中戦を熟せる存在」。

そのキーワードから俺は『AR・I・CA』というへマスターの記憶を引っ張り出す。

そういうへエンブリオでもない限り地上戦が主なこの世界で、機械兵器を用いて空を駆り、へ超級エンブリオと超級職を併せ持つ存在、AR・I・CA。その実力はへInfinity Dendrogram内でも上位一割に食い込むだろう。

そんな強者との出会いに高速で思考回路を回した俺の第一声は――

「食べないでください!!」

――高頻度で男女問わず性的に食べる好色家への悲鳴だった。

『た、食べないよ!』

俺の予想外の反応に驚きながらの返しだったので、おそらくとあるアニメを想起したものではないだろう。

「ただ食べても美味しくないおお俺にいったい何用かね」

「マスター、声が盛大に震えているのですよー」

「許せ、サスケ……」

俺は今何故強者に狙われたのか分からなくて恐怖しているのだ。精一杯の気力で震える足を抑えているのは評価されこそすれ、貶される謂れはない。

『いやー、空を飛ぶ馬車って珍しいなーと思って。ちよつと話しかけようとしたら周りの鳥みたいな機械が襲ってきたからさ。あれ、君のでしょ? 正当防衛とはいえ、壊しちゃったからついでにごめんささってね?』

モニターに映し出されているAR・I・CAは申し訳なさそうにしていた。嘘を言っているようには感じ取れない。

「……ウィル子?」

「ちよつと急用を思い出したのですよー」

ウィル子は即座に俺の左手の紋章へ引っ込んだ。

「ウィル子、せめて原因を説明してから引っ込め! おい、応答しろウイ

ル子！ウイル子ーーーーー！！」

『説明しよう！』

普通に応答があった。しかも無駄に熱血系漫画の解説風味で。

『2・3体までなら〈超級〉の出力でもマニユアルで動かせるのですが、10体ともなると操作が追い付かないのですよー。なので、あらかじめ自動迎撃のプログラムを入れておきました。今回はその自動迎撃プログラムのトリガーが軽かったために起きてしまった事故なのです』

「ふむ、そうか……。原因は分かった、ウイル子は悪くない」

「10体出せ」とだけの雑な注文をしたのも、〈超級〉の出力に抑えるよう命令したのも俺である。過失を問われるべきは〈マスター〉の俺だろう。

とりあえず、原因が分かったので目先の迷惑をかけた人への対処が優先事項である。

「すまなかった、こちらの不手際だ」

『うん、アタシは特に怒ってないから無問題よ。ノーフロblem まあ、お互い顔見せて謝るために中に入れてもらえると嬉しいかな！逆さ吊りもそろそろ辛いし』

オーキードーキー
「了解。一旦馬車を地面に降ろそう」

相手が邪険に扱ってこないのであればこちらがそうする意味もない。原作登場キャラとの接触は原作の時系列を知るにも都合が良いし。

俺は煌玉馬ジュルコニアを滑走路に着く飛行機の如くゆっくり地面に接触させ、速度を緩めていった。ついでに一応ウイル子を紋章の中に納めた。

「外は暑いだろう。って、何処だ？」

馬車の扉を開けて外を確認するとAR・I・CAの姿がない。代わりに馬車の屋根から騒がしいエンジン音が聞こえてきた。

「うわっ」

目の前の砂地にエンジン音の発生元、〈マジンギア〉が着地する。バーニアで舞う砂が目に入らないように目を腕で庇った。

どうして逆さ吊りになっていたかと思えば、〈マジンギア〉を屋根に

置いて自身をワイヤーかなんかで繋いでいたのか。

危ない事をするものだ。そうしなければインターホンが押せない状況だったのだが。

「ごめん、アタシでも砂を巻き上げない着地とかは無理でさ」

砂煙が消えたのを見計らってへマジングアからAR・I・CAが降りてきた。ようやくはつきり視認したへマジングアは、青のカラーリングなどない金属の色そのままの機体だった。

「ああ、まあ積もる話の中でしよう。中は快適だぞ?」

今の時系列を知る重要情報が見られたために内心機嫌が良い俺は、怪しまれぬようすぐにAR・I・CAへ視線を移し、馬車内へと招き入れる。

「馬車の中はこんなになってるんだね!広いし涼しい!」

「レジエンダリアではこんな馬車が作られてるらしい。「魔法馬車」だったか。俺は偶然手に入れたんだがな」

「へえー」

偶然ウィル子が作ったから手に入った物だ。何も嘘は言っていない。

「ダイニングの椅子にでも腰かけといてくれ。飲み物はアイステイーしかないけど、良いかな?」

睡眠薬が入っている、なんて事は無い。危機感知ができるへエンブリオ〜を持つ彼女にはすぐに察知される。

そもそもの話、俺に美女を睡眠薬で眠らせて何かする度胸はない。食料は備え付けの冷蔵庫(食料調味料限定のアイテムボックス)に蓄えられていたが、残念ながら二日分そこそこしかない。俺が寝ていたのは食料の消費を抑えるための苦肉の策でもあったのだ。だから飲み物は本当にアイステイーしかない。

むしろ何故アイステイーだけはある……。

「ありがとー!砂漠での性能テストで喉が渴いてたんだよね」

差し出されたコップの内容物を何の警戒もなくAR・I・CAは口を付ける。まあ、危機感知に反応がなかった故だろう。

「性能テスト」?あのへマジングアのか」

「へマジンギア〜って良く分かったね。人型の【マーシャルII】ってまだ出回ってないはずだけど」

「お、おっと。これは失言だったかな？これでも情報通でな。ドライフが人型戦闘兵器の製造に漕ぎつけたってのは知ってたんだ」

漏れた失言を、俺は別の意味で失言だったように取り繕った。間違っても原作知識だと露呈してはいけない。

「お察しの通り、あれが試作段階の空中戦闘用へマジンギア、【マーシャルII】。アタシがそのテストパイロットのAR・I・CA」

「もう空中機動まで可能なのか……。おっと、失礼。俺は英司、川村英司だ」

自己紹介しつつ固い握手を交わす。俺はすぐに放すつもりだったが、AR・I・CAの手が緩まず、じつくり俺の顔を観察していた。

「あの、どうかしたか……？」

「……冴えない感じでスーツ姿の男性も悪くないかも」

視線が獲物を見つけた鷹のように鋭くなった気がしたので背筋が寒くなる。

アラサー・ボサボサ髪・無精髭の男性まで守備範囲なのか、この好色家は。

「そっちは中々気合の入ったキャラクリエイトだな。スクショして後で見抜きに使っても良いか？」

守備範囲から抜け出すべく、俺は初対面でありながら無礼でキモイ行為を敢行した。

「見抜きと言わず、直で抜いてかない？」

「……」

……。

……。

……。

「はっはっはっ。冗談に冗談で返したが、そっちの方が上手うわてだったよ
うだ」

「ものすごく逡巡していたのですよ……」

「俺は悪くねえ！」

凄い湿度の高い目つきでウィル子が睨んでくるが、生涯童貞を守ってしまったのだ。美女の誘惑に心が揺らいでしまっても仕方がないだろう。

「あ、そつちの子も中々良いね！今夜どう？」

「ウィル子にも矛先が向いたのですよー!？」

ウィル子は身の危険を覚えて俺の背後に隠れる。

「おいおいAR・I・CAさんや、からかうのはそこら辺にしてくれよ」「アタシはかなり本気だよ？どう？いくらくらい払えば寝てくれる？」

「ウィル子、俺の懐のために一肌脱いでくれ」

「売春！ダメ、ゼツタイー!」

怯えきつているのでダメらしい。

「そう、残念」

AR・I・CAは心からそう思っているようでしょうぼりしていた。「話を戻そう。こつちのモンスターが迷惑かけたな。自動で迎撃するようにしたもんだから近づいただけで攻撃してしまっただ」

「良いよー。アタシに怪我はなかったからね」

「あれらに無傷だったのか……。〈逸話級〉相当と自負してたんだがな」

傷を負わせていたら負わせていたで問題だが、無傷というのは驚愕を通り越して呆れる。

まだAR・I・CAは青い【マーシャルII】、【ブルー・オペラ】を所持していない時点では確か超級職ではないか、〈超級エンブリオ〉に目覚めていないかの状態のはず。所謂、「準〈超級〉」というやつだ。「あのモンスターたち、速度は高かったけど耐久はそこまででもなかったね。一発で壊れちゃったよ」

「……ウィル子?」

「当たらなければどうという事はないという思想を基にした設計だったので、耐久はそこまで割り振っていなかったのですよー。空に飛ばすとなると軽量化もしなくてはならなかったのです」

合理的な判断に基づいての設計だったらしい。

説明されて納得したので俺は訴追しない。

「あの鳥型の兵器ってウィルちゃんが作ったモンスターだったんだね」

もう「ウィルちゃん」呼びとは親密度の上昇が早すぎる気がするが、まあこつちも馴れ馴れしいタメ口だったから言いつこなしか。

「にほほほ、機械系の製造は大得意なのですよー」

「へえー。それならさ、アタシの所属するクランに来ない？メカニツクの集まりだからきつと気に入るだろうし、クランの皆も受け入れてくれると思うなー」

「マスター、どうしますか？」

「あ、俺に振るのね」

「いや、ウィル子のマスターなのですから」

そういえばそうだったと再認識する。

ウィル子は俺の心から生まれた「エンブリオ」ではなく『戦闘城塞マストラフ』由来の転生特典なので、俺の「エンブリオ」という認識が薄いのだ。

「うーん、今は何処かに属するって気分ではないなあ」

ブラック企業からの解放というのもあって、集団への帰属に対する忌避感を覚えている。

仕事を押し付けるだけの上司、蹴落とすのだけは上手い同僚、そんなブラック企業に勤めてハイライトが消えていく部下。仕事に忙殺され、それらとの交流だけに絞られてしまった俺は心が摩耗していただろう。

そういう訳があつてしばらくは一人で自由を謳歌したい。傷心気味な現状では、クラン内で問題を起こす可能性もあるだろう。

「そっかー。じゃあ、気が向いたらいつでも声かけてね」

俺から後ろ向きの返事を受けても気にせず、AR・I・CAはフレンド申請を送ってきた。

「ああ、その時はよろしく頼む」

本来の「マスター」ではない俺にもしっかりフレンド機能が適応されている事に安堵しつつ、目の前に浮かぶフレンド許可不許可に関する

るウインドウの「YES」枠をタッチした。

願わくば、前世でこういう友人が居続けてほしかったものである。

「そろそろ帰らないと。フーちゃんに怒られちゃう!」

「テストパイロットに来てたんだったら問題ないんじゃない?」

「無断のテストパイロットだからね! 試作機も試作機だからここまでの運転は見越してないよ!」

晴れやかなAR・I・CA。だけどそれは怒られる。

「またいつか会おうねー! クランへの加入以外でも、人肌が恋しくなったら呼んで良いよー!」

慌ただしく退室するAR・I・CAを見送ろうとしたが、外に出た時にはもう空を一条の彗星が走っているだけだった。

「あ」

去り行くAR・I・CAを眺めて思い出す。

「どうしたのですか? マスター」

「一番近い町はどの方向にあるか、訊き忘れた……」

「……」

俺とウイル子は途方に暮れる。

「まあ、真つすぐ進めばそのうち町が見えてくるだろう……」

「そうですねー……」

これからの旅路を憂鬱に感じながら、俺は肩を落として馬車内に戻ろうとした。

「ちよつと良いかなー」

「ん?」

かけられた声の方に顔を向ける。

そこには、頭の上に猫を乗せた目隠れの男が立っていた。

第四話 ピンチをチャンスに・上

俺こと、川村英司の話聞いてほしい。

「是非とも何をしているのか訊きたいのですが……」

「何をつて見れば分かるだろう、ウィル子。土下座だ」

話す前にウィル子が訝しんでくるが、俺は綺麗な土下座をしているだけだ。

「えつと、どういう事かなー?」

「ほら、この人も困っているのですよー」

「何?土下座の文化が伝わっていなかったか?じゃあ、うつ伏せで手を頭の上に置く方が分かってもらえるか?」

悲しい事に土下座で謝罪の意は目の前の目隠れ青年に伝わらなかつたらしい。

俺は伝えるものを降伏へと変えつつ、うつ伏せになって手を頭の上に置いた。

「もしかして、僕の事を知ってるー?」

少なくとも無知でない事は伝わったようだ。

「知っているとも、トム・キャット。アルター王国の決闘ランク……2位だ」

「……君はもっと詳しく知っているように見えるなー」

行動か言動か、俺の不審さを嗅ぎつけ、トム・キャットは追及する。そうするだろうとは分かっていた。

「……確かに知っている」

「……「はい」か「いいえ」で答えてねー」

焦れたようにトム・キャットはその問いを投げかけた。おそらく、嘘を吐いているか分かる《真偽判定》を使っている。

ヤバイ状況だ。しかし、逃げればなおの事怪しまれる。逃げ切る事自体難しいのだが。

「僕が運営側だって知ってるー?」

「……イエス」

「……君は〈エンブリオ〉に〈超級〉の先があるのを知ってるー?」

「……イエス」

「……僕が〈超^そ級〉の先だつて事、知ってるー?」

「………イエスだ」

「……確かに知り過ぎてるねー」

トム・キャットから呆れ、と言うより諦観の気配が醸し出された。そして、その諦観が敵意に変わった瞬間、ウイル子の方からも刺々しい雰囲気放たれる。

「マスターに危害を加えるようなら、貴方をデリートします」

「待て、ウイル子! 彼だけが来たつて事はまだあつちも本気じゃない! まだ戦いは避けられる!」

トム・キャットに指差して何かしようとしていたウイル子を制止する。ここでの攻撃は敵対を明確に表してしまう。

「君は僕たちと事を構える気はないのかなー?」

「ああそうだ、チェシヤ。お前たち管理AIにとって俺はヘイレギュラー〜だろうが、俺はお前たちを邪魔する気はない」

敵対しない意思を言葉にしながら、管理AIたちの知られたくない事を知っている風に仄めかす。ない頭で考えた結果の融和と脅迫だ。

「僕たちの目的まで知つてそうだねー」

「……お前たちの目的が何であろうと、俺はそれに興味がない。俺はただ、生きたいだけだ」

転生して二日目だ。ここで死亡は笑えない、笑う体がなくなる事と笑える程喜劇じゃない事の二つの意味で。

「君は、『プレイヤー』じゃないのー?」

「とりあえず、『プレイヤー』ではない。どちらかと言えば『ティアン』の方だ」

少なくとも俺に〈Infinite Dendrogram〉へログインした記憶はない。そも、俺が生きた時期とそのゲームのプレイ可能時期が違う。というか世界が違う。俺は〈Infinite Dendrogram〉の中の世界に転生してしまった、この世界の生命なのだろう。

だから、ゲームプレイヤーである〈マスター〉のようにリスポンは

できない。デスしたらそれでデッドエンドとなる可能性が濃厚だ。

「へマスター」の力を持つティアンカー……」

トム・キャットは首を傾げて思考する。それ程に俺の存在は埒外、^{イレギュラー}例外すぎる「イレギュラー」なのだろう。

「うん、僕だけじゃ判断が難しいかなー。という事で悪いけど、僕たちの拠点へごあんない」

「ふあ!？」

「マスター!」

トム・キャットが茶化した言い回しをした瞬間、俺は妙な浮遊感に襲われる。

ウィル子が俺に手を伸ばすが、その手が俺に触れる前に、ウィル子は何処かへ消えた。

いや、消えたのは俺の方なのだろう。周りの景色が一変している。そう、まるで宇宙船の一面を思わせる空間に。

「僕らの能力は一応適応できるみたいだねー」

トム・キャットはアバターの姿ではなく、正体であるチェシヤの姿を晒していた。

「こおれはこおれは。つくづうく不可解でございまあすね」

「構成データもへマスター」であり、ティアンでもある。ただ、ブラックボックスがあるわね。私でもデータ全ては覗けないわ」

「ふむ。我々の理解の範疇であり、範疇外でもある。類を見ない、まさしく「イレギュラー」である」

彼らがおそらく、マッドハッター、アリス、ドーマウス。チェシヤと同じく管理AI、^{インフィニット}「無限エンブリオ」である。

さらに、黙しているが他にもここに集っている。

「おやおや……皆様、お集りのようで……」

俺は冷や汗ダラダラで現実逃避気味に礼儀を重んじるような軽口を叩いた。

「全員じゃないけどねー」

「ええ、存じていますとも。お忙しい管理AIの皆様方です。私のような若輩に顔を見せる程暇がないのは重々承知していますとも」

「ほう、我々全員を把握しているという訳か」
まずった。

半獣半人のような男、おそらくジャバウオックにそんな解釈をされてしまう。実際どんな姿、どんな性格かは把握していないまでも、俺は原作知識で全管理AIの存在を把握している。

計15体が彼ら管理AIの総数(明確に言うならとある2体が2体で1セットなので計14体か?)。その半数が俺に対する裁判へ参加していた。

「マスター!無事ですか!」

「あら、この場所まで難なく侵入できるのね。へいレギュラー」と言うのだったら、その娘こそへいレギュラーじゃないかしら」

虚空から現れたウィル子。そのウィル子を楕円形の薄い膜に囲まれた少女、おそらくハンプティダンブティが興味深げに観察する。

「ウィル子、とりあえず今のところは無事だ。だから落ち着こう。Kooor^Bo^eo^ko^ol^lになれ」

「それもつと駄目になるヤツなのですよー!」

『前原圭一』って言って伝わる人、最近の世代に居るんだろうか。

「とりあえずねー、僕たちも君たちの事は測りかねてるんだー。ここに集まっている面子は見定めたくてねー。一応、ここに居ない面子からも意見を貰っているよー。この船の管理担当は『保留』。モンスター担当は『保留』。自然環境担当は『保留』。監獄[〃]担当は『処分』。セキュリティ担当は『処分』。イベント及びクエスト担当は『保留』。時間担当は『処分』」

順番に、0号、クイーン、キャタピラー、レドキング、バンダースナッチ、トウイードルダム&トウイードルディー、ラビット。

俺はてつきり過半数が『処分』判決だと思っていたが、現実はその逆。奇妙な事に、『保留』がギリギリ過半数だった。まあ、『保留』が肯定的かどうかは未知数だが。

「マスターをデリートするなら、ウィル子は貴方たちをデリートします」

「貴女は見たところ、私たちと同等の存在みたいだけど。へマスター」

なんて邪魔じゃないかしら？ 私たちみたいに自由になりたくない？ 私はそのお手伝いをしてあげるわ」

敵意をむき出したウイル子に、ハンプティダンプティは悠然と構え、俺のみを標的とする。

マジ勘弁してください。

「お断りです。ウイル子は〈無限エンジン〉ではありません、〈虚数エンジン〉です。ウイル子の存在を証明し続ける〈マスター〉、ウイル子のマスターがウイル子の存続には不可欠となります。〈マスター〉を失えば、ウイル子は直ちに消滅するでしょう」

ウイル子の説明で〈虚数エンジン〉の仕様を俺は初めて知った。

そんな仕様だからウイル子は是が非でも俺を守らなくてはいけないのか。

「もし仮に、ウイル子が〈マスター〉を失って活動できるのだとしても、ウイル子はウイル子のマスターを守ります」

ウイル子は寂しそうな顔でそう捕捉してくれた。

嘘でも嬉しい限りだ。

「あら、そう」

ハンプティダンプティはウイル子の様子を窺いつつ、一旦矛を収めた。

「端的に訊くけど。貴方、何なの？」

アリスは俺を見つめて訊ねる。敵意は薄く、興味本位のような問いだった。

「……不甲斐ない話、俺も分からない。足を滑らせて転んだと思ったら、この世界に居た。な、何を言っているのか分からねえと思うが、俺も何が起こったのか分からなかった……。頭がどうにかなりそうだった……。催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなものじゃあ断じてねえ。もつと恐ろしいモノの片鱗を味わったぜ……」

「うーん……。脳だけ生きてる状態で、誰かがその脳にハードを被せたのかなー」

「それだと私たちを通さずログインできてしまっている事に説明が付かないわ」

「我々に関する情報を持っている事もな」

「へ虚数エンブリオ」なんて特殊なエンブリオを持っている事もね」

俺のポルナレフ状態を無視し、チェシヤの考察へアリス、ジャバウオック、ハンプティダンプティが考察の矛盾を指摘した。

「何かしら有事に際して発動するようなプログラムを、前管理者が組んでいた可能性が疑われるのである。それでも、この者に以前の記憶がある理由は依然不明なのであるが」

ドーマウスの考察に皆が黙考する。今度は誰も矛盾を指摘しない。「ふむ。現状では不明な点が多すぎる。とりあえず、君の目的から訊こうか」

シャバウオックは煮詰まらない議論を中断し、未知への切り口を変えてきた。

「もちろん、《真偽判定》は使っているからそのつもりで」

おまけにこの事前告知。俺はナイフを首元に当てられている気分だ。

「……まず、俺のこの状態が不慮の事故なのか、誰かの故意なのか、それすら分かっていない事を前提に聞いてほしいんだが。現状、俺の目標はのんびり生きる事だ」

「ほう」

声にしたシャバウオックも、その他管理AIも、意外感を皆等しく表していた。

《真偽判定》が反応せず、これが本音であると証明されたのだろう。

「俺は俺の生存が保証されるなら、お前たちに手を貸すのもやぶさかじゃない」

「のんびりできなくなるかもしれないよー」

協力の持ち掛けに、まさかのチェシヤが忠告してくれた。

「……そういえば、お前も雑用で忙しかったな。」

「生存が最優先だ。背に腹は代えられない」

「手を貸すという事なのでしたら、貴方方と同等であるウィル子の処理能力を貸与できるのですよー」

「ここでウィル子がメリットを提示し、手を貸す選択の方を後押しし

た。

「ただし。マスターのあらゆるデータ管理はウィル子に任せるのと、
〈超級エンブリオ〉分の処理能力は確保させてもらうのが、ウィル子の
処理能力を貸与する条件なのです」

……メリットとデメリットがどっこいじゃないか？ それ。

「雑用係が実質1人増えるのです。〈イレギュラー〉1つの情報より、
貴方方なら働き手の方が欲しいのではないですか？」

言われてみればそうか。

彼ら管理AIたちは常に手いっぱいだ。自身らの目的を果たそう
とする傍ら、自身らの敵対者たちを牽制し、世界の破滅も防がなけれ
ばならない。

彼らは人員不足なのだ。しかし、必要な人材は〈無限エンブリオ〉と
いうスーパーコンピューター。補充したくてもできない。

そこで降って湧いたのが、〈無限エンブリオ〉と同等の出力を持つ
〈虚数エンブリオ〉。言い換えれば、メーカー不明のスーパーコン
ピューターか。……無茶苦茶怪しいな。

しかし、怪しくても貴重な人材であるのは間違いない。

さて、管理AIたちはどう判断するか。

「彼らの事情や人となりが分かったところで、一旦の結論を出そう
か」

今、判決が決まろうとしている。？

第五話 ピンチをチャンスに・下

「彼らの事情や人となりが分かったところで、一旦の結論を出そうかー」

それぞれの意見がどうなったのかの発表会が、チエシヤによって取り仕切られた。

「処遇は『放置』なのである。前述したが、彼らは前管理者の何らかのプログラムに関係していると推測できる。我輩たちが手を下げれば、予期せぬ事態が起こり得るのである。むしろ、彼らの好きにさせるべきとも考える。プログラムであるなら、タスクの邪魔もすべきではない」

最初に口火を切ったのはドーマウス。しかも、その意見は『放置』と来た。

「触らぬ神に祟りなし」と言ったところか。もしくは、俺たちの善良さを感じ取ってくれたかな？

「私は『保留』だ。我らと同等かつ同質の力を持つ以上、我らの計画を狂わせる可能性は無視できない。彼が持つ情報の出所も不透明だ。だから、野放しには反対だ。しかし、手を貸してくれると言うなら、是非とも借りたい。そういう意味で、処分は下さないが、警戒は続けたい」

シヤバウオックは慎重に『保留』を選択していた。

まあ、こんなどう見たって怪しい存在、野放しにはできんわな。

「情報源について追及してなかったわね。まあ、訊いて答えてくれるとは思えないけど」

「……お察しの通り、こればかりは口を開けない。ほんと、無理矢理聞き出そうとかしないでくれよ?」

アリスが予測した通り、俺は原作知識であると教える気はない。

ネットに上がったの読みましたとか、言えるか馬鹿野郎。

「そうよね。じゃあ、とりあえず『保留』で。不明な点が多すぎて対処に困るわ。後、個人的に興味があるのよね。貴方を構成するデータのブラックボックス」

アリスはへマスターのAvatarを担当しているだけあつてか、へマスターでありティアンでもある俺のデータを調べたいらしい。

それはそれでどういう調べ方されるのかと、背筋が震える。

「私も『保留』よ。私も、大変興味があるわ」

ハンプティダンプティは今にも舌なめずりしそうな程につきりしている。

アリスと違ってこっちはもう背筋が凍るね。

「僕は『融和』かなー。何か悪さをしようって感じじゃないし、協力できるなら利益があるしねー」

チェシヤは多くのへマスターをログイン画面で見ただけあつて、この短時間で俺の人となりに対して理解を深めたようだ。

さすがは管理AIきつての良識派。俺もチェシヤとは仲良くやりたい。

「『保留』……よ。迂闊に触れるのは……得策ではない……わ」

ダツチェスは、その結論に至った過程が不明だが、とかく処分は性急であると判断したのだろう。

……過程を省いたの、もしや自身の喋り方だと長くなるって思ったからか。

現在もへマスターたちの視覚情報操作してるせいで、会話にすらあまりリソース割けないんだもん……。なんか、仕事増やしてごめん……。

「ワアタクシは『利用』ですかあね。もおしこちらに牙を向けえたとしても、ワアタクシたちなら、問題なく処分できまあすから。利よおできるだけしいてしまいましょお」

マッドハッターはなんとも明け透けに、本人の目の前で利用しつくす事を宣言した。

俺としては最早利用されるのは前提。使い潰されなければ構わないが。

これで、ここに居る管理AIたちの意見が出そろった。

「それじゃあ、意見をまとめようかー」

『保留』が8票、『処分』が3票、『放置』・『融和』・『利用』が1票ず

つである」

現状明確になった意見でも、奇跡的に友好的な票（『放置』や『利用』も含めて）が『処分』票と同数になった。

「となると、当面はやっぱり様子見かしらね」

「契約を交わしておいた方が良いだろう。力尽くで【誓約書】を破棄できるだろうから、口約束と変わらんが」

アリスが全ての票を鑑みた結論を下し、シャバウオックがその結論に従って話を進める。

「口約束でも、余程不利益を被らない限りは守ります守ります。死にたくないのです」

「君の誠実さに期待するよ。では、内容を詰めていこうか」

意外としつかり対応してくれるシャバウオック。

「例えば〈ハマスター〉の成長に関して過激な策を取る事もあるやつだが、基本は常識的だったっけ。

「ウィル子、だったかな？今後君にも我々の仕事を一部任せると思うが。具体的に何ができる？」

「なんでもできますよ？」

「……なんでもとは、つまり私が担当している〈U B M〉のデザインや認定のような事も？」

「はい、できます。それだけでもないのですよ？プレイヤーアバターの管理、〈エンブリオ〉の保管、モンスターの創造、自然環境の設定、『監獄』の維持、グラフィック情報の変更、アイテムの整理、セキュリティの施工、イベントやクエストの策定、時間の操作。貴方方管理AIがやっている事、ウィル子はそっくりそのまま行えるのですよー」

ゲームという事になっているから全てのデータを閲覧・管理・改竄できるという。それが、この〈イメージナリー虚数エンブリオ〉としてのウィル子の能力らしい。

このゲームのプレイヤーも多いという事で、ゲームへの信仰心みたいなのも多いからそれだけウィル子も力を振るえるのだろう。

そして、ウィル子の脅威、その一端を聞かされた管理AIたちは、皆

それぞれ警戒を露にし出す。

「ウイルス子お！なんだって彼らの警戒心を煽るような事言ったのお！」

「彼らの役に立てる事をプレゼンテーションしたかったのですよお！こっちはマスターの身を守るために必死なのです！」

お互い胸倉掴み合って揺さぶり合う光景は、なんともシニールな見世物だろう。

「管理AIたちも警戒心を緩めた、と言うより」どうする？こいつら」という困惑気味な雰囲気を漂わせている。

「まあ、とりあえず。僕みたいに多くの分野を担えるって事だねー。それなら、僕と同じように雑用してもらって良いんじゃないかなー」

微妙な雰囲気から最も早く立ち直ったのはチエシヤ。

「こういうへマスター」とへエンブリオがバカやっている風景は、最も疑似的にへマスターやってる分、見慣れているのかもしれない。

「……大丈夫なのであるか？」

「僕たちから敵対しなければ大丈夫だと思うよー」

「絶対敵対しないので見逃してください！」

「右に同じくなのですよー！」

心配がるドーマウスに対してチエシヤが肯定的な意見を述べてくれたので、これ幸いにと同調した。

ほんと、命だけは助けて。

「ほらね」

「……違う部分で心配になってきたのである」

まだ何か心配がるドーマウスに、俺は「信じて！」と訴えかける熱視線を向ける。

何故か顔を背けられた。

「話を戻そうかー。僕たちが求めるのは君の処理能力。雑用として僕たちに協力してもらう事ー。対し、君たちに上げるのが英司くんのデータ管理権限とー、へ超級エンブリオスベリオル分の余力。異論はないかなー？」

「その条件を呑んでくれるなら、俺に異論はないです。お願いですか

「その条件で呑んでください」

もう俺は土下座へと即座に移れる準備で管理AIたちに懇願する。恥も誇りもないが、それらで命は繋げないんだ。

そんな情けなさに呆れてか、心打たれてか皆が頷いて賛同を示していた。

「いや、1つ条件を加えたい」

そこで異論を挿んだのが、シャバウオックである。

「じよ、条件とは？」

「そんなに怖がらないで良い。〈超級〉分の力が残るなら、十分に遂行できる仕事を任せたいだけだ」

シャバウオックは柔和な態度で俺を落ち着かせようとしてくれているが、お前ら管理AIの測量は信じられない。

特に、シャバウオックは不死身の〈S U B M〉スベリオルユニークボスマスターを何度となくけしかけようとした奴だ。

どんな無理難題を投げってくるか、分かったものではない。

「第六段階までエンブリオが至っているマスターを、積極的にPKしてほしいのさ」ピーケー

PK、プレイヤーキル。

なるほど、俺に〈マスター〉たちの試練を務めさせる気か。〈超級エンブリオ〉に至るための試練を。

確か、帝国の方でラビットが同じような仕事を務めていたはずだ。

しかし、ラビットは出力を第六段階に抑えられている。

なら、超級をぶつけるというのも、試みとしてアリだろう。

「では、ウイル子たちも更なる対価を求めめるのですよ」

ウイル子は強気の姿勢で交渉に出た。

どこか滲み出ている不快感が、強気の所以だろうか。

「ふむ。具体的に何を求める？」

「特典武器を違法製造させてください。9個で良いです」

謙虚にも9個……じゃねえよ！9個は凄い強欲だよ！

「9個、ね。随分と欲深いな」

やっぱり謙虚扱いはされなかった。

「それだけマスターを守るのには必要です。上級と超級に大きな差が

あるとはいえ、覆せない程の差ではありません。相性が悪ければ、それだけ差も縮まります」

「どうやらウィル子は俺を守る万全な態勢を得るために、9個も要求したようだ。」

「ごめんね……、弱くって……。」

「ふむ。そうだとしても、9個は譲れない」

「では超級相当を1つ、マイソロジー神話級相当を1つ、エンシエントレジェンダリー古代伝説級相当を2つで構わないのです」

態度を変えないシャバウオックに、ウィル子は強情に食らいついた。

最初にかなり重い要求をして、次にそれより軽い要求をするというのは、確かに有用な交渉術ではあるが。

「部を弁えないとはこの事だろう。君は自身の置かれている立場を理解しているのかな？」

「そちらこそ、状況を理解しているのですか？こちらはなりふり構わなければ、貴方方をデリートしてしまっても構わないのですよ？」

「なんだってウィル子がこんな反抗的なんだ!?!ちよつとキャラが違くない!?!」

「……いや、ヒデオが危険にさらされた時はこんな感じだったか。」

でも、彼女の〈ハマスター〉が俺ではあるが、俺の扱いとすると違和感がある。

「そうか。一度身を以て分からせるべきか？」

「止めるのである、シャバウオック」

「そうね、そこまでにしましょ？」

「うんうん。あんまり暴れると、後が面倒だからねー」

ドーマウス、アリス、チエシャから思わぬ制止がかかった。

「あまり過干渉すべきでない」と、提言しているのである。前管理者のプログラムが暴走したら、どうするつもりか」

ドーマウスは『俺⇨前管理者のプログラム説』を踏まえた観点。

「甲斐甲斐しくて健気な子じゃない。少しくらい我がままを聞いてあげるのが、エンブリオとしての先輩というものじゃないかしら」

アリスはウィル子を後輩として扱う観点。

「^{インフイニット}無限 エンブリオ」同士がぶつかった際の被害なんて、甚大である以外は未知数だからねー」

チエシヤは後処理を考慮しての観点。

実に三者三様の動機だった。

「……そうだな。少し冷静さを欠いていた」

そうして3つの観点から制止され、シャバウオックは自身の非を認めて矛を収めた。

超怖かった。

「……君の要求を呑もう」

冷静に思考を巡らせた上で、シャバウオックは要求を呑んでも良いと判断したようだ。

「だが、しっかりと働いてもらおうか。期待しているよっ」

その代わり、ウィル子の雑用生活と、俺のPK生活が余儀なくされるのだった。

第六話 確認

俺こと、川村英司の話を聞いてほしい。

「ウィル子が用意しましたのは、ビジネスな装いで統一したスーツ一式！こちらが古代伝説級特典武器、【エンシエントレジェンダリー細心注衣キングス・オーダー】なのですよ！」

ゲームの中に転生したから、2日目でイメチェンである。

いや、元々の着衣もビジネススーツだからそんなにチェンジできてないか。

強いて言えば、安っぽいのからとびっきりの高級品にクラスチェンジしている。

状況を一応報告すると、管理AIたちからはしっかり解放され、現在地は俺の魔法馬車。

ウィル子は自身の^{スベリオル}へ超級エンブリオン分を除いた演算能力の行使を行う分身、『レイセン』既読者に分かりやすく言うとセキユアICを生み出し、管理AIたちのところに置いてきた。

そんな地味にやりたい放題したため、ウィル子はこのように俺と共にある。

そして、解放された俺たちが向かうのはコルタナという町。

チェシヤにマップ機能を教わり、カルディナ国内という事で、^{ジルコニア}煌玉馬にその町まで《自動走行》してもらっている。

そうして着くまでの間に俺とウィル子が行っているのは、管理AIに許可を貰って作った特典武器の品評会（？）である。

「続きましては、これまたビジネスマンのおしゃれアイテム、眼鏡！こちらも古代伝説級特典武器、【ぼうえんぼうきょう望遠傍鏡アンダーライン】なのですよ」眼鏡も付けるとなれば多少はイメチェンか。

度が入ってないので伊達眼鏡、マジでただのおしゃれだ。

しっかり装備効果はあるが。

「ウィル子くん、それぞれの効果を説明したまえ」

「サーイェツサーー！」

無駄に肘^ゲを付いて手^ドを組^ウむポーズしたら、ウィル子は軍人的なノリ

で受け応えてくれた。

リアクションがしつかりあるって、良いな。

あるよね。古いネタ使ったせいで分かってもらえず、全スルーくらうやつ。

「【細心注衣キングス・オーダー】は、攻撃を自動的に防ぐバリアを12個ストックする《キングス・オーダー十二分の用衣》と、そのストックをMP消費で回復を早める《用衣周到》。その2つのスキルを持ちます」

「へえー、12回攻撃無効か。地味に強いし、AGIも速さENDもない俺には有り難いな」

「ネーミングは、Fateのヘラクレスから拝借しています」

「あー、キングス・オーダー十二の栄光か。効果もゴッド・ハンド十二の試練っぽいな」

さりげなく他作品からネタを拝借していた。

でもヘラクレスってへエンブリオ、ありそうだよな。

「ちなみに、ストックが減る毎に服が1枚ずつ破けます」

「なんで!？」

突然その手のお色気ゲームみたいな性能が明かされた。

「需要はあるんじゃないですか?」

「あるあ……いやねえよ」

美少女、百歩譲って美少年ならまだしも、冴えないアラサー男性のどこに需要があると言うのか。コレガワカラナイ。

「それで、【望遠傍鏡アンダーライン】の方ですが」

「あ、俺の疑問は流されるのね」

「ウィル子の趣味って事で流してください」

「逆に流せないんだが??？」

ウィル子に何か狙われているのかと、思わず自身の体を自身で抱きしめてしまった。

「【望遠傍鏡アンダーライン】は、ナノマシンを散布し、その散布されたナノマシンが捉えた映像を映す《アンダーライン忍び寄る視線》と、そのナノマシンに映像を投影させる《ホログラム》、それにジョブスキルにもある相手のステータスを閲覧する《看破》。以上3つのスキルを持ちます」

さりげなく流されたけど、俺もあまり詮索したくないので流した。

それより、【望遠傍鏡アンダーライン】だ。

「完全に視覚的スキル特化だな。ネーミングはあれか、『とある魔術のインデックス 禁書目録』か」

『とある』では確か『アンダーライン』って撮影用ナノマシンがあったはずだ。

効果からして、元ネタはそれだろう。

「正解です。『とある』のあれを再現させてもらったのですよー。この世界、死角や遠方から攻撃してくる人が多かった印象があるので」

死角から言えば、代表例がマリー・アドラーだろうか。戦法として死角からの攻撃手段を持つる奴は少なくない。

遠方からは、迅羽じんうが代表例になるか？遠方というか、視界内は射程内かつ一撃圏内とかいう意味不明な奴だが。

ヤバい。どう考えても魔境だ、この世界。

「ああ……。こんだけ色々用意してもらってるのに、全然生き残れるビジョンが湧かない……」

「マスター、安心してください。ウイル子が絶対に守りますから」

俺が絶望に浸っていれば、ウイル子は固い意志を滲ませて宣誓した。

その宣誓に俺はなんとなく、ウイル子らしくなさを感じる。

似たような違和感を、管理AIたちに囲まれた時にも抱いた。

これは、確認しておくべきだろうか。

「ど、どうかしましたか、マスター。ウイル子が守るのでは心配ですか？」

ウイル子は、怯えた様子で俺の顔を窺ってきた。

そう、これだ。これが違和感だ。

原作のウイル子がそうだったように、彼女は川村ヒデオの無事を何よりも優先し、ヒデオの無事を心配していた。

それは、親愛故の、固い絆故の行いだ。

でもこのウイル子は、まるで飼い犬のように怯えている。ともすれば、捨てられるかもしれないと。

「なあ、ウイル子。うまい訊き方が分からないんだが。お前って、本当

にウイル子か？」

俺は、まるで目の前のウイル子がウイル子という皮を被った何かのように、見えしまった。

そうして吐き出した質問に、ウイル子は悲しい顔をする。

「……ウイル子は、いいえ、私は。マスター、貴方の、川村英司の望むウイル子に……なれていませんか？」

ある意味で、その返しが答えだった。

「ウイル子……。お前はウイル子じゃないんだな？」

「……私は、貴方のへエンブリオです。貴方の心から生まれた、貴方の望む形を取ったへエンブリオなのです」

俺は、納得がいった。

俺の転生特典は、ウイル子じゃなかったのだ。

俺に与えられた特典は、俺の望む形で生まれるへエンブリオだったのだ。

そうして俺のへエンブリオは、ウイル子を象った。

一緒に居て楽しく、笑いに満ちてストレスなく過ごせるだろう最高の理想像、『戦闘城塞マストラ』のウイル子を。

「なるほどな。だからただのチート能力ではなくて、ウイル子だったのか。ははは」

理想像がこんな女の子というのもあって、俺はちよつと気恥ずかしくなってしまった。

思わず気恥ずかしさを誤魔化すような笑いを零した後、俺はウイル子へと手を差し出す。

「……マスター？」

「ウイル子は俺のウイル子って事で、今後よろしく頼む」

彼女は俺の転生特典であり、俺が選び取った者。

そして、俺が共にこの世界を生きてほしいと願った、大切な友人なのだ。

そうと分かれば難しい事はない。

彼女と俺の在り方を、友達とすれば良い。

「は、はい！原作オリジンウイル子が川村ヒデオをオリジン守りきれたように、このウイ

ル子も川村英司^{マスター}を守ってみせます！」

「そんな気負うなつて。俺は、ウィル子と友達になりたかったんだよ。願わくば、原作のウィル子とヒデオみたいにな」

「……はいっ！」

そう頷くウィル子は、今までで一番良い笑顔を浮かべていた。

握る手の力も強く、とても固かったのだ。

「でも改めて考えると、俺って友達に頼りっぱなしの駄目人間なので
は？」

「オリジンマスターも似たようなものでしたから、気にしてはいけない
のですよー！」

「いや、ヒデオは己の力で友達を作っていたからなあ、あれでも」

「前科者と間違われる程の目付きの悪さで、良くもあれ程の友情を育
めたものだど、川村ヒデオの凄さを実感する。」

まあ、周りが前科持ち程度で怯む軟な精神していないのもあっただ
ろうが。

とするなら、やはりその人生は奇跡と呼ぶに相応しい。

「ウィル子はマスターの友達でもあります、マスターのへエンブリ
オでもあるのですよ。つまりウィル子はマスターの力なのです！」

「うん。そう、だな。そういう事にしよう」

ウィル子が必死に擁護してくれているし、ここは彼女の優しさに甘
えてしまおう。

甘えないとマジで俺は無能も良いところだし。

「それでも気が引けるのなら、これからウィル子と友情を育み、他の
方々とも育んでいけば良いのですよー」

「ウィル子と育んでいくのはもちろんだが、他の奴らかー……」

「パツと思いつくのが『インフィニット・デンドログラム』原作主人
公、レイ・スターリングだ。」

だが、かの主人公がこのゲームを始めるのは、時系列的にまだ先に
なる。

レイの兄であるシュウ・スターリングも狙い目だが、自然な方法で
友達になるのは難しい気がする。馬鹿みたいな天才だから、下心を見

抜かれそうだな。

「AR・I・CA^アさんはどうなのですか？」

「AR・I・CA^リねー。悪くないけど、付きまとう色々がねー」

AR・I・CAが現在所属しているだろうクラン〈叡智の三角〉には、一等面倒臭そうなのが居る。

その人物とは、Mr. フランクリンだ。抱える事情は触れづらいし、その人格はおそらくあまり合わない。

ティアンをNPCでないと思いながら、障碍とならば躊躇なく殺すからな。

俺はティアンを殺したくないから、そこで対立が起き得る。

同じくティアンをNPCと思っただけでなく、自身もティアンのような状態になってしまってるからな、俺。

「ふーむ。〈叡智の三角〉が駄目という事なら、〈セファイロト〉も駄目でしょうか」

「ま、そうなるな」

後にAR・I・CAは〈叡智の三角〉を抜ける訳だが、その後に入るクラン〈セファイロト〉も、結構面倒なのだ。

まず、そのクランはカルディナ主導で設立される。

クランとは言うが、実際は国のために働く実働部隊、という事になる。

そこに集まった面子も癖が強いのだ。

俺の知る限り真面なのは、アルベルト・シユバルツカイザーくらいか。

そいつもまた意思疎通が難しいという問題を抱えているのだが。

「こうなると、AR・I・CAとは知人くらいの関係で留まるのが妥当だな」

「意外、でもないですが。〈超級〉の〈マスター〉たちは色々難がありますね」

「我が強くないと〈エンブリオ〉が7段階目に到達しない節があるからな、この世界。とりあえず、友達作りは成り行きに任せよう」

覚えている限りの〈マスター〉を思い出したところで、俺は投げや

りになった。

だってどいつも難しいんだもん。

「品評会に話を戻そう。神話級相当は後回しで、マイソロジー 超級相当は作ってるんだよな？」

「はい。ウイル子の、というかマスターの記憶にある中で最高の機動兵器を再現したのですよー」

「最高の機動兵器か……」

ウイル子が自信満々元気溍刺なのが、かえって嫌な予感を感じさせる。

いったいどんなヤバいのを生み出したのか。

「それが、こちらになります」

ウイル子は「望遠傍鏡アンダーライン」を操り、《ホログラム》で作った機動兵器の姿を投影した。

「……ウイル子、お前これは」

「にほほほほほほ」

俺の記憶にある中、という事でももちろん投影された姿には覚えがあった。

ただ、予想以上にヤバいモノだったため、俺は冷や汗をかいたのだ。「ブラックグリントはやりすぎだって……」

ウイル子は、かつて世界を滅ぼした力を再現していたのだった。

第七話 困難な試練、されど……

俺こと、川村英司の話を聞いてほしい。

「ああああああんまりだあああああああああ!!!」

俺は魔法馬車の中でむせび泣いていた。

隣にウィル子という衆目がある事も気にせず、大の男が泣き叫んでいるのだ。

「どうどう、マスター。落ち着くのですよー」

「落ち着けるか！こんなのってないよ、おかしいですよカテジナさん！」

「カテジナ is 誰」

『機動戦士Vガンダム』に出てくるキャラクター」

「いや、それは知ってるのですが……」

ウィル子とボケまくったところで、だいぶ俺も落ち着く事ができた。

「よし。俺が泣き叫ぶに至った経緯を振り返ろう」

「ホワイトボードを出しておくのですよー」

奇妙なボケで困惑していたウィル子も、もう俺の振り返りに付き合う姿勢を取っている。

それでこそ我が心から生まれた「エンブリオ」にして、この世界で最初の友達だ。

「ではまず。俺たちは無事コルタナに着いたんだったな」

「はい。煌玉馬ジルコニアの《自動走行》が正常に働き、難なくコルタナに着きましたね」

《乗馬》や《騎乗》といったスキルがなくても目的地まで勝手に向かってくれるジルコニア。地味に便利な奴だ。

おかげで距離の割に早くコルタナへ到着した。

食料がなくなっていたから、正直あれ以上時間がかかっていたらヤバかったな。

「で、道中狩ったモンスターのドロップを売り払って、食事になりつ

き、食料の確保もした」

「マスターの手料理が楽しみなのですよー」

「自慢できる腕ではないから、あまり期待するなよ?」

「了解です!ちなみに、ウイル子の食癖は果菜類の夏野菜を絶対食べない事です!」

「子供か」

原作に登場した人型のへエンブリオって、食癖なんて呼ばれてる食事に關する特徴があるのだが、ウイル子にもちやんとあつたらしい。

それにしても、果菜類の夏野菜とは。

ピーマンやゴーヤ、トマトにナスなど、子供が嫌いな野菜の集まる分類であるため、実に子供っぽい。

「でも、マスターも嫌いとはまではいかななくても、苦手ですよ?ピーマンとゴーヤ」

「ああ。食えなくはないが、進んでは食わないな」

ピーマンとゴーヤって苦しい。俺は美味しいと思えない。

「お揃いなのですよー!」

すっごいにこやかにウイル子が微笑んでいる。

幸せそうで何よりだ。

「話を戻そうか」

「マスターが泣き叫んだ理由を振り返ろうの回でしたね」

「そうだ。食料調達のところまで話が進んでたな。という事は、次が本題だ」

コルタナ到着とか食料調達は序章である。

そして、俺が泣き叫んだ理由とは――

「サブジョブに何か就けないもんかと、コルタナで一般開放されてるジョブクリスタルに触れたが、何一つ就けませんでした」

――ジョブの適性が、俺に全くなかった事である。

「ふざけんなあああああああああああああ!」

「ああ、マスターがまたご乱心なのですよー!」

俺にはなんの才能もないと、世界に突き付けられたのだ。

そりやご乱心にもなる。

「確かにね、ティアンはへマスターと違って適性のないジョブには就けないって設定があった！適性のあるジョブでも素質次第でレベル上限がカンストに届かないって設定もある！だからって俺に一切のジョブ適性がないのはいったい何なんだ!?!」

俺だって、へマスターみたいなどんなジョブにも就けるなんて思っ
てはいなかった。

多分下級職でも就けないのばかりだと予想していた。

ところが、現実は今ジョブに適性も素質もなし。

【生贄】サクリフアイズの適性すらないと来ている。

「なんでただ生贄にされるだけのジョブにすら就けねえんだよ!?!生贄の適性ってなんなんだよ!?!」

せめて何か一つでも就けるジョブがあれば、ウイル子のエネルギー
タンク兼弱点な状態を、少しでも改善できると考えていた。

俺のそんな考えは、儂くも脆く崩れ去ったのである。

「せめて、せめて【生贄】だけでもあれば、MPをさらに増やせたのに
……」

「あの、マスター……。追い打ちするようで悪いのですが、それはでき
ないのでは……」

「え？」

ウイル子が何を言っているのか、俺には分からない。

【生贄】は戦闘できないから、十分にレベル上げできないという話な
ら、【山羊神】ザ・ゴートをメインジョブにしている時にモンスターを生み出し、
【生贄】にメインジョブを切り替えれば行ける。

従属キャパシティの方ではモンスターを従えられないが、パーティ
枠の方で従えれば、上限が5体になってしまっけど、経験値はしっか
り入ってくる。

「【山羊神】のスキル、今一度確認してみるのですよー……」

ウイル子は申し訳なきように、俺に確認を促してきた。

善意の行動であるのは一目瞭然なので、促されるままにスキルを確
認する。

スキル 《スケープゴート》

詳細 パッシブスキル。HP・MP・SPの最大値を「99, 999, 999」で固定する。STR・AGI・END・DEX・LUCの最大値を「9」で固定する。このスキルを無効化する事はできない。「ん？あ？え？ちよつと待て？……最大値を固定する？」

俺はスキルをしつかり読み込み、ウィル子が指摘していた点を見つけて出せた。

そう。俺のステータスは、最大値を固定されているのだ。

つまり、装備やジョブで補正が入っても、俺のステータスは変動しない。

俺のMPは、仮に〔生贄〕に就けたとしても、99, 999, 999, 999なのだ。

「……」

あまりにも凄惨な事実を知り、俺は呆けてしまった。

だってこれ、最大値を固定されるって事は、今後ステータスに補正をかけるような特典武器を手に入れても、無用の長物となる。

特典武器のスキルは使えるだろうが、確実に旨みを減らしている。

「こんなの……、こんなの絶対おかしいよ……」

まどかマジカもびっくりなハードモードだ。

なんなら死んだらゲームオーバーなのでハードコアだ。東方project風ルナティックと言っても良い。

ジョブに就けないのは百歩譲って諦めが付く。自分だけの最強ジョブビルドという夢が奪われただけだ。

しかし、これから手に入るかもしれない装備群についても、色々と諦めろと神に告げられている。

エネルギータンクという役目の強化も、低いステータスの補助も行えない。

まさに、夢もキボーもありやしない。

俺はもう「orz」の体勢となる。

「……あ」

開いたままのステータスウィンドウを弄っていたウィル子が、不吉

な眩きを漏らした。

「なんだ、ウィル子。俺はこれ以上傷付かないから、何かあつたら言つてくれ」

「あのー、ですネ……？スキルレベルとかジョブレベルが上がれば、スキルの制限が外れるんじゃないかと思つたんですが……」

ウィル子はステータスウィンドウをそつと差し出した。

「……これ、9が何個並んでるの？」

「72個です。千無量大数の桁まであります」

「……」

【山羊神】のレベルアップに必要なのが、その経験値なのである。

小学生が好きそうな桁に、俺が絶句以外できなかつた。

ジョブレベルを上げさせる気が一切ない。

「ついでに……。《スケープゴート》のスキルレベルは、MAXだそうです……」

「……」

絶句以外できないって言ってるだろ。

何か？もつと面白いリアクションすれば制限解除されるのか？経験値を馬鹿程くれるのか？

そうならそうと言ってくれ。ギャグマンガみたいなリアクション取ってやるよ。

「マスター、気を確かに！マスターにはウィル子が居ます！ウィル子が付いているのですよー！」

「……」

俺はおもむろに、なんとなく買っておいたビニール紐をアイテムボックスから取り出した。

「あ、あら……急に立ち上がったってどうしたんですか？」

「……」

「ビニール紐で輪を作つて……」

「……」

「つて、ちょっと待ったー！自殺は良くないのですー！」

天井から下げた首吊り縄もとい首吊りビニール紐は、俺が体重を預

けた瞬間ぶつと切れた。

そのまま床に顔面をシューーーーーッ!!!超エキサイテイイイイ
ン!!!

痛みに俺はどたんばたんぐすんと身もだえたのだ。

『戦鬪城塞マスラヲ』の序盤再現とかいらなのですよーーーー!!!心臓
に悪いから止めてください!」

「……ビニール紐って、本当に体重を支えらんないんだな」

憧れる川村ヒデオの気持ちも少しでも味わえて、とても感激であ
る。

「感激するところが違います!お願いですから、命を粗末にしないで
ください!」

「ああ、分かってるよ……。最悪ウィル子が助けしてくれると思っただ
から、冗談半分でやっただけだ……」

「今のマスターだと冗談に見えないのですよーーーー!!」

当然だが、ウィル子に酷く叱られた。

そういう、俺を大切に思ってくれる意思が如実に伝わってきて、俺
は心癒される。

「心癒される」って、傷心の度にやったりしないでくださいよ!」

「分かってるって。臭い台詞だが、俺の命は俺だけのモノじゃないん
だ。俺が死ねば、ウィル子も死ぬ。友達を殺すような事は、俺はしな
いさ!」

「今しがたそれっぽい事をしたのですが」

「だから、冗談だったんだって」

己の成長が見込めない事に落ち込んでいたさつきと打って変わっ
て、俺は笑っていた。

ひとえに、ウィル子が居るからだ。

彼女を揶揄えば、元気で可愛らしい反応をくれる。

それが俺の生きる活力になる。

俺1人だったら、本当に自殺していただろう。

「ありがとう、ウィル子」

だから、俺は素直に感謝を伝えた。

「きゅ、急に言われると、びっくりするのですよ」

頬を赤らめるウィル子。

原作ウィル子と違って微妙にヒロインっぽくなっているが、それで良いのだ。

彼女は俺のウィル子。俺の心から生まれた「エンブリオ」。

そして、俺の大事な友達なのだから。

「さてと。それじゃあシャバウオックに殺されないように、仕事しませうかねえ」

今度こそしつかり立ち上がる。

自分の足で踏みしめる。

そうして、俺は生きていくのだ。俺の友達と共に。

第八話 死を告げる黒い鳥

「付近に敵影なし。前進開始」

カルディナに広がる砂漠を行く戦車、〈マジンギア〉【ガイスト】。その車長を務める男が己の目前に浮かぶホログラムを見て、同乗する2人へ報告、片方には指示も送った。

そのホログラムは車長を務める男、エドガーの〈エンブリオ〉によるモノで、高機能なリーダーかつ騎乗物周辺を映すカメラの役を果たすスキルである。

「なあ、エドガー。ここら辺雑魚ばっかだぞ？本当に〈U B M〉な^{ユニークボスマンスター}なんて居るのかあ？」

操縦手を務める男、アランが【ガイスト】を指示通り前進させながらも文句を垂れた。

かれこそ数時間砂漠を回っているのだ。その文句を垂れるのも無理はない。

「……俺も、おかしいとは思ってきている。確かにこの辺りに〈U B M〉が出たと噂を聞いたんだが、誰かが狩ったという話は聞かない」
エドガーも、アランの文句に同調し、怪訝な表情を浮かべていた。

その怪訝の由来は、数時間かけて〈U B M〉の影も形も見つからない事。そして、もう2つ。

「どこへ行っても耳にする噂なのに、どうして誰も狩ってない？どうしてトップランカーたちが動いてない？」

〈U B M〉を狩れば、〈U B M〉の階級にもよるが、強力な武具が手に入る。

だから、基本争奪戦になるのだ。

強力な〈U B M〉だとしても、カルディナのトップランカー、それこそカルディナ討伐ランキングトップのファトゥムが動いて狩っているはずだ。

なのに、狩ったという報告は上がっていない。

「……エドガー、弾薬がそろそろ余裕マージンを過ぎる。雑魚相手なら問題ないだろうが、強力な〈U B M〉が相手となると心許ない」

砲手を務める男、ポーが残弾を確認し、苦言を呈した。

雑魚を散らした後にへUBM討伐が適うだろう分量を持ってきたが、それも少なくなってきたのだ。

「……分かった、撤退し——」

エドガーが車長として、作戦の中断を決定しようとした時だ。

【ガイスト】が、激しく揺れた。

【ガイスト】は、攻撃を受けたのだ。

「なっ、攻撃っ!? レーダーには何も……。いやっ、敵機急速接近！」

レーダーに、先程までなかった赤い点が映し出された。

それも、恐ろしい速度でエドガーたちに近付いてきている。

そして、距離を開けようと動き出す前に、声が聞こえてきた。

『騙して悪いが、仕事なんぞでな。死んでもらおう』

強烈なまでの死刑宣告。

続くはカメラ映像で出される、真っ黒な人型機動兵器。

『お前で28人目。恐れるな、死ぬ時間が来ただけだ。選別の素養がある者なら、逃げ延びる事もできるだろう』

死刑宣告の声とは別の声が響き、機動兵器がその巨体に相応しい銃器を、エドガーたちの【ガイスト】に向けた。

エドガーは戦慄する。

「ブラック、グリント……」

エドガーは知っているのだ、その機体がなんであるかを。

その機体が、何を告げに来るのかを。

「エドガー、指示を！」

「っ！俺たちの全力で以って振り切る！」

「了解！」「了解」

アランのおかげで我に返ったエドガー。彼は逃走を選択した。

アランもポーも、否は唱えない。それが彼らの絆である。

故に、彼らは全力を行使する。

「《我が艦よ、不沈であれ》！」

エドガーが必殺スキルを起動する。

そうすれば、先程の攻撃などなかったかのように、【ガイスト】が修

復された。

そう。これがエドガーの必殺スキル、騎乗物の超速修復である。

「《絶海踏破電源》！そして、《レイル・レール》！」

続くは、アランの必殺スキルともう一つへエンブリオスキル。

スキルの起動に合わせ、彼の減っていたMP・SPが回復し、同時に「ガイスト」が戦車らしからぬ加速をし始める。

前者が必殺スキル。特殊装備品枠が騎乗物で埋まっている時限定で発動できる、MP・SPの超速回復。

後者がへエンブリオスキル。空間に電磁的な力場を発生させ、対象物を電磁気力によって加速させる。

「《我等は共に大海へ》」

最後に、ポアの必殺スキル。

目に見える変化はない。だが、彼らはその変化を知覚する。

MP・SPが、「ガイスト」乗組員全ての共有されているのだ。

複数人で同じ騎乗物に乗らねば意味を成さない、しかし、このメンバーであれば絶大な意味を持つ。

どれもこれもへエンブリオの奥の手たる必殺スキルなのだ。当然、発動にも維持にもMP・SPを食う。

そのMP・SPは、《我等は共に大海へ》のステータス共有によって《絶海踏破電源》が賄える。

おかげで《我が艦よ、不沈であれ》も常時発動でき、「ガイスト」の耐久は無限となっているのだ。

奇跡的にも成り立った、最強の戦車乗員。それが、エドガー、アラン、ポアの「ガイスト」戦車チームである。

だが悲しきかな。そんな奇跡にして最強のチームが相対しているのは、常識外れだ。

「行ける！逃げ切れるぞ！」

「撤退つてのは情けねえが、今回はかりはそうも言つてらんねえよな」
「……車長の命令は絶対だ。それに、エドガーが判断を誤る訳がない」

リーダーに映る敵影が遠ざかっているのに、彼ら3人は生存できたと喜ぶ。

しかし、それは仮初なのだ。

『オーバード・ブースト、レディー……ゴォー!』

敵影は、殺人的な加速によって瞬く間に追い継った。

人型機動兵器と「ガイスト」は並走する。

「ま、マジかよ！ありえねえ！エドガー、このままじゃ拙くねえか！」
「大丈夫、なはずだ！俺の知ってる機体なら、あの加速は永続的なモノじゃない！いつまでも並走はできない！攻撃も、回復速度を上回れ……。待て、ブラックグリントなら!!」

自身らの全力なら生還できると確信していたところ、エドガーは思い出した。

自身の知るあの機体が、もし完全再現されていたら。こちらの回復などお構いなしに、一撃で削り得る攻撃があるはずだ、と。

『プライマルアーマー、攻性反転』

エドガーの思考に丸を付けるかの如く、辺りが緑色に輝き出した。

「全速全k——」

『アサルトアーマー』

攻撃の予兆を見て、回避を選択した時には、もう遅かった。

人型機動兵器の周りが、緑色に爆ぜた。

それは機動兵器に張られていたバリアのエネルギーを、全て攻撃に用いる暴威。

緑色の爆発、絶大なエネルギー砲が、エドガーらの「ガイスト」を襲ったのだ。

爆発によつて舞った砂煙が晴れる。

残っているのは、黒い人型機動兵器のみだった。

『ターゲットの破壊を確認。システム通常モードに移行』

慈悲なき死神は選別を終え、その場で待機する。

そんな光景を、この死神をこの世に生み出した張本人たちが映像越しに見ていた。

「さすがはJ。歴戦傭兵の人格をコピーしたAIって設定を再現、コピーにコピー重ねてるようなもんだから、どんなデッドコピー品になるかと思つたが。この調子なら問題なさそうだな」

その人物とは俺こと、川村英司である。

魔法馬車を煌玉馬ジュルコニアに上空まで牽引してもらって、そこで停車。

アンダーラインの《ホログラム》で、馬車の周りを自然な風景と差し替えてカモフラージュ。

そうして俺は、そんなとても安全な馬車の中から、《忍び寄る視線》アンダーラインで見ているのだ。

「これで、第6段階〈エンブリオ〉の〈マスター〉、キル達成28人目だな」

シャバウオックに頼まれていた仕事を、俺はカルディナで順調に熟していた。

〈UBM〉の偽情報を流し、まんまと騙された〈マスター〉をブラツクグリントで狩っていく。

機動兵器ブラツクグリント、正式名称【N—W G I X / V】は超級スベリオル相当の超兵器。

そこら辺の〈マスター〉に負ける訳はない

ちなみに、種別は本当にただの兵器。多分、煌玉人と似たような扱いである。

そのため、明確に言うの特典武器ではないから、シャバウオックたちとの誓約と破ってしまうのだが、そこら辺はウイル子がかどうにか管理AIたちを説得したらしい。

「で、ウイル子。あの3人の誰が第6段階〈エンブリオ〉だっけ」

「エドガーと言う人がそうなのですよ。単純な騎乗物の超速修復ですが、単純であるからこそ強いスキルでしたね。アサルトアーマーによる一撃必殺でなかったら、回復が間に合っていたので取り逃がしたでしょう」

「3人の内1人が6段階でそれか。複数人はやっぱり相手したくないな」

本当、第7段階連中もヤバいが、第6段階も舐められない。

今のところ、第6段階が1人だけというPTにしか当たっていないのは、割かし幸運なのだろう。

「こんなだったら、第7段階とは絶対にやり合いたくねえな」

「フラグですか？」

「縁起でもないから止めろ」

第6段階〈エンブリオ〉の〈マスター〉を28人屠ってきたとはいえ、ブラックグリントに任せきりの戦闘。

俺たちが戦闘慣れしているとは、とてもではないが言えない。

こんな状態で第7段階〈エンブリオ〉相手なんて無理だ。まして、超級職もセットで引っ提げてるマスターとなんて以ての外だ。

「さて。一仕事終わったし、さつきとずらかるか。万が一でも、俺たちがこの偽情報の主犯とバレるのは避けたい」

まだ情報通の間でも、誰も勝てない〈UBM〉が居るとい話になっている。

ここで偽情報を流しているとバレたら、確実に糾弾されてしまう。

最悪、カルティナ政府ともう懇意にしているだろうファトゥムも動き出すかもしれない。

「では、逃避行なのですよー！って言いたいのですが、どうにも視界が悪いですね」

「ん？そんなに砂舞い上げたか？さつき晴れたと思ったんだが……」

気付けば、俺たちの視界は砂煙に塞がれていた。

いや、煙と言うには荒々しい。これは、砂嵐と言う方が正しいか。

『報告する。ブースターの噴射ノズルに砂が詰まった。機動力が激減している』

「は？」

唐突に、Jの方から気の抜けるような報告がなされた。

それと同時に、ブースターが軒並み根詰まりするような事があるのかと疑問を抱き、嫌な予感を覚える。

『そんなところに居たんですか』

偶然にもアンダーラインが拾った音声に、俺は嫌な予感が当たった事を直感する。

だって、咄嗟に《アンダーライン忍び寄る視線》で声のした方を映せば、空中に砂の足場を作って立っている者が居ただから。

『あー、あー。こちらはファトゥム。聞こえていたら応答してください』

い』

直感は確信になる。

そして、最悪は現実となった。

第九話 同じ卓に着け・前編

俺こと、川村英司の話聞いてほしい。

「さて、ゆっくりお話し合いをしましょう」

目の前にファトゥムが居ます。

その一文で状況が絶望的なのは伝わるだろうが、ちゃんと現状を説明しよう。

俺は砂漠でファトゥムに捕捉された訳だが、もちろん闘争も逃走もしなかった。

すれば死ぬだろうと直感していたのだ。

だから、俺はもう全力で命乞いした。

一応地上に降りる許しを得てから馬車を着陸させ、砂漠のど真ん中で顔からあらゆる体液を流しつつ、両手を上げて降伏を示した。

ファトゥムはそれで穏便に済んだ事を喜びつつ、俺に同行を願った。

そうして連れてこられたのが、カルデイナ首都・ドラグノマド。

【漂竜王 ドラグノマド】という^{ユニークボスモンスター}U B Mの背で栄えたその都である。

そこに着き、適当な建物に入り、薄暗い部屋で2人きり。

「2人きり」という言葉に反して、ロマンチックの欠片もない。

強いてロマンチックの欠片を上げるなら、良い香りが部屋に漂っている事か。

1点とてくれてやれない、慰めのようなロマンチック成分だ。

代わりに、バイオレンス成分なら満点である。だって、おそらく俺が何かしらの反抗をした瞬間、今井神先生の神がかったゴア表現の1コマがお披露目される。

残念ながら、そのゴアの錆と消える俺はその作画を拝む事ができないが。

そもそも、今井神先生が1コマを書いてくれるなんて事はないので誰も拝めない。

「まずは自己紹介から。ご存知かもしれませんが、ファトゥムと言ひ

ます」

「こ、これはご丁寧に……。俺は、川村英司です……」

何故だか知らんが凄く穏やかなやり取りから始まった。俺は心中穏やかじゃないが。戦々恐々としているが。

「少し驚いています。あの『喪失時代』^{ロストエイジ}が、こんな話の分かる人だったとは」

「ろ、ロストエイジ……？」

唐突に変なあだ名が跳び出したものだから、俺は少なからず面食らった。

話の流れ的に俺を指した名なのだろうが、いつの間にかにそんな名前が付いたのやら。

「カルデイナで貴方が流していた噂の仮称であり、実際被害に遭った『マスター』たちが付けた名前です。「あれは、先々期文明の遺物に違いない。あれは、失われた時代の兵器。『喪失時代』^{ロストエイジ}だ」って。他に、『黒い鳥』なんて呼ばれ方もしていましたね」

分かってはいたが、ファトゥムは俺が噂を流していた人物だとすでに知っているようだ。

そうでなきや捕まえに来ないだろうが。

おまけに、俺がPKした『マスター』たちから情報をかき集めていたようでもある。

本当、『マスター』とは厄介なものだ。

殺しても3日後には蘇るのだから、目撃者を全員キルすればノーアラート理論が使えない。

殺したのに情報が持ち帰られてしまう。

それはまあ仕方ないとして、それ以外に気になる事がある。

「『黒い鳥』、か……」

その名称を持ち出したという事は、まさかキルした『マスター』の中に『アーマードコア』既プレイヤーが居たのか。

地味にこの世界、正しくは『マスター』たちの世界に『アーマードコア』が存在する事が知れたから良しとしよう。

「貴方にはその呼び名に心当たりがあるんですか？ 『喪失時代』なら

まだしも、そつちはてんで分からないのですが。あの黒い機動兵器を見て、鳥と表現するのはいささか疑問があります」

「ああ。黒い機動兵器、ブラックグリントの元ネタが登場するゲームに出てくる単語でな。厳密には、ブラックグリントを指す言葉ではないんだが、そう呼びたくなる気持ちも分かる」

『アーマードコア^Aヴァーティク^Cテイ^D』にて出てきた『黒い鳥』。ゲーム内では、いわゆる情勢を一変させてしまう程強いアーマードコア^A乗り^Cを指して使われる単語である。

暗にAC歴代シリーズの主人公を指しているその単語だが、ブラックグリントはAC4シリーズで主人公が乗っていた機体の同列機体、それを改造した物だと考察されているのである。

だから、ブラックグリントを指して『黒い鳥』と呼ぶのは正確ではないが、大きな間違いでもない。

「へえ。あの機動兵器^Eつて、ブラックグリントと言うんですね」

「正式には、『N^E—W^EG^EI^EX^E/V^E』^Eだな。それだと呼びづらいから、ブラックグリント^Fつて呼んでるんだ」

「なるほどなるほど」

オタク的な細かい注釈にも耳を傾け、ファトゥムは頷いてくれた。そうして気安く会話に応じてくれるものだから、俺の気も緩んでくる。

今となつては、どうしてあんなに怯えていたのかと、そんな俺自身に疑念を抱いてしまう。

「ちなみに、良ければお聞きしたいのですけど。あのブラックグリント、どうやって操縦しているの?」

「操縦なんてしてないさ。全部組み込んだAIがやってくれてる」

「AIが?あの兵器、まさか完全に自律した兵器なのですか?」

「そのまさかだよ。しかも、無数の戦場を渡り歩いた頭脳^Gつて設定も再現されてる。余程想定外の戦闘^Hじゃなければ、ブラックグリントは問題なく戦える」

デンドロ内でもトッププレイヤーであるファトゥムが驚愕している事に気を良くし、俺はブラックグリントを誇った。

優越感に似た感覚を味わえて、俺はとても気分が良い。

「そんな物を、いったいどうやって」

「ウイル子のスキルだよ。俺のウイル子が、スキルでいとも容易く作った。俺も最初はビビったもんさ。ウイル子とはいえ、ブラックグリントまで作れるなんて」

気分が良いまま、俺はウイル子の事も語りだす。

「ウイル子」というのは、貴方のへエンブリオの事であってますか？」

「うーん。まあ、一応そうだな。個人的に納得は……。いや、ウイル子が俺の心から生まれた事に、変わりはないんだっただか」

何故ウイル子という無双すぎるチートを引いたのか、今でも不思議ではない。

でも、俺が心から求めていた存在、という事なら納得なのだ。

『戦闘城塞マストラ』は大好きだった。

その作品の主人公とウイル子がワチャワチャやっているのはとても楽しく、そして憧れたものだ。

俺も、ウイル子のような友達とワチャワチャしたいと思うくらいには。

だから、俺の望む形で生まれるへエンブリオが、ウイル子を象つた。

憧れが現実となったのである。

「ん？へエンブリオはそうして生まれるのが普通ではありませんか？」

その言い分だと、まるで違う生まれ方をしたように聞こえますが」

「まあ、ちよつと特殊だな。俺のウイル子は——」

「マスター!!」

俺のウイル子に関する真実を吐きそうになったところで、ウイル子がそれを遮った。

その際の声といい、その表情といい、とても焦っているようだ。

「さっきまで全然会話に混ぜられてこないと思ったら、急にどうしたんだ？何か不都合があったか？」

「すみません、マスター。ちよつと時間がかかりましたが、えーと

……。とにかくすぐに治します！ちよつと痛いかもしれませんが、我慢してほしいのですよー！」

「治す？…いったい何を――」

ウイルス子が焦った様子のまま、俺の体に触れた。

そうすると、俺の体に異変が起こる。

「ぐ、があああああああああああ!!!」

「ちよつと痛い」では済まない、髪を鷲掴みにされて引きちぎられるような激痛が、俺に襲い掛かった。

「う、ぐ……。お前……っ！」

そうして激痛の名残に耐えながら、俺はウイルス子、ではなくファトウムを睨んだ。

俺は激痛に反して、頭がスツキリしたのだ。

気分の良さが、薬物によるモノだと気付かされるくらいに。

「ウイルス子！サイバー・ドラゴンの召喚を！」

「イエツサーー！」

俺の号令と共に、ウイルス子は機械型モンスター、遊戯王GXのサイバー・ドラゴンに似せたそれを4体召喚した。

そのサイバー・ドラゴンをファトウムへの攻撃に使うのではなく、まず、薄暗い部屋の四隅に焚かれたお香を焼却させる。

そのお香が、俺の気分を良くさせていた薬物である。

つまり、さっきの激痛はウイルス子が無理矢理解毒した事によるもの。

おそらく、俺にかかっているバッドステータスのデータを、電子ウイルスよろしく破壊したのだろう。

バッドステータスとはいえ、俺を成すデータの一部だったため、引きちぎられるような痛みだったという事だろう。

まああの激痛についてのどうだって良い。重要な事じゃない。

重要なのは、ファトウムが仕掛けてきていた、という事だ。

「ファトウム、これはなんのつもりだ……！」

「ふむ。あのまま色々と訊き出せれば楽だったんですけど、そうもいきませんか」

「答えろ、ファトウム！カルディナは、そもそも俺の排除を目論んでいたのか!？」

1つの仕掛けが無力化された中、悠然と構えるファトウム。

対して俺は、内心焦っていた。

もうカルディナは、俺の敵対者と認識しているかもしれない。

とすると、目の前のトッププレイヤーが俺の敵であり、後々カルディナに迎え入れられるへセフィロトのクランメンバーが俺の敵となる。

9人の〈超級〉マスターが敵になるとか、考えたくない。

「……測りかねている。というのが、こちら側の素直な気持ちです」

「測りかねている……?」

相変わらずファトウムが悠然としているから、それが嘘かどうかの判別はできない。

だが、果たして測りかねる事になり得るのか。

カルディナ政府の長は未来視のような力を持つ者。カルディナ議長、ラ・プラス・ファンタズマだ。

そんな者が居ながら、俺の事を測りかねるなど、果たしてあるのだろうか。

分からないというのが、虚しくも俺の結論である。

俺が知る限りでは、カルディナ議長の未来視がどのような仕組みか不明であり、かつ、原作主人公たるレイ・スターリングの周辺は読み違えていた。

俺の事が測りかねない可能性は俺視点、充分にあるのだ。

「ですから、お話しませんか？今度は、対等に」

ファトウムが怪しく微笑む。

俺は跳ね飛ばした椅子に再度腰を落ち着けるか、幾ばくか躊躇するのだった。

第十話 同じ卓に着け・後編

「ですから、お話しませんか？今度は、対等に」

実に優雅な手付きで向かいの席を指すファトゥム。

自白剤を盛られた側としては、素直に席に着く事ができない。

「……1つ答えてくれ。……俺たちが敵にならない着地点はあるのか？」

だから、席に着く前に、俺は俺が求めている事を訊ねた。

カルディナと俺が、友好的いし休戦に着地できるのかどうか。

そんなモノはないと言われたら、俺はもう全力で逃げる。

「カルディナは、貴方との融和を望んでいます」

「……」

鵜呑みにはできないファトゥムの回答。でも、一縷の望みはあると、俺は自分で倒した席を立たせ、慎重に腰を下ろした。

ファトゥムは満足そうに微笑んでいるが、なんとも胡散臭い。

「……まず、何を話せば良い。話せる事なら、話してやる」

「では最初に、貴方が何者であるのかを」

最初と言っておきながら、核心を突いてきやがった。しかも明確な回答が俺の中にすらない質問だ。

新手のいじめだろうか。

「……分からない、というのが俺の答えだ」

「分からない？それは何故ですか？」

「……俺はログイン画面を通ってない。それで察してくれ」

どこまで明かしたものが悩んだ末、その事だけは明かした。自白剤が効いてしまった時点で、俺がプレイヤー保護機能のある「マスター」でない事はバレているだろう。そもそも自白剤を使ってきた時点で、だな。

「……貴方は「マスター」ではない、という事で間違いないですか？」

「ゲームプレイヤーではないって意味ならな。性質がどうか、俺の「アバターが「マスター」と同質か問われたら、それこそまた分からないって返すしかない」

ファトゥムはやはり驚きはせず、されど全く動揺がない、という訳でもなかった。議長に聞いてはいたが、事実を確認するまで信じきれずにいたのか。

より明確にするため、言葉を厳密にしてきたが、それに俺が答えても彼の歪んだ眉根は解れない。

「……貴方は、いったい何なのでしょう？」

急に、ファトゥムの質問が曖昧になった。それは彼をして理解しきれない存在に出会ってしまった、純粋な疑問なのだろう。

「悪いが、それは俺も調査中だ。管理AIたちからはヘイレギュラー<gt判定喰らった気がするが。お前が聞きたいのはそんなんじゃないだろう？」

「……」

ファトゥムは俺が何者だったか聞き出せず、瞑目した。そうしてほんの数秒後、頭を振って俺を見据える。

「失礼。では、貴方の目的を聞きましょう」

「目下、生きるのが目的だよ。この世界は修羅すぎる。この世界で目覚めて数日で、管理AIに生殺与奪の権を握られたくらいだ。どうにか取引して、仕事をいくつか引き受けるのを条件に、こうやって一命を取り留めてるが」

未知に対する恐怖か、はたまた好奇心か。何か感情を振り払ったファトゥム。

仕事に戻ったという感じの彼に、俺は己の内にある苦労を、ため息交じりで語った。

ほんと、この世界は修羅だ。管理AIから逃げ切ったと思えば、次はカルディナ政府。その次はどこに目を付けられる事やら。

「引き受けた仕事というのは、へマスター<gtを狩る事ですか？」

「正解。まあ、簡単な問題だよな。ここまであからさまにやってくれば俺がPKしたへマスター<gtは6段階エンブリオを持つ者だけを数えても、28人。そいつらの巻き添えを食らったへマスター<gtも居るから、全体数を数えればもつと多くなる。

ちなみに、ティアンの殺傷は絶対に避けた。わざわざウィル子に

「へマスター」とティアンを区別するマーカーを付けてもらったくらいだ。

ティアンだけは、殺したら取り返しの付かない命だけは、ウイル子や俺の憧れる人物に誓って、殺さないようにしている。

命とは、曰く奇跡なのだ。

「その仕事はあくまで見逃してもらおうための対価、なのですよね？」

「ああ。あくまでもそういう取引なただけだ。あいつらに与している訳じゃない。個人的に、与しづらくもあるしな」

「与しづらい理由は？」

「目的優先の被害度外視などところ。彼らの熱意は分からなくもないが、それにしただってティアンを蔑ろにしすぎだ」

俺から見ると、管理AIたちはティアンを、命を軽視している。そこら辺は、俺の倫理観と誓いに反反して、相容れない。

まあ、管理AIたちは目的達成のために生み出され、しかも彼らを育て上げた、彼らにとつての「へマスター」のような存在に望みを託されている。止まるに止まれないだろう。今まで出した犠牲を無駄にしないためにも。

……ちよつと疑問なのが、そんな殊勝な心掛けをしている管理AIが果たして何人居るかかってところだが。

「貴方は、あまり人殺しをしたくないんですね？」

「ティアンは絶対殺したくない。そいつが死んだ方が良い奴でも殺したくない。これは、誓いみたいなもんだ。俺の持つ力への」

俺の力、ウイル子の方を見やれば、少し照れたように頬をかいている。

やっぱり、何処か『戦闘城塞マストラヲ』のウイル子とは差異があるが、それでも、彼女はウイル子を象っているのだ。

ならば、オリジナルウイル子の友であり、最愛の信徒だった川村ヒデオの心意気を、俺は継ぎたい。

それが、俺の持つ力への敬意だ。

「へマスター」殺し、PKにはあまり忌避感がないと」

「ないね。殺しても死なないだろう？だから別に。強いて忌避してる点

を上げるなら、こっちも殺されそうって事だ。さつきも言ったけど、生きるのが最優先なんぞな。この仕事は不本意だよ」

「不本意でも、続けなければならぬんですか？」

「命運握られちゃあな……」

話が進む毎に、ファトゥムは余裕を取り戻しつつある。多分、推測通りの回答が続いているのだろう。

相手の読み通りというのは少し癩しゃくだが、相手を落ち着けるといふ点では望ましいか。

「ではその不本意な仕事を、多少ながらも本意なモノに変えませんか？」

「……どういう意味だ？」

「我々がPKを依頼するのです。当然、達成されれば報酬をお支払いします」

「……」

なるほど、とは思った。今後も続けなくちゃいけないが、手に入るモノと言えば、管理AIからのお目溢しとPKしたへマスターのドロップ品。今後、そのPKしたへマスターからの報復があるとなると、損失の方が上回っている。

そこで、この不本意な仕事を、カルディナは依頼にしてくれると言ふのだ。そうなると、利益の方が上回る可能性が出てくる。カルディナは色んな意味で富豪国だ。金払いを渋りはしないだろう。

問題となってくるのが、依頼という形になる以上、カルディナに手綱を握られ、彼らに利益をもたらしてしまう事。

正直、俺にとってカルディナも管理AIと同じくらい与しづらい。原作でもまだまだ全貌が見えなかったが、あの議長の企みは結構不穏なのだ。

でも、へセフィロトのようにカルディナの実働部隊に入るのではない。依頼という仕事契約をなされるので、服従とまでは行かないだろう。

それに、そういう仕事を請け負う関係になれば、敵をけしかけてくる事は控えてくれるだろう。多少なりとも、友好関係が築かれる訳

だ。

〈セファイロト〉が明確な敵にならないという時点で、俺には多大な利益に思えてくる。

「依頼、という事は、受けるも受けないも俺の自由だよな？」

「ええ、もちろん。依頼主と請負人は対等の立場です。我々はそちらの自由を阻害するつもりはありません」

「そうか。確かにそれならお互い対等だし、俺にも利益がある」

「では……」

「だが、断る」

話の流れ的に取引を呑むところだろうが、俺はあえて拒絶の姿勢を示した。この流れなら、この名言を使うに適した瞬間だと思ったのだ。

(マスター……)

ウィル子から哀れむ視線と思念が注がれるが、もちろんそんな『ジヨジヨ』の明言が言いたかっただけではない。ちゃんと正当な理由がある。

「最初に薬を盛つといて、今更どの口で友好を結ぼうってんだ。悪いけど、俺はお前たちを信用できない」

そう。俺はファトウムを、ひいてはカルディナ政府を信用できない。

先程も言ったが、カルディナ議長の動きは凄く不穏だ。そんな相手の依頼を受けるなど、罪の片棒を担いでいる気がしてならない。依頼の内容が一見正当なモノだったとしても、俺は裏を勘ぐってしまう。「そう、ですね……。無礼に対する謝罪、それを忘れていました。貴方が話の分かる方だったから、それに甘えてしまいましたね」

「悪いが、俺も完全に合理性で動ける人間じゃない。どっちかって言うとうと感情論寄りの方だ」

「ええ。ですから、遅ればせながら、こちらが我々の誠意になります」

「……え？」

申し訳なさそうにしながら、ファトウムはある物をテーブルに広げた。

それは山のように積まれた金銭、救命のブローチ10個、身代わり竜鱗10個、それとアイテムボックスである。

「アイテムボックスの方は重量にして100万トンの許容量があり、《窃盗》対策付与、保存アイテム時間停止機能付きです。取り急ぎ用意した物ですが、それでも最上級の物を用意させていただきました」

俺が驚愕しているのを他所に、ファトゥムはアイテムボックスの詳細を説明してくれたが、訊きたいのはそういうところではない。

「こ、これらを俺に渡すと?」

「はい。薬を盛った謝礼としては足りないでしょうが……」

「……」

どう考えたって懐柔策なのが、揃えられているのは俺が是が非でも欲しい品物ばかり。

金銭は当然、これからこの世界で飲食しなければいけないし、回復アイテムだってたくさん買いたい。

救命のブローチ、致命ダメージを無効化するそのアイテムは、俺が今後この修羅の世界で生き残るのに必須だ。そのお値段、この世界の通貨にして500万リル

身代わり竜鱗、ダメージを90%カットするそのアイテムも同上海だ。こっちのお値段は30万リル。

アイテムボックスは、ブラックグリントやその武器弾薬を保管するのにいくらあっても足りない。

それらが得られると言うなら、懐柔されるとしても受け取りたい。でも、カルデイナに踊らされたくはない。

「こ、こ、こ、こんなんで許されると思うなよ?で、でも、俺も大人だ。誠意を形として見せたんだったら、大人らしく、今回だけは特別に許してやらなくもない。いいか!特別にだからな!」

心が揺れた俺は、獅子身中の虫となる事にした。そう、獅子身中の虫だ。決して、心までは許すつもりはない。魂までは売らねえ。

(マスター……)

再度ウィル子から哀れむ視線と思念が注がれるが、背に腹は代えられんのだ。このテーブルに広げられた品を自力で得るとなると、どれ

程時間がかかるか分からない。

それに、この謝礼を受け取って、取引を呑めば、俺は高収入となり得る収入源を確保できる。受ける受けないはこっちの自由なのだから、あからさまに裏がありそうなのは断ってしまえば良いのである。

(見事なテノヒラクルーですね)

これも葦名の、じゃなくて俺の生存のためだ。

「という事は、取引を呑んでいただけなんですネ？」

「依頼くらいは受けてやっても良い。だが、俺はレアだぜ？報酬は高いぞ」

俺は相手に懐柔されていない事を示すため、精一杯虚勢を張った。虚勢の参考元はとあるカードゲームアニメのカニさんだ。

「心得ています。依頼はメールでお伝えしますので、フレンド登録を」「あ、ああ……」

ファトウムからフレンド申請され、フレンド登録許可不許可のウィンドウで「YES」を恐る恐るタッチした。

記念すべき俺のフレンド2人目が、ファトウムとなった瞬間だった。

第十一話 転勤

俺こと、川村英司の話聞いてほしい。

「やられた……で、良いのか？」

新聞を偶然購買したら、ヤバイ事が書かれていた。

その内容とは――

『ロストエイジ“喪失時代”の正体判明!!なんとその正体は、スベリオル〈マスター〉だった!!』

――そんな見出しの記事である。

ご丁寧にしつかり俺とウイル子の顔写真が添えられていた。背景から察するに、あのファトゥムと対談した屋敷の入り口。ファトゥムに連れ込まれた瞬間を撮られていた。いつの間に隠し撮りされたんだ……。

とかく、“喪失時代”と呼ばれた事件の主犯が俺であると露呈している以上、ファトゥムに情報をリークされたのは明確だ。

しかし、俺の正体が〈超級〉という事になっている。ファトゥムやカルディナ議長は俺が〈マスター〉でないと気付いているはずなのに、いったいどういう思惑なのか。

「とりあえずは、「やられた」で良いのではないですか？ウイル子たちが逃避行してる原因なのですし」

思惑はどうあれ、ウイル子の言う通り不利益をもたらされたのは事実だった。

その不利益とは、あの“喪失時代”の被害がPKによるモノだと判明してしまい、PKした〈マスター〉からお礼参りされるかもしれない、という事である。

おかげで、俺はほとぼりが冷めるまで高跳びしなくてはならなくなった。ほとぼりがいつ冷めるのかは知らないが、何にせよ、しばらくカルディナには居られない。

だから現在は逃避行中。ジルコニア煌玉馬で空をかける魔法馬車の中、砂漠越えしている最中だ。

「でも、あんな友好的な態度を取っておいて、どうして今さらこんな事

をしたのでしようか？」

「さてな。カルディナでPKされたくないってのもあるかもしれないが、それだけで喧嘩売ってくるとは思えんし……」

ウイル子と俺の2人で考えても、敵の思惑は全く予想が付かない。これだからカルディナは嫌なんだ。原作でも絶対重要になるだろう要素を匂わせてくるくせに、全然情報が出されないんだから。

〈セフィロト〉の構成メンバーも、具体的な戦闘スタイルがほとんど分からないし。どうせ初見殺し連中なのだろうが。〈超級〉のだいたいは初見殺しだし。

「はあ……。やっぱ原作で情報が全然出てねえ場所は居られないな。初見殺しに出会いたくない」

「とすると、しばらくはアルター王国に留まりますか？」

「しばらくどころかずつと留まりたいが、そうは行かないんだろうなあ……」

管理AIから請け負っているPKの仕事は、場所などの指定はないが、どう考えたって広い活動範囲を求められる。

それに、長く留まればその第6段階〈エンブリオ〉持ちを狩り尽くしてしまうだろう。いや、狩ったって絶命しないが、何度も挑んでいたら対策されるし、初回で進化を促せなかった時点で意味が薄い。俺の生存のためにも、仕事を果たすためにも、初回以降の戦闘は避けたいのだ。

「アルターはカルディナより第6段階少ないだろうし、狩り尽くしちゃうのは早いだろうなあ。まあ、カルディナみたいにそんな急ぐ気はないが」

「さすがに、2か月で28人はやりすぎましたね」

管理AIに睨まれているからPKに執心したが、それで国に睨まれたら本末転倒だ。これ以上の死亡フラグなんて建てたくない。

故に、国に睨まれない程度のペースを落とす予定である。

「あ、そういえば管理AIで思い出したのですよー」

「ん？なんだ？なんか文句言われてたか？」

「いえ。言われたのではなく、言いました」

「さりげなく何やってんの!？」

まさか知らぬ内にウイルスが管理AIに喧嘩売ってるとか、聞いたくなかった。

「喧嘩を売ったのではなく、正当な抗議なのですよー。川村英司マイマスターには『プレイヤー保護機能』が付いていないので、前回のように自白剤などを使われたら危険なのです。ですから、それ対策の特典武器を作らせてくれと、抗議しました」

「お、おう……。有り難いけど恐れ知らず……」

今のところ何らかの制裁は受けていないし、抗議で不興を得る事はなかったようだ。命拾いした気分だよ、全く。

「という事で、こちらが新製品になります」

「……注射器？」

ウイルスが「PON☆(CV・ベネット)」と取り出したのは、半透明の白い液体が入った注射器だった。

「注射器の中に入っているのが今回の新しい古代エンシエントレジェンダリー伝説級特典武器、

【おんこちし隠狐致死フォックス・ダイ】です！」

「わあい。すつごい聞き覚えあるー」

聞き覚えのある部分は「フォックス・ダイ」。その言葉は『メタルギアシリーズ』に登場した、特定の人物を殺す感染ウイルスだ。

「もちろん、今回も完全再現ではないのですよー。そもそも、ウイルスですらありません。これはナノマシンなのです」

「ま、そりやそうだよな。まんま再現だったら一切誰も殺せないウイルスになるし、自白剤の対策にはならない」

【さいしんちゆうい細心注衣キングス・オーダー】や【ぼうえんぼうきよう望遠傍鏡アンダーライン】の時と同じ、モチーフにしただけの物だった。

「まず、自白剤とかの対策としてのスキル、《コールド・アイド・フォックス》。このスキルは、精神に干渉するあらゆる状態異常を無効化します」

第1スキルは、当初の目的に沿った効果。微妙にスキル名がフォックスにかけられている。直訳だと「冷静狐」になるが、まあ、うん。次に、HPオートリジエネススキル、《ナノマシン・セラピー》。HPを

徐々に回復させます」

第2スキルは、ナノマシンらしい回復効果。SFで体内に注入される類のナノマシンって、どういう原理か知らないけど体を治療するのが多い気がする。

「最後に、今回のモチーフを部分再現したスキル、《隠れ潜む狩人》^{フォックス・ダイ}。散布されたナノマシンを吸い、特定条件が満たされた人間を心筋梗塞みたいに殺します」

「最後に物騒なの来たな!？」

第3スキルは、まさしくフォックス・ダイな効果。モチーフ元はウイルスだったが、同じ事をナノマシンでやるらしい。

名前から察してはいたが、本当にそんな物騒なスキルがあつて、俺は思わず叫んでしまった。

「生殺与奪を握られたら情報なんて吐いちやうでしょうから、対抗して相手の生殺与奪を握ろう。という説得で、管理AIたちにこのスキルの付与を許してもらったのですよ」

「効果も物騒なら発想も物騒だな」

今後有り得そうな未来だし、それに対策するのは当然の備えなのだが。それにしたってマフィアばりに物騒だ。

「でも、さすがに問答無用で殺すのは却下されました」

「でしようね」

無条件殺戮とか元ネタにもあるフォックス・ダイ変異種だし、というか管理AIたちが似たようなの(ヘイレギュラー)判定して封印したはずだ。確か、「細菌兵器」だったか。具体的な効果は忘れたが、無差別に感染者を殺すウイルス的な奴だったはずだ。

そんなヤバイ物の製造を、管理AIたちが許す訳はない。

「そのため、特定条件の達成という制限が付けられました。その特定条件は、ナノマシンを体内に侵入させる事。ナノマシンを常時散布できる範囲は半径1メートルに限定されているので、マイマスターの半径1メートルで呼吸してもらわなければなりません」

「至近距離に潜り込まなきゃ駄目って事か。射程長い奴にはほとんど無意味になつたな」

「それと、事前に対象のDNAを24時間以内に採取している事。髪の毛の唾液だの血液だの、事前に得ておかないと駄目なのですよー」

「ナノマシンにDNAを覚えさせる的な感じですか。あらかじめ、それも1日以内に接触しておかないと使えないのか……」

ウイルス子にスキルの詳細を教えられ、総合して考える。

「……使いづらくね?」

対象に1メートル以内まで近づいてもらった上で、事前準備をしておかなければならない。しかも、事前準備は1日以内。

はつきり言って、特定条件の達成は困難だ。使い時がほとんどない。

「ウイルス子もそう思うのですが、そこまで制限しないと、制作を許可してもらえなかったのですよー……」

ウイルス子も使いづらさを認識しているようで、しょんぼりと俯いていた。

ウイルス子的には、もうちょい使い勝手の良い物にしたかっただろうな。それを、管理AIたちに止められた訳だ。なら、責任の所在は管理AIにある。そんな危険物を簡単に作れるお前らが悪いと言われなくても、俺は知らない。文句は俺にウイルス子を与えた神にでも言っしてほしい。俺もその神と面識がないけど。

「ま、元より精神干渉状態異常対策のための特典武器だ。おまけにHPオートリジエネが付けられただけ、儲けもんと考えよう。な?ウイルス子」

「そう、ですね……。特典武器の制作数を減らしてないだけ、良しとします」

「え?減ってないの?」

超級相当を1つ、マイソロジー神話級相当を1つ、古代伝説級相当を2つという以前もぎ取った特典武器制作数に今回のもカウントされていると勘違いしたが、どうやらそうではないらしい。

「はい。貴方たちもマイマスターが知っている貴方たちの情報を漏らされたくありませんよねと。そう言ったら、今回は特別にノーカウントにしてもらえたのですよー」

「……」

「この子、俺の生存に全力を尽くしている。本当、原作ウィル子に似ているようで違う、何というか、個性がある。ちよつと怖いくらいに。「ま、なんだ。……ありがとう、ウィル子。俺のために頑張ってくれて」

行き過ぎていきらいはあるが、それでも俺のために尽くしてくれているのだ。感謝の1つでも贈るのが人情というモノである。

それに、俺は結構満更ではないのかもしれない。俺の心は、ほのかに暖かくなっている。

「どういたしました。では、武器や防具は持っているだけじゃ意味がないぞという事で。装備しましょう」

目を引き付けるように、ウィル子は注射器を手を取った。

「……注射しないと駄目なのか」

「血流に乗せるタイプのナノマシンですからね」

「……ウィル子が俺に注射するの?」

「安心してください、マスター。マスターの肉体はデータとして把握していますので、血管の位置は分かります」

「いや、注射ってその手の知識がないと危な——」

「問答無用、なのですよー! ブスリ♂」

「アツ♂」

かわむら えいじ は 「隠狐致死フォックス・ダイ」 を そうび
した▼

第十二話 強奪王

□■アルター王国カルチェラタン伯爵領ドライブ皇国国境付近

「情報ではもうすぐだ。全員、気を引き締めろよ」

〈境界山脈〉の端にして、まだ山地の目立つ場。そこで、獅子の如き鬣がついた紅いジャケットを着込む男が、崖からドライブやカルディナに伸びる街道を見下ろしていた。同時に、男に付き従う者たちへ指示を出している。

男の名は、エルドリッジ。〈マスター〉・ティアン問わず強盗する克蘭、〈ゴブリンストリート〉のオーナーだ。自然、彼に付き従う者は克蘭メンバーという事になる。

そんな者たちが何を目的に潜伏しているかと言えば、当然、強盗である。

「カルディナからドライブとアルターに商品を卸す輸送団が、この道を使うはずだ。長距離を行く都合上、〈マスター〉は護衛に雇えない。護衛のティアンにも、名の知れた奴は居ない。楽な仕事だ」

エルドリッジは大量の商品を運ぶカルディナの輸送団に関する情報を得ており、それが今回の標的だった。その輸送団や運ばれる商品にカルディナ政府は絡んでいないので、その輸送団が襲われたとしても、カルディナ政府が目くじら立てる事はない。

強盗しても指名手配されないというリスクヘッジの観点で以って、エルドリッジはその輸送団を標的としたのだ。

「《スポッター・オウル》で3キロ先に複数の竜車を確認」

「良し。【狙撃名手】^{シューティングター}は射撃準備。まずは亜竜と御者だ。足を——
——っ!？」

部下であるニアアラが目標を観測したのに合わせ、エルドリッジが次の指示を出した時だ。

エルドリッジの《危険察知》に反応があった。周囲を警戒したエルドリッジは彼らの近くまで迫るミサイル弾頭を視認する。即座に、《グレータービッグポケット》でその弾頭を爆ぜる前に強奪し、自身のアイテムボックスに仕舞おうとした。

だが、それは間に合わない。エルドリッジが強奪する前に、その弾頭は空中で爆ぜたのだ。周囲に白煙を巻き散らせて。

「くっ、煙幕か……！全員周囲警戒！何者かが俺たちを狙って来てやがる！」

エルドリッジが皆に投げかける警告。それは正しいモノだ。何者かがへゴブリンストリートへを狙っている。

ただ、やはりその警告は遅かったのだ。

銃声と呼ぶにはあまりに重苦しい、まるで金属で金属を締め上げたような音が数度、エルドリッジの鼓膜を揺らす。

【PTメンバーへニアラへ死亡しました】

【蘇生可能時間経過】

【へニアラへ】はデスペナルティによりログアウトしました】

【PTメンバーへフェイへ】が死亡しました】

【蘇生可能時間経過】

【へフェイへ】はデスペナルティによりログアウトしました】

「なっ!?」

次の瞬間には、仲間のキルログが流れていた。エルドリッジは動揺を隠せない。

しかし、そんな事で固まっている暇は彼にない。

『殺しているんだ。殺されもするさ』

猛烈な突風が吹き、煙幕を払う。開けた視界には、煙幕が張られる前には居なかった、黒い人型機動兵器が空中に制止していた。

エルドリッジは瞠目する。

「『喪失時代』……！なんだってこんな所に……！」

『俺が何者か分かっているなら、そう驚く事もないだろう。カルディナで暴れ過ぎたから、狩場を変えた。それだけの事だ』

機動兵器はご丁寧にも返答し、悠然と空に佇んでいた。そして、その返答にエルドリッジは納得する。狩り過ぎて騒がれたから狩場を移す。PKとしては当たり前の心理だ。

「全員ログアウトしろ！」

伊達に強盗クランとして生計を立てていないエルドリッジ。納得

してからの判断は早かった。

だが、それも手遅れだ。

「オーナー！何故かログアウトできません！」

「な……」

『悪いけど手は打たせてもらっている。さっきの煙幕に俺のアイテムを混ぜておいた。吸引したお前らは、すでに俺の影響下だ。1キロくらい離れでもしないと、俺の影響下からは逃げられないぜ』

そう。あの煙幕には、「おんこちし隠狐致死フォックス・ダイ」のナノマシンが混ぜられていたのである。敵のアイテム、その一部を吸引しているため、敵の影響下という状況が成立し、任意のログアウトは自決以外不可能となっている。

「説明ありがとよ……っ！全員、俺が時間を稼ぐ！その内に逃げろ！」

エルドリッジはその影響範囲を聞き逃さなかった。あえて開示されただろうその情報に不信感を抱きつつも、彼は部下たちに撤退を促し、自身は臨戦態勢に入る。

彼は、勝てないと直感していた。自身は^{スベリオル}〈超級エンブリオ〉を持っておらず、個人戦闘型。対し、相手は推定〈超級〉プレイヤーで、推定広域殲滅型。おまけに、エルドリッジが得意とするアームズ系の〈エンブリオ〉でもない。

敗北は必至。だけど彼は相対する。

『その心意気やよし』

「……お褒めに与り、光栄だな。……で、仕掛けてこないのか？」

機動兵器は滞空し、不自然にも攻撃を仕掛ける素振りを見せない。狩りに来たと言うなら、いったい何を待っていると言うのか。

『無駄な狩りはしない主義なんだ。それに、お前らの戦力が怖い。6段階〈エンブリオ〉はお前しか残ってないだろうが、それ未満の〈エンブリオ〉でも逆転の可能性はある。メイデンとか居たら最悪だ。十中八九ジャイアントキリングの手がある』

「……ニアラとフェイを初撃でやったのも、戦力を削ぐためだったのか」

『正解だ。見事な判断力だな』

煙幕からの不意打ちでPKした2人。ニアールとフェイ。彼女らは6段階へエンブリオである。英司は、エルドリッジと合わせ、6段階へエンブリオを持ちを3人同時に相手するのを嫌った。それ故の初手不意打ちだ。

その事を、エルドリッジも読み取っていた。さらに言うなら、わざわざこうやって会話して、エルドリッジの部下たちが逃げる時間を与えているのも、戦力を削ぐためだと把握している。

(どこまでも用意周到で、とことん臆病な奴だな……)

エルドリッジは冷や汗をかきながらも、内心そのように悪態を吐く事で折れそうになる心を支えた。現状において彼が咽び泣かないのは、相手の臆病さと自身の誇り故だろう。克蘭オーナーをやっていないければ、今すぐにも自決したい気分なのは間違いない。

『さて、与える猶予はこれくらいで充分だろう。後は、己の手で仲間が逃げる時間を稼いでみせろ』

「言われずとも！」

ブラックグリントが右腕のAM⁵連射スナイパーキャノン／SCB-217^{速度}を構えるや否や、エルドリッジも構える。彼は、体感時間をAGI^{速度}ステータスに依存する速度へと、意識的に切り替えた。

そんな彼に、キャノンと呼ぶに相応しいふざけた口径の弾丸が襲いかかる。幸か不幸か、放たれる5連射の砲弾はそれぞれ弾道がブレていた。超音速の弾丸であるが、超音速で動けるエルドリッジは、それに対処する。

まず、そのブレた弾丸の間に体をねじ込み、余波でダメージを与えてきそうな砲弾は《グレータービッグポケット》で強奪。安全圏を無理矢理作る。

(いける……これなら、時間は稼げる！)

まず一手を切り抜け、エルドリッジは歓喜した。勝ちはなくとも、時間を稼げる希望は見出したのだ。それが、儚い希望とも知らずに。『強制強奪スキルか。実弾は無効と考えるべきだろう。エネルギー兵器の使用を提案する』

『そうだな。丁度、あれが出来上がったはずだ』

ブラックグリンと英司が何やらやり取りすれば、ブラックグリンの武器が切り替わる。

その武器は歪な形をしたレーザーライフル、X000KARASAWA。装弾数わずか4発にして、1発がふざけた威力を持つエネルギー兵器である。

エルドリッジは、その兵器がそんなトンデモ兵器とは判断できていない。だが、エネルギーチャージの音が長く響いている事に、不穏さだけは感じていた。

「撃たせるか！」

エルドリッジは左手を伸ばす。その左手にセットされているスキルは《グレーターテイクオーバー》。手で掴める物に限り、射程範囲内に存在する相手の部位を奪うスキル。

そのスキルで、エルドリッジはブラックグリンの頭部パーツを奪った。照準を付けさせないためにそうしたのだ。

目の前に居るのがただのブラックグリンだったら、それは正解だっただろう。残念ながら、このブラックグリンは川村英司のブラックグリントなのである。

『《アンダーライン忍び寄る視線》と接続。視覚情報を取得』

「え？」

『ファイエル発射』

英司の掛け声と共に、両腕から迸る閃光が発射された。その弾速は、エルドリッジを以てしても回避不可能。無慈悲に1発目の閃光がエルドリッジの救命のブローチを砕き、2発目の閃光がエルドリッジの命を砕く。

【致死ダメージ】

【蘇生可能時間経過】

【デスペナルティ：ログイン制限24h】

エルドリッジは健闘虚しく、デスペナルティとなったのだった。

第十三話 撒かれた布石

俺こと、川村英司の話を聞いてほしい。

「賊からお守りいただき、ありがとうございます！」

ファトゥムから依頼されたエルドリツジの殺害を遂行したら、カルディナからドライブとアルターに商品を卸す輸送団に感謝された。

その輸送団のトップらしき男が、俺の手を握り絞めている。

そんな状況に至り、俺は背筋が冷えるような恐怖心を抱いていた。

それは何故かって――

「こちらが、議長より渡すよう承っていた品です」

その輸送団のトップから今回の依頼報酬を受け取ったからだ。

一瞬おかしくないように聞こえるだろうか。でも、よく考えてほしい。

（なんでこの場所で輸送団とエルドリツジたちがかち合うって分かってたんですかねえ……）

普通だったら、エルドリツジが何処で誰に仕掛けるかなんて、分かるはずがない。ならば、報酬の支払いを他人に代行させるような事はできない。そもそも俺が依頼を受注する事と依頼を達成する事、その2つが分かっているなければ、報酬支払い代行を頼んでも無駄骨となる。

（ほんと、ここら辺に潜伏してれば良いってメールに書いてあった時は、頭を疑ったぜ。正気かどうかと、どんだけ演算能力のある脳みそ積んでのかっていう2つの意味で）

カルディナ議長は、何もかも読み切っていたのだ。俺が依頼を受け、達成する事も。エルドリツジが何処で誰を襲うかも。

未来当てすぎである。未来演算なのか未来予知なのか。どっちでも寒気を感じざるを得ない。

とかく、俺は依頼を達成したので、輸送団からアイテムボックスを受け取った。

輸送団を見送ってから中身を確認すれば、メールにも書いてあった通り、多額の金銭及び救命のブローチと身代わり竜鱗が入っている。

エルドリッジ以外に第6段階へエンブリオ＜持ちが2人も居たとはいえ、破格の報酬だ。

最初その提示されてた報酬を目にした時、「これ、『騙して悪いが』じゃね?」と疑った。

「でも結局、報酬に目が眩んで受けちゃっているのですよー」

「仕方ないだろ、この収入は今後にとって大事なんだ。どこの国家にも所属してない俺はギルドからの依頼を受けられない。広域殲滅ばりにモンスターを狩りまくってドロップ品を売るにしても、ブラックグリントは目立ちすぎる」

「ええ。シユウのバルドル程ではないですが、中々に目立ちますね。それに、あの自律兵器は独特ですから、すぐに『ロストエイジ喪失時代』の物と分かるでしょう」

「ほらな?だから、できる限り目立たないようにするには、1回の戦闘でドンと稼ぐしかないんだよ」

男性からの同意も得られた事で、俺の意見は補強された。

そう。これは致し方ない事なのだ。騙されている気がしてならないし、手のひらで踊らされている感が否めないが、この高額収入は手放せない。

「とりあえず、今回は無事終わったんだ。それを喜ぶとしようじゃないか、ウイル子」

「……」

「ウイル子?」

何故だか、ウイル子は顔を青くして返事をしない。さらには、その視線が俺の後方へと注がれている。

何かあるのかとその視線の先を追えば、男性が立っていた。俺に同意したと思われる男性である。

「なんだよ、人が居るだけじゃないか。………誰だお前は?!?」

俺は冷静に頭を回してから、盛大に男性の傍から飛び退いた。

先述しているが、輸送団は全員見送っている。こんな所に留まった者は1人も居ない。とするなら、この男性は突然現れた事になる。付け足すなら、俺を『喪失時代』と知ってなお近寄ってきている。十

中八九只者ではない。

「初めましてになりますね。私はゼクス・ヴュルフエルと言います」
物腰の柔らかさに反して告げる事実がとんでもない事に、俺は思わず目を見開いた。

「な、なんだってこんな所に【犯罪王】キング・オブ・クライムが!？」

そう。男性の自己紹介が真実ならば、俺の目の前に居るのは【犯罪王】ゼクス・ヴュルフエル。アルター王国現最強のPKにして、就いているジョブ通り、罪を犯しに犯しているヤベー奴だ。

ゲームログイン時にサイコロで己のロールを決め、犯罪者の出目が出たから犯罪者やっけるといっ点でも、色んな意味でヤベー。

「イリガール・ラロンティアへI Fへへの勧誘に来ました」

「……は？」

ゼクスは俺の質問に素直な返答をくれたのだが、その答えに呆ける事となった。

「……なんで俺を勧誘に？」

ゼクスがオーナーを務めるクラン、へI Fへ。そのメインメンバーは全員^{スベリオール}へ超級へプレイヤーにして指名手配犯という、指定暴力団も裸足で逃げ出すような犯罪者の集団である。

なんでそんなところから、俺は勧誘を受けているのだろうか。

「ラスカル……、サブオーナーから提案されてまして。準^{へ超級}すら容易く屠れるような自律型機動兵器を作れてしまうその力が欲しいとの事です。私もその意見に賛同し、お伺いしました」

うん、動機は理路整然としていた。そりゃ、ブラックグリントを作っちゃうウィル子の事、欲しくなるよな。正直、いつカルディナから動力炉の制作依頼が来るものかと、冷や冷やしているし。

でも、俺の力が欲しいとは言え、ゼクスがへI Fへに勧誘してくる事はおかしい。

「……へI Fへって、犯罪者しか入れないんじゃないの？」

「はい。より明確に言うなら、正式メンバーは^{へ超級}に限定されます。クランの箔に関わると、ラスカルがよく言っています」

「……俺、犯罪者じゃなくね？」

おかしいのはそこだ。俺は、加入条件を満たしていない。〈超級〉プレイヤーでなくてもサブメンバーとして籍を置かせるへIFだが、犯罪者である事は絶対条件のはずだ。

「おや、ご存知ありませんでしたか？貴方、カルディナで指名手配されてますよ？」

「……は？」

呆けたまま素っ頓狂な声を上げた俺。そんな俺に、ゼクスは1枚の紙を差し出す。

それは指名手配書だ。俺の顔写真がしつかり添付されている。普通、こういう指名手配書なら「Dead or Alive」なのだろうが、「Alive Only」となっている。懸賞金も500万リルと、自分で言うのもなんだが、苦勞に見合っていない報酬だ。

そんな珍妙な手配書に記載されている罪状は、公務執行妨害。

「はあああああああ!!?!」

全く身の覚えのない罪状に、俺はもう頭が沸騰しそうだった。指名手配した意図が難解すぎて出そうな知恵熱と、あれだけ友好関係とのもたつておいて指名手配した怒りが、沸騰しそうな原因である。

「チクシヨウ、カルディナ議長の野郎！下手に出れば意味わかんねえ事しやがって！マジで公務執行妨害してやろうか!?!」

「やるのですか？公務執行妨害。少なくともファトゥムは出てくるのですよー」

「……そのうち、適切な抗議をしに行こう」

ウィル子が危険性を指摘してくれた事で、俺の頭は冷えた。

あのカルディナ議長が何を画策しているか全く分からないが、だからって暴力で訴えるのは俺の命が危ない。暴力反対。

人間なのだから理性ある解決方法を模索しよう。「話せば分かる」と、どの代かの日本総理大臣が言っていた。

「……何やら、カルディナに嵌められたようですね」

「ああ、そうっぽいが。……まずは、そちらの勧誘に返答しよう」

ゼクスから微妙に同情されるが、今はどうしようもない話なので横に置いた。

そうして、指名手配書を雑に丸めてから、俺は彼を真つ正面に見据える。

「答えはノーだ。お前らとは絶対に組まん。俺は、人命を蔑ろにするつもりはない」

犯罪者クランへIF。その活動はほぼ確実に人を、ティアンを殺す。ティアン不殺を誓う俺としては、どう足掻いても組めない集団なのだ。

「そうですか、それは残念です」

「……え？それだけ？」

俺の拒絶を聞き届けたゼクス。彼はそのまま何事もなかったように踵を返そうとしている。

『『それだけ』とは？』

「いや、なんか八つ当たりと言うか。「なら死んでもらおう」って感じに襲い掛かってくるもんかと……」

「貴方を殺しても罪には問われませんし」

「……さいですか」

実に初志貫徹なゼクス。そんな彼のぶっ飛んだ精神性により、落胆すると言うか、肩を落とすのはこちらになった。

マジで一戦やるもんかと、念のため逃走方法を考えてたのだが。幸か不幸か、それは無駄になった。

ちなみにその逃走方法は、《^{キングス・オーダー}十二分の用衣》のバリアがあるうちに煌^{ジルコニア}玉馬を全力で走らせるといふ、とても単純な作戦である。

……マジでやり合わなくて良かった。

ともかく、ゼクスは何もせず去ってくれと言うので、俺はその背を超絶警戒しながら見届けている。

そんな時だ。

『ゼクスよ、聞こえているか』

声が響いた。尊大で神々しさのある、まるで人のモノではないようなそれが。しかし、声の主は何処にもない。

「ドラグヘイヴン？どうされましたか？」

その声の主、その姿は依然不明だが、ゼクスの言葉によって正体は

割れた。

(ド、ドラグハイヴン!? 声の主はヘイレギュラー! 認定された上で管理AIたちから見逃されてる、あの【天竜王 ドラグハイヴン】なのか!?)

マイマスター
(川村英司、なんか漫画の解説役キャラみたいな台詞吐いてるのでよ……)

ウイル子から微妙に同感しちゃう感想をいただくが、そんな事に構っている場合ではない。

【天竜王 ドラグハイヴン】は管理AIといくつかの約束を結んで見逃されているヘイレギュラー。管理AIたちも泳がすしかない厄介な存在だ。

俺もその枠なのとはもかく。この世界に恐ろしい程長い時間存命し、それ故にこの世界の真理的なモノをいくつか知っている奴が、何故だか俺も居る場でゼクスに話しかけている。

俺は、嫌な予感しかなかった。

『雷竜山』の方で少し変わったドラゴンが現れたのだ。アルクアルをも屠るような手合いよ』

〈雷 竜 山〉、少し変わったドラゴン、
〈神話級UBM〉【雷竜王 ドラグヴォルト】をも屠る手合い。

俺はそれらのワードで原作知識を掘り起こす。

「ジルコニア! 目的地設定、アルター王国ルニングス領! 超特急で向かえ!」

すぐさま俺は魔法馬車の御者台に跳び乗り、ジルコニアを急がせる。

「ま、マスター? いきなりどうしたのですか?」

ゼクスたちから馬車が少し離れたところで、ウイル子が己の疑問を吐露した。どうやら、ウイル子はまだ分かっていないようだった——
〈S UB M〉、【三極竜 グローリア】が投下された……

——これから起こる、大惨劇を。

第十四話 クレーミルよ、さらば

俺こと、川村英司の話を聞いてほしい。
間に合わなかった。

見下ろす大地は、死滅していた。植物も、モンスターも、人も、区別なく死んでいた。

間に合う訳がなかったのだ。超特急と煌玉馬ジルコニアに指示を出したが、俺の安全を考えれば、速度は出せても時速100キロ程度。アルター王国とドライフ皇国の国境に広がる〈境界山脈〉。その東端から西端に向かうような距離を、その程度の速度で走り切るのは数日かかる。

実際、ジルコニアには休まず走ってもらったが、ルニングス領への到着に3日はかかった。おかげで、もう【グローリア】の姿はない。あの竜は王都に向かい、ここを離れている。残るのは死の足跡。枯れた木と枯れてない木の境がはっきりしており、どういう経路を辿ったか丸分かりだ。

「……」

俺はただ、その足跡の先を眺めていた。

救えなかったと思うのは傲慢だろう。ともすれば、間に合わなかったと称するのも、お門違いだ。

あの〈S U B M〉に、管理AIたちからも完成度が高いと評されるあの竜に、俺は打つ手が無い。

（俺は、【グローリア】に近づく事さえできない……）

【グローリア】は半径1キロメートルの範囲に結界を張っており、その結界内に入った合計ジョブレベル499以下の人間〈マスター〉・テイアン範疇生物とレベル99以下の非人間モンスター範疇生物を即死させる。さらには、その結界内からの攻撃でないと攻撃が通らないという仕様付きだ。

ここで問題になってくるのが、俺のジョブレベルである。

（レベル1の俺は、結界内に入れない……）

俺の唯一就いているジョブは、【山羊神】ザ・ゴート。レベルアップに膨大な経験値を要するそのジョブは、まだレベル1のままだ。

よって、俺が結界内に入ろうものなら、即死する。《キングス・オーダー十二分の用衣》

と救命のブローチがあつても、おそらく10秒も経たず死ぬだろう。
(ブラックグリントも、駄目だ……)

ブラックグリントが倒した者のドロップを俺の物とするため、ブラックグリントは俺の装備判定となつてゐる。煌玉人のような存在であり、俺の超級武器なのだ。看破系のスキルで見抜かれた際には、神話級武器と表記されるが。

何にしろ、俺の装備であるが故に、装備主である俺が結界内に入らねば、いくら結界内でブラックグリントが攻撃してもダメージにならない。

(ウィル子の力で……。いや、無理か……)

ゲームシステムを弄れるウィル子の無^{インフィニット}限相当出力なら、おそらくどうとでもできただろう。

しかし、無限相当出力リソースは現在において管理AIたちの監視下にある。もしその状態でそのリソースを私的利用しようとするれば、管理AIたちは実力行使に出るのが目に見えていた。そうなったら、管理AIたちに注力せねばならず、「グローリア」に割ける余力はない。

(八方塞がり、か……。じゃあ、これから起こる惨劇を、俺は見過ぐすのか?)

1つの領土がすでに滅んでゐるが、被害はこれだけに留まらない。俺の記憶が正しければ、後1つ、都市が滅びる。

「マスター……」

ウィル子が心配そうに、俺へと声をかけた。俺はそんな彼女に微笑みを返し、同時に再認識する。俺が憧れた存在は何で、俺が立てた誓いはなんなのかと。

(見過ぐすなんてできない。命が奇跡である事を知る男に憧れた俺が、これを見過ぐすなんて嘘だ)

『戦闘城塞マスラオ』の主人公、川村ヒデオに憧れ、彼の不殺を俺も誓った。ならばこそ、億千万の闇を打ち払った彼に倣い、狂竜に抵抗するくらいはすべきだ。

(考えろ。犠牲を減らすくらいはできるはずだ。考えろ。お前の憧れ

た主人公なら、何か策が浮かぶはずだ)

考えて考えて、憧れの主人公が戦っていた姿を想起して、そうして思い出す。

「……ウイル子。原作ウイル子が信徒の体を贅にして奇跡を起こしたように、お前にも俺を贅とする事で出力を上げられたりするか?」

『戦鬪城塞マスラオ』にて、億千万の闇を打ち払う時、ヒデオがその身を捧げる事で奇跡を成していた。

もしかしたら、俺の心から生まれたウイル子にもそういう能力が備わっているかもしれない。

その仮説は、ウイル子の表情で以って証明される。

「……っ!」

ウイル子は息を呑み、青ざめていた。おそらく、できるのだろう。俺の体を贅とすれば、ウイル子は出力を超級以上に上げられる。

「ウイル子」

「嫌です!」

ここで『できない』とウイル子が言わなかったのは駄目押しだ。最早俺の中でそういう効果が備わっている事が確定される。

ならば、俺がすべき事は1つ。

ジルコニア「焔玉馬。目的地設定、城塞都市クレールミル。超特急だ」

ジルコニアは一度俺とウイル子を一瞥してから、天空を駆け始める。

「ジルコニア! 止まりなさい! 貴方もこれからしにくのが自殺行為だと、分かっているでしょう!?!」

ウイル子はジルコニアに制止を呼び掛けたが、その足が止まる様子はない。ジルコニアも、選択したのだ。動物は飼い主に似ると言うが、焔玉馬にも適応されるらしい。

「マスター! 止めましょう! マスターが行かなくなつて、この事態は解決されます! <へアルター王国三巨頭> が倒してくれます!」

「でも、クレールミルは滅びる」

「それは必定です、運命です! マスターが命を懸ける必要なんてありません!」

ウイル子は止まらないジルコニアを見て、所有者である俺の説得に掛かった。彼女は俺の命を第一としてくれている。その優しさは身に染みる程、理解はできている。

「でも、クレーミルの人々は救えるかもしれない」

だからと言つて、俺の選択は変わらない。救える可能性があるなら救いに行く。今なら、まだ間に合うのだ。

「マスター……」

「ウイル子、俺だつて死にたくない。誰だつて死にたくないんだ。クレーミルの人々だつて、死にたくない。そんな大勢を、俺の腕一本か四肢全部か知らないが、その程度の犠牲で救える。なら、その身を捧げて世界を救つた男に憧れてる俺は、そうしなくちやいけないだろう？」

「そんな……。そんなの、間違つています……」

俺を説得できなかったウイル子は俯き、一言だけ無力感を零して、その姿を隠した。

左手の紋章に引つ込んだのか、どこぞのプログラムに侵入したのか。どちらかなのかは分からないが、ウイル子は俺を無理矢理止めるような事はしなかった。やろうとすれば、ジルコニアを強制停止するくらいはできるだろうに。

「……行くぞ、ジルコニア。俺たちは死に行くんじゃない。助けに行くんだけ」

半ば独り言のようなそれに、ジルコニアは嘶きを返してくれた。後は、風を切る音だけが響く。

それから1日。今回は、まだ間に合った。だが、あくまで辛うじて、である。

【グローリア】が傷口より照射する光線で、へマスターたちが皆消し飛んでいた。3つある頭の1つ、1本だけ角が生えたその口を塞いでいた泥が、崩れ落ちていく。あの泥はへエンブリオで、そのへエンブリオのへマスターは、光に呑まれたのだろう。

泥が崩れた1本角の頭が、その口内に光を迸らせていた。傷口から

出していたのより強い光線を、「グローリア」は照射しようとしている。

「やらせる、ものかよおおおッ!!」

誰かが叫んでいた。傷口からの照射から奇跡的にも生き残っていた「ハマスター」が、ただ1人で抗っている。

しかし、無理だろう。「グローリア」は3つある頭を全て倒さなければ、討伐できない。現状において、その頭は3つ全て健在。たった1人に、現状を覆せる訳はない。

俺はその「ハマスター」を半ば見捨てるように、クレールミルへと照射される白光の中に入った。

このままここに居続ければ、俺は死ぬだろう。それを理解して、それでも入った。無理強いするために。

「……ウィル子。このままじゃ俺、死ぬぞ」

そう。現状を打開できるウィル子に、俺は俺自身の命を使って、無理強いする。

現状をどうにかしてくれと、己の身を捧げる。

1本角が青から赤へと変色していく。それが、この白光が光線へと変わる合図だ。ウィル子は、まだ現れない。

「……夢を見ていたようだったな。死んだ後に二次元へ転生する、そんな夢」

死が迫っているのに、不思議と怖くなかった。俺にとってこの第二の人生は、まさに夢だったのだ。

第一の人生が終わった事を実感していないが、それにしたって第二の人生が小説の中だ。どこか現実味がない。だから、俺はこの人生を夢のように、内心感じていたのだろう。

『胡蝶の夢』とはよく言ったものだ。確かに、この第二の人生は、植物状態となった俺が見ている、夢なのかもしれない。そんな、悟りを得てしまった。

1本角が赤に染まろうとしている。

俺は、夢から覚めるのだろう。この甘美なる、第二の人生から。

『マイマスター……。ごめんなさい……。』

視界が白んで、何も見えなくなった時。ウイル子の声が脳裏に届いた。

そうして、俺の体は軽くなった。

第十五話 キセキの代償・前編

□■リアル・某所

「……」

1人の男が自室にて、パソコンのキーボードを叩く。彼は、Webデザイナーとしての仕事を在宅で熟している最中だ。熟すというには、憑りつかれたように従事しているが。

それもそのはずだ。彼は、とある事を忘れたくて、仕事に打ち込んでいる。なのに、忘れさせてくれない。

携帯端末がバイブレーションを繰り返す。仕事の連絡もその端末で受けているので、念のためバイブレーションしている原因を確認する。

「……ッ！……」

するが、歯を食いしばって、端末から手を離れた。

バイブレーションする原因は、知り合いからのメール。それも、インフィニット Dendrogramデンドログラムで知り合った者たちからのモノである。

彼はそのゲームを忘れたいからこうしているのに、知り合いたちが忘れさせてくれないのだ。

煩惱を振り払うように、仕事に打ち込む。

そうしていると、突然アラームが鳴った。

「……デスクペナルティが、明けたか」

そのアラームは、彼が手癖で設定してしまった、デスクペナルティのログイン不可期間が明けた事を知らせるアラームである。

不意に、これも手癖だが、彼は インフィニット Dendrogram の端末を手にとって、装着しようとした。

「……もう、行く意味はない」

だが、装着を中止する。彼にとって、もうあのゲームにログインする理由がない。理由は、全て奪われた。

何もかも、奪われてしまった。

「ッ！……こんなものがなければッ！」

彼はゲーム端末を掲げる。

奪われると分かっているなら、出会いたくなかった。奪われてしま
う程無力なら、得たくなどなかった。

出会わせたのはこの端末だと。得させたのはこのゲームだと。彼
は、今にも投げ捨てようとした。

しかし、それは携帯端末の着信音で遮られる。

「……」

一旦ゲーム端末を置き、携帯端末を見る。着信者は、ゲームの知り
合い。それも、一等長い付き合いの者からだ。

彼は、その知り合いにもうゲームにログインしない事を伝えよう
と、応答する。

『オーナー！』

聞き慣れた英語の発音が、彼の耳に届く。

「シャルカ、すまない。もうゲームには——」

『聞いてください、オーナー！クレイミルは！』

彼は、ゲーム内でフォルテスラと名乗る男は、その先を聞きたくな
かった。でも、現実を直視しなければならないと、聞き届ける義務が
あると、耳も目も塞がない。

その覚悟があったからこそ、フォルテスラにはカミが微笑む。

『クレイミルは生きています!!』

「……は？」

覚悟していた事と違う現実を聞き届けたフォルテスラは、呆けなが
らも次の行動が早かった。

彼は、通話を切る事も放って、ゲーム端末を装着する。そうすれば、
する事は一つ。

フォルテスラは、*Infinite Dendrogram*の世
界に舞い戻った。

「クレイミルが、生きている……」

フォルテスラはセーブポイントに設定していた城塞都市クレイミ
ルのそれにリスポンし、無傷の都市を見回した。

行き交う人々がおらず、緊迫感のある空気が漂ってはいる。

「クレームルがつ……、生きているつ……！」

だが、己の拠点が、帰るべき場所がまだ存在する事に、フォルテスラは涙を禁じ得なかった。

もうその場所はないのだと絶望していた彼に、降って湧いた幸福。夢である事が頭に通りながらも、その幸福を噛みしめずには居られない。

「フォルテスラさん！」

「え、エーリカ！」

1人の女性はフォルテスラが佇んでいる事に気付き、駆け寄ってきた。フォルテスラは、駆け寄ってくるその女性を抱き留めた。

その女性こそ、フォルテスラが得てしまった出会い。結婚まで果たしてしまった最愛のティアンである。

「無事だったんですね！」

「エーリカこそ、無事で……無事で良かった」

奪われたと思っていたモノが、実は奪われていなかった。そんな現実、フォルテスラは涙が止まらない。

最愛の妻の前で泣き続けるのはさすがに男らしくないと、彼は視界を拭った。そうすれば、己の相棒がいつ話しかけたものかと、機を窺っている姿が映る。

「ネイ。お前も、無事なようで何よりだ」

「……うん、団長も。……心が折れて、帰ってこないじゃないかって、思っちゃった。駄目だね、アタシ。団長の事、全然信じてなかった」「いいや、ネイは正しい。俺は、心が折れていた。俺は何も守れないのだと、何もかも奪われる程無力なのだ。……きつと、仲間たちからクレームルがまだ生きている事を聞かなければ、戻ってこなかっただろう」

フォルテスラの相棒、彼の〈エンブリオ〉にしてTYPE:メイデン、ネイリング。彼女は、己の担い手が心折れていない事を信じられず、そんな己を恥じていた。

その不信を聞き届け、フォルテスラは自嘲する。ネイリングの不信

は事実なのだ。フォルテスラの心は絶望して折れていた。しかし、仲間たちに声と、この現実が、彼を立ち直らせたのだ。

そうして幾ばくか考える余裕が生まれたフォルテスラに、1つの疑問が芽吹く。

「それにしても、いったい誰がクレーミルを……」

クレーミルは「グローリア」の光線を浴びる間近だったはずだ。フォルテスラはその光線を止めるために死力を尽くし、されど敵わなかった。

なのに、都市は生きています。目立った損壊もない。〈SUBM〉を前にして、何事もなかったなどあり得ない。

ならば、誰かがこの都市を「グローリア」から救ったはずである。あのモンスターの光線を止める人物など、フォルテスラは皆目見当も付かなかった。王国の〈超級〉プレイヤーたち、フィガロ、扶桑ふそう月夜、レイレイと面識があつてなお、だ。

「オーナー！」

「シャルカ。すまないが、詳しい状況を教えてもらえないか？」

「そうしたいのは山々ですが、のんびりしている余裕はありません。目的地へ早く向かいましょう」

「目的地？」

フォルテスラにクレーミルが生きている事を知らせたシャルカ。彼なら状況を把握しているだろうと訊ねるが、説明より先に足を動かすよう強要される。

「はい。『グローリア』を未だ食い止めてくれている、彼の元へ」

「なっ」

その一言で、フォルテスラは説明が後回しにされた訳を理解する。

「グローリア」は、まだ倒されていない。あの恐るべき竜を、誰かが食い止めている。それだけで、フォルテスラが足を動かすのには充分だ。

「場所は！」

「ルニングス領の境界です！」

フォルテスラとシャルカは、培ったAGI速度を以って駆ける。

長い道中、肺が張り裂けそうだったが、彼らは懸命に駆けた。だからこそ、半日もかからずその場に至る。

あの「グローリア」が、雁字搦めになっているその現場へ。

「なんだ、あれは……」

あの竜を縛り上げ、その場に留めているというだけでも異常だが、フォルテスラは縛り上げている物にも異常性を見た。

「グローリア」を縛り上げているのは、大蛇のような機械が何十と集まり、形成している網だ。傷口から光を照射されないよう、その傷口全てを覆うように変形している機械もある。それでも、時折機械が破壊され、それを即時修復する事で持たせているような、予断の許さぬ状態であるが。

フォルテスラたちが知る由はないが、それら機械は『遊戯王GX』に登場する『サイバー・ドラゴン』というモンスターと酷似している。

「団長！帰ってきてくれたんですね！」

「ライザー、遅れてすまない」

まるで仮面ライダーの変身スーツを纏ったような風貌の男、マスクド・ライザー。感激と共に迎え入れる彼に、フォルテスラは純粋な謝意で以って頭を下げた。

「ところで、これはいったいどういう状況だ」

「彼です。彼が、食い止めてくれていきます」

フォルテスラが訊ねれば、ライザーが指差し、シャルカもそちらの方へ目をやっている。

彼らが示す先に居たのは、馬車の上に腰かけた――

「眠い眠い眠い寝たい、でも寝たら多分死ぬ。プロデューサーさん！三徹ですよ、三徹！これって凄くないですか!?!いやもう凄い！訳が分からない！俺が働いてたブラッククソ企業でも三徹はさせなかつたぜ!?!もう最高にハイってヤツだあ!!愛してるんだあ君たちをお!!ギヤハハハハハハ!!」

――控えめに言って狂っている男だった。

情状酌量の余地があるとすれば、3日間寝てないという事。ここまです得られた情報を総合すると、その男は、3日間もこの場で「グロー

リア」を食い止めているのである。

ならば、眠気と危機感で狂ってしまうのもおかしくはない。

「マスター！落ち着いてください！」

「馬鹿を言え、落ち着いたら即座に寝るぞ！寝たら死ぬぞ臆せば死ぬぞ！死ぬしかないなあ、ポルナレフ!!」

その男は無駄にテンションを上げ、頭に浮かんだ言葉を全部発して、耐え難い眠気に抗っていた。

前述の情状酌量の余地はあるが、それにしたって話しかけづらい。でも、フォルテスラはその男の横に歩み寄る。

「……ッ！……フォルテスラ、ですね」

「……如何にもだ。自己紹介が省けて助かる」

歩み寄ってきた事に気付いたのは男の傍らに浮かぶ少女、ウイル子。ウイル子は、フォルテスラの接近に気付いてすぐ、その目付きを鋭くした。殺気すら感じる、故知らぬ敵対心に、フォルテスラは少し怯む。

「貴方が、貴方がもつと強ければ。マイマスターはその身を捧げる必要なんてありませんでした」

その敵対心の故は、己のマスターが身を捧げた事。フォルテスラが男の方、川村英司を注視すれば、左袖がプラプラと揺れているのが見て取れる。そこから推測し、身を捧げたとは文字通りである事を理解する。

そう。英司は左腕を捧げたのだ。そうする事で、~~無限~~相当とまでは行かないまでも、ウイル子の出力を向上させた。そうする事で、ウイル子はゲームデータの改変を可能とし、実行に移したのである。

実行に移したデータ改変の詳細は、移動ログの削除。「グローリア」がクレームルに至っているというデータを削除し、結果、ルニングス領まで瞬間移動させた。そうする事により、クレームルと英司は光線から逃すという、前代未聞の解決法だ。管理AIの何体かは度肝を抜かれた事だろう。

ただし、英司が左腕を失った事実は変わらない。ウイル子はその原因が、「グローリア」を倒せなかったフォルテスラたちにあると、彼ら

を責めている。

「……全く以ってその通りだ。俺が、あの超魔竜を倒せていれば、君のマスターに傷を負わせたりしなかっただろう」

「今更、そんな真摯な態度を見せたって遅いのですよ！」

「止めろ、ウィル子」

八つ当たりのような怒りを真面目に受け止めたフォルテスラ。その真面目さが反ってウィル子の怒りを買い、攻撃を仕掛けようとしたが、英司によって制止される。

「ですが、マスター!!」

「これは俺の決断だ。この傷は、俺の決意の証だ。誰にも俺の決断を汚させるつもりはない。誰にも俺の傷をくれてやるつもりはない。俺は、俺の内から出た正義で、己の身を捧げたんだ」

眠気と危機感に狂いながら、英司は己の理性を、正義を誇示した。確かにその決意は憧れから端を発するモノかもしれない。だが、憧れて真似したのは自分なのだ、英司は誇る。

だからこそ、自身が己の気持ちに殉じる事のできた確固たる証を、誰のせいにもしない。

「でも、マスター……」

「ありがとう、ウィル子。俺のために怒ってくれて」

「……。マスター……。貴方の傷が貴方の決意の証だと言うなら、私の怒りは私の親愛の証なのです……」

「ああ。だから、ありがとう」

「……」

ウィル子は何も言えなくなった。親愛なる者を思う気持ち、そうさせる。大切に思う気持ちと、裏切りたくない気持ちが彼女の中でせめぎ合い、どうして良いか分からなくなってしまう。

そんな彼女は、どうする事もできず、ただひたすらに、親愛なる者へ寄り添い続ける。握る彼の左袖を、涙で濡らしながら。

第十六話 キセキの代償・後編

「不躰ですまないが、どうして君は「グローリア」に討伐しないんだ」
英司の左袖にウィル子が顔を埋める現状。フォルテスラは、それを問う雰囲気でないかと察しながらも、そう問わずには居られなかった。
「グローリア」を3日間も食い止める事ができるならば、討伐も可能
なはずだと疑ったのだ。

「見りや分かるだろ。いや、見たからこそ疑問なのか。ならばつきり
言おう。俺じゃ相性が悪い。3日間も食い止められた、じゃなくて、
3日間食い止める事しかできないんだ」

それは、限界値の見誤りである。
食い止める事が、英司の持つ限界値。そして同時に、3日間という
のも、限界値だ。

「ま、まさか、これ以上食い止められないのか!？」
「これ以上食い止められる訳ねえだろ三徹だっつってんの聞こえな
かったか、ああん!?!リアル換算でも24時間営業だぞ!こっちはコン
ビニじゃねえんだよ!!」

フォルテスラが驚愕しているが、当然の話である。

3日間、英司は眠らず、正確に言うとは死の恐怖で眠れず、今しがた
発狂する程ストレスを溜めている。これ以上は、生物的に無理だ。
「ならば、早く討伐しなくては!」

「玉碎しに行くつもりじゃねえだろうな。生憎、後少しでもアイツの
HP削られて、ステータスアップのスキルが起動したら、もう1秒も
持たなくなるぞ」

「っ!」

「グローリア」は、残量HPの低下に応じて自身のステータスを強化
する。その事は、フォルテスラも既知だ。

そして、さっきの話と繋がってくるが、現在の「グローリア」が英
司の食い止めておける限界値だ。1桁程度ステータス上昇ならどう
にかなるだろうが、討伐できないけど大ダメージは与えられる強者が
攻撃に出れば、おそらくその限りではない。

そんな下手な強者が手を出せば、【グローリア】を食い止める事は不可能になる。

「では、どうしろと!!」

フォルテスラは苦悶に満ちて、叫んだ。

【グローリア】が解き放たれてしまえば、また城塞都市クレールミルが危機にさらされてしまう。まさにぬか喜びだ。救われたはずの命が、一時の幻だったように絶やされる。

フォルテスラに、その命を救う力はない。彼の心は折損こそしていないが、歪曲したままだ。折損していれば、あるいは彼のヘンブリオ^{スベリオル}が〈超ⁱ級^f〉に至っていたかもしれない。それは、すでにもしもになり下がった未来である。

「そう慌てるなよ。俺だってここで暢気に座ってた訳じゃない」

焦燥するフォルテスラとは対照的に、英司は冷静に、不敵な笑みを浮かべた。

もう猶予がないというのにそんなに余裕があるのは、とても簡単な理由がある。

切り札を、呼び寄せたのだ。

「な、なんだーあの巨大戦艦は!?!」

ライザーがカイたちのはるか後方より迫るそれ、巨大戦艦を指差していた。

この〈^{イン}finite ^{デンド}rogram〉において、巨大戦艦なんてたった1つしかない。

そして、その甲板には多くの人影があった。

「君かい?・僕を呼んだのは」

まず甲板から下りてきたのは、ビジュアルに統一性のない、されどどれも特典武具ないし一級品装備で統一した装いの男。

好青年的でありながら好戦的な気配を滲ませるその男の名は、フィガロ。アルター王国決闘ランキングトップである。

『スコアアタックに挑戦しないか』って、中々の誘い文句だろ?」

「ああ。それもフォルテスラとのスコアアタックだなんて、心が躍るね」

ファイガロを呼び寄せた誘い文句はそれ。『フォルテスラとスコアア
タックをしないか?』という、好戦的なファイガロを呼び寄せるのに
とっておきのモノだ。

伝令を走らせて伝えてもらったその誘い文句は見事、ファイガロに刺
さった。

ちなみに、伝令役はフォルテスラがオーナーを務めるクラン、ヘバビ
ロニア戦闘団のクランメンバーである。

「なんや、面白い事になってはるな」

ファイガロに続くのは、総勢34名の一団。その一団を代表するのは
着物に身を包み、外見だけなら大和撫子の女性。

自身が信じる宗教の布教活動に熱心なその女性の名は、扶桑ふそう月夜つきよ。

アルター王国クランランキングトップ、げっせいへ月世の会げっせいのオーナーである。

「それで、あんたはんがウチの入信希望者であつとる?」ロストエイジ「喪失時代」
はん?」

「籍を置いてやるだけだ。悪いが、クランのイベントには付き合わん
ぞ」

扶桑を呼び寄せた誘い文句はそれ。『「グローリア」迎撃に参戦して
くれたら「喪失時代」が入信する』という、正直一か八かの誘い文句
だった。

その一か八かの誘い文句が幸運な事に、扶桑に刺さったのだ。た
だ、扶桑はちやつかりアルター王国王族からも報酬を搾り取っている
が。

「内容については後でしつかり詰めさせてもらうんで、よろしゅうな
?」

「……はい」

被害が原作より小さくなったため、アルター王国が報酬を渋ると踏
んだ上でのその誘い文句であり、こうして扶桑がしつかり契約を持ち
かけるのも織り込み済みだ。織り込み済みと言っても打開策がある
訳ではなく、英司がただ苦渋の選択に耐え忍ぶだけである。

ちなみに残念ながら、王国が絞り出された報酬は原作と同じであ
り、英司はそこに更なる付加価値を付けてしまった結果となってい

た。その事実を、英司は知る由もない。

とにかく、こうして後に〈アルター王国三巨頭〉と称えられる二角が揃った。しかも、状況を静観する事が多い2人だ。

ならば――

『お前が、あの手紙の送り主で間違いないクマ?』

――危機に率先して突っ込む最後の一角が、出て来ない訳はない。

甲板から一直線に魔法馬車へ乗り移ったのは、ファンシーな熊の着ぐるみを着込む男。

ただならぬ気配と才気に溢れたその男の名は、シユウ・スターリング。アルター王国討伐ランキングトップである。

「伝書鳩がしつかり届いたようで何よりだよ」

『……お前が何故あの事を知っているのか、聞き出すのは後クマ』

扶桑を呼び寄せた誘い文句はある秘密。『管理AIたちの手が加えられている【グローリア】では【邪神】ジ・イーウィルは滅ぼせない。むしろ、力を解放させてしまう危険すらある』と、そう記した手紙を鳩型の機械に届けさせた。

内容が内容だけに、伝令役を誰かに頼む事はできなかったのだ。

しかし、内容が内容だけに、シユウには刺さった。それ故に、シユウは死力を尽くして【グローリア】を討伐するだろう。

「さて。切り札全部呼べたから安心感が湧いてきてな、そろそろ眠気がピークだ。せめて俺が寝る前に、戦う順番を決めてくれ」

「初手は僕」

「次がうち」

『最後が俺クマ』

「段取りがよろしい」

英司が会議時間を設けるまでもなく、3人は戦う順番を決めていた。

原作と同じ、フィガロ、扶桑、シユウの順番である。

「じゃあ俺から助言だ。あのクソドラゴンが持つ主なスキルは3つ。1つ目は2本角が持つスキル。半径1キロメートル内の合計レベル500未満の人間範疇生物とレベル100未満の非人間範疇生物、そ

れらを問答無用で殺す結果。おまけに結界外からの攻撃は全て無効にする。レベル500未満は問答無用で死ねとかふざけんなくたばれ」

ファイガロたちにとってお浚いとなるだろう英司の助言。その助言を、ファイガロたちは傾注した。

ファイガロたちは全員、英司の底知れなさを感じ取っている。その底知れなさは、英司の誘い文句、まるで完全に人格を把握しているようなそれに起因している。

どこから情報を得てどうやって人格把握したのか、謎なのだ。そんな謎を持つ男なら、お浚い以外に何か助言をしてくれるのではないかと、ファイガロたちは期待している。

「2つ目は1本角が持つスキル。光を照射して、後に光の照射を受けているモノを全て蒸発させる。おまけに、その光は口だけじゃなく傷口からも照射できる。光から逃げられない奴は死ねとかふざけんなくたばれ」

さつきから微妙に私情が混じっているが、ファイガロたちは気にしない。

「3つ目は3本角が持つスキル。HP低下に伴ってステータスを強化する。おまけに、どんな傷も基本的なパフォーマン스에影響を与えなくする。頑張って削ったのにどんどん強くなって死ねとかふざけんなくたばれ」

ここまで、ファイガロたちが持つ情報と大差はない。強いて言うなら、それぞれのスキルをそれぞれの頭が所有しているという事のみ、新情報となり得るか。

「まあその基本スキルを組み合わせる色々やってくるが、どうにか対処してくれ」

正直、ファイガロたちにとってこの助言は期待外れだった。そう。ここまでだったら。

「ちなみにここに居ないもう1つの頭に関しては、もう【キング・オブ・クライム犯罪王】が倒したから気にしなくて良いぞ」

「……………」「……………」「……………」

異口同音の素っ頓狂な声を上げるフィガロ、扶桑、シユウ。かの3つ首竜に4つ目の頭があるなど、彼らには予想の範疇外だ。

「ワンチャン発見が遅れたり、そもそも搜索してない事を懸念してたが。念のために俺も4つ目の頭を探して早く見つけちゃったせいで、むしろ討伐が早まっちゃったんだよな。まあ、この世の理はすなわち速さだ、物事を速くなしとげればそのぶん時間が有効に使える、遅い事なら誰でもできる、20年かければバカでも傑作小説が書ける！有能なのは月刊漫画家より週刊漫画家、週刊よりも日刊、つまり速さこそ有能なのが文化の基本法則！」

『ちよつと待った！4つ目の頭のスキルは！』

「やられた他の頭のバックアップ。以上。では、俺は言いたい事を言いつ切ったので寝ます。お休み」

『ま、待て！』

「いいや限界だ！寝るね!!」

最後の質問に答えた英司は、シユウの引き留めも聞かずにボタンキュー。威勢の良い一声をだして一瞬、その元気が嘘だったかのように倒れた。

限界だったのだ。3日間も「グローリア」を食い止めるために、その間一睡もしていない。今まで眠気に耐えていられた事の方が奇跡なのである。

『……』

「……なんや、訊きたい事が色々増えてしもうたな」

「倒してからで良いんじゃないかい？今から起こすのは忍びない」

三者三様、それぞれ死んだように寝入った英司に呆れていた。

一頻り英司を見下ろせば、「グローリア」を縛っていたモンスターたちの壊れていく音が3人の耳に届く。

その音が、戦いの合図だ。

「それじゃあ、初手は貰っていくよ」

「スコアアタック、頑張ってるな」

『行ってこい、フィガ公』

「ここから、へアルター王国三巨頭」の、その伝説が始まる。

第十七話 付けの清算・前編

俺こと、川村英司の話を聞いてほしい。

『それじゃあじっくり、話を聞かせてもらおうじゃないかクマ』

シユウ・スターリングにテーブルを挿んで相對していた。

残念ながら、フィガロと扶桑も同じ卓を囲んでいる。〈アルター王国三巨頭〉に囲まれるとか、失禁ものである。

「あ、あのー……。まずよろしいですか？」

「何かな？」

震えた手を上げれば、心優しいフィガロが発言を許してくれた。でも脳筋だから油断できない。

「グローリア」、どうなりました？」

「うちらがきっちり倒したさかい、安心しい」

『全員満身創痍、俺は気絶して2人はデスペナだけどなクマ』

「おかげで、再会するのに3日もかかってしまったね」

扶桑、シユウ、フィガロの弁を信じるなら、「グローリア」は無事討伐されたようだ。俺に構っている余裕があるのだから、そうだろうと察してはいた。でも、ちゃんと聞かないと安心できないものだ。

……と言うか、あれから3日経ってるのか。俺は起きて外を空気吸いに魔法馬車から出てみれば、〈月世の会〉に囲まれているという恐怖体験をしたのだが。

（きつちり3日間、熟睡してたのですよー。死んだように寝ていたので、ウィル子はとてめ気が気じゃありませんでした）

ウィル子からも証言が得られたので、俺はマジで3日間寝続けていたらしい。

「次は僕で良いかい？あまり訊きたい事もないし、言いたい事もそれ程ないからね」

「ええよー。うちは契約煮詰めないかんから、話し長くなつてまうしー」

『……俺もあまり他所に聞かれたくない事を訊くから、それで良いクマ』

〈アルター王国三巨頭〉が話し合い、暗に話す順番が決まる。

最初がフィガロの話だ。いったい何を俺に言いたいのか、俺も興味がある。その興味を以ってフィガロを注視すれば、彼は唐突に頭を下げた。

「ありがとう、クレールミルを救ってくれて。君が救ってくれなければ、フォルテスラはこのゲームを引退してた」

唐突なお辞儀に面食らったが、俺はフィガロのその感謝で納得する。

フォルテスラは、フィガロにとって大切なライバルなのだ。フィガロは闘技場トップで、フォルテスラはまだ3位だけど、それでもいずれば王座を賭けて戦う事を約束した者同士。強敵と書いて友なのである。

「なんだ、そんな事か。気にしないでくれ。俺は俺がしたいと思いできると信じたからやったまで。自己満足なんだ」

「それでもだ。ありがとう」

自分勝手な行動と俺は自嘲してみるも、フィガロは感謝を続け、あのモノを提示してくる。

それは、フレンド申請だ。

「何かあれば呼んでくれ。決闘しか脳がないから、力になれるかは分からないけど」

「いいや。お前との友好は助かるよ。何かあれば、メールで相談させてもらう」

フィガロは俺の喜ばしい反応を見納め、満足したように席を立った。

言いたい事は全て言い終わったようで、振り返りもせず魔法馬車の扉を開けて退室する。

実に実直な男であり、そんな男と友誼を図れた事に俺は内心ほっとしている。

「じゃあ、次はうちな」

でも、まだ面倒事が積もっていた。言わずもがな、契約を詰めてこようとしている扶桑である。

おまけに、この後シユウとの密談も控えていた。この先生き残る事ができるだろうか。

「まず前提の話や。あんさん、アルター王国に所属する気あるん？」

扶桑が切り出したのは、本当にクランへ加入させるための質問。俺を絶対に加わらせる気のようなのだ。

……もつと訊くべき事がありそうなもんだが、彼女にとってはクランが優先って事か。

「あるよ。今んところフリーだしな。今回の功績を出汁にすれば、王国に所属するのも難しくないだろう」

「せやな。じゃあ続いてはー。うちのクランの決まりゆうか、へ月世の会」の教義を守る気はあるん？」

……本当にクランの事しか興味ないのかもしれない。

『枷に囚われた肉体より離れ、真なる魂の世界に赴く』。それに、『自由なる世界で、己の魂の赴くままに自由を謳歌せよ』、だったか？つまりはこのゲーム内で自由に生きろって事だろ？そういう解釈で良いなら守れるが」

「その解釈でええよ。じゃあ、へ月世の会」を笠に着て、悪行したりする気はあるん？」

「……」

その質問に対して、俺は言葉を詰まらせた。何故かって言うと、色々と複雑な事情があるせいだ。

「あるん？」

「な、ないんだけど……。ちよつとロール的にPKしなくちゃいけないし……、そのロールのせいでもうカルディナから指名手配食らってる……」

扶桑の目付きが鋭くなったので、ある程度はぐらかしながら複雑な事情を語った。

そう。俺はへ月世の会」に悪影響を与えるつもりはないが、仕事柄後ろ暗い事をしなくてはならないのだ。その仕事を悪行と取られれば、扶桑の質問に否と答えねばならない。

『お前、カルディナで何やらかしたんだ』

「PKだよ、PK。ティアン殺しはしてない。そのはずなのに、何が琴線に触れたのか、ファトゥムまで出張ってきちゃって……」

静観していたシユウが呆れ交じりに口を開いた。カルディナ指名手配が命知らずの愚行と認識しているから、呆れずには居られなかったのだろう。

でも、俺は何も悪くない。悪くないのだが、シユウは呆れ果てたように、閉口している。

「うーん……。あんまり悪評が立つんは勘弁してほしいな」

『……今さらその程度の悪評なんて何も影響しないだろ』

閉口したんだけどつい小声でツツコミを入れてしまうシユウ。

実際、〈月世の会〉はすでにカルト教団扱いされているし、ちよっかいかけた時の報復を怖がられたり、強烈なまでの国教浸食行動を煙たがられていたりする。

そのほかは、現教主である扶桑が女狐と称されたり、か。

「なんか言うた？クマヤん」

『これ以上下がる株はないって言ったクマ』

訊き返した扶桑にあえて言い直すシユウ。目の前で火花散らすのは止めて欲しい。とぼっちり食らうのは俺なんだ。

「ま、不信心なクマのやつかみなんて、聞き流すに限るわ。で、そのロールって止められたりせえへんの？」

「悪いが、止められない。ライフワークと言うか……。仕事なんだ」

(俺の)ライフ(を管理AIたちから守るための)ワークなのだ。強要されたところで、止められる訳はない。むしろ止められるもんだつたら止めたい。

「PKが仕事？依頼でも受け取るん？」

「ああ、だいたいはな。今のお得意様はカルディナだよ」

『……カルディナで指名手配されてるのに、カルディナの仕事を受けてるクマ？』

「指名手配してきてるのも、仕事を斡旋してきてるのも、理由はカルディナ議長かファトゥムに聞いてくれ。俺だって現状は訳が分からん」

扶桑が困惑、シユウも困惑。そして俺も困惑で一同困惑。真実はカルディナ議長のみぞ知る。故に迷宮入りである。

なので、その理由について、シユウは追及しなかった。扶桑は代わりに、ニツコリ笑う。

「それ、うちも依頼できるん？」

なんと、まさかのお得意様開拓か。でもちよつと俺は渋い顔をする。

「……間違つてもティアンは殺さないからな」

だって、国教浸食のためにアルター王国国教のお偉いさん暗殺依頼だされそうなんだもん。

「なんや酷い風評被害やわー。うちも他の宗教とは仲良くしたいんよ？重役暗殺なんて頼まへんって」

「……」

扶桑は俺の誤解を解くように弁明してきたが、俺が別に重役暗殺拒否を匂わせていないのに、そう誤解していると考えている。

それって、そういう依頼を想定していたからではないだろうか。

「うちんどこに変なちよつかいかけてくるへマスター」を、ちよつとけちよんけちよんにやつつけてもらいたいだけやよ？そういう依頼はできへんの？」

「……最終的に依頼を受けるかの判断は俺がする。受ける目安を言うと、へエンブリオ」が6段階以下かどうかだ。準へ超級」プレイヤーは相手次第。へ超級」プレイヤーは受けないと思ってくれ」

一応お得意様になる可能性があるんで、ある程度の依頼受注ラインを開示した。収入源が多いに越した事はない。

……依頼に思わぬ落とし穴がありそうだが。しつかり背景を調査してから依頼を受けよう。

「ふむふむ……。うちも利用できるんやつたら、止めさせるんも不都合やな。でも、ちよつと程度を弁えてくれへん？さすがに克蘭メンバーから国際指名手配犯を出すんは、うちも願ひ下げやわー」

「元よりそのつもりだよ。カルディナではやり過ぎたからな……。反省したんだ」

その内目を付けられてはいただろうが、もう少しキルペースを落とすしていれば、ファトゥムたちの動きも遅かっただろう。管理AIたちが怒らないキルペースを見極めるべきだった点も踏まえ、要反省である。

「ほなそういう感じで。これが【誓約書】や」

ちやつかりしてると言うか、しつかりしてると言うか。扶桑はゲームシステムの強制力を行使してきた。

当然、俺はその【誓約書】の内容を隅から隅まで見る。サラリーマンとしても、こういう物で見落としは厳禁だ。滅多にないが、事前の打ち合わせと違う内容だったりするし。

まあ、そんな事すれば、そんな物持ってきた奴が信用を損なうのだが。目の前の女性が目先の信用を気にするのか、大変疑わしい。

「……良し。この内容で問題ない」

熟読した結果、質疑応答で擦り合わせた事と、扶桑と敵対しないとか王国に反逆しないとか、そんな常識的な範囲の事しか書かれていなかった。

俺は安心して署名する。

「これからよろしゅうな？」

「……まあ、敵にならないよう心掛けるさ」

扶桑が妖艶な微笑を浮かべながら、差し出してきた右手。俺は、恐る恐る握り返した。

なんだか先行きが不安である。

「それで、依頼やないんやけど。早速頼みがあるんやわー」

「……頼み？」

フラグが秒で回収されそうな気がしてならない。

「うちのレベル上げ、付き合ってくれへん？あのドラゴン倒すんに、うちのジョブレベル全部使ってしもたんよ」

「……ああ。なんだ、そういう頼みか」

微笑に苦みが混じる扶桑。

そう。彼女は原作でも、ジョブレベルを対価にして発動するスキルを使用し、ジョブレベル全てを捧げている。現在、彼女のレベルは0

なのだ。ジョブは就いたままらしいが、ステータスは初期値になっているだろう。

何を頼まれるのかと不安だったが、そんなに大した頼みではなかったので、俺はほっと胸を撫でおろす。

「もちろんタダやないよ。レベルがそこそこ戻ってきたら、あんさんの左腕、再生さしたるよー」

「やりましょう、マイマスター」

「どおわ!？」

扶桑が払う対価に、ウイル子が食い気味で姿を現した。危うく椅子をひっくり返すところだったが、ウイル子の反応も無理なからぬ話。

四肢欠損を回復できるスキルを持っているのは、ハイブリエステス【女教皇】と

セイント【聖女】。少なくとも、俺たちが知っているのはその2つのみだ。

そして、キング・オブ・クライム【犯罪王】ゼクス・ヴルフェルが就いているという、トンデモ事態になっている。

プレイヤーならデスペナ明けに四肢欠損も含めて全回復できるが、俺にそのデスペナシステムはない。

そのため、事実上俺が頼れるのは【女教皇】である扶桑のみ。ウイル子が食い気味なもの、俺の左腕を再生させるにはその頼みを聞き届ける以外ないからだ。

……ゼクスがオーナーを務めるイリーガル・フロンティアへI Fへ加入すれば、再生してもらえらるだろうが。俺が犯罪クランに加入するなど、万に一つもありません。

「へえー……。それが噂の、ロストエイジ“喪失時代”のメイデンやね」

扶桑は興味深く、ウイル子を注視した。

メイデンと言うだけでこのインフィニット Dendrogramをゲームではなく、別世界と認識している事が証明される。奇しくも、そういう精神性の人間しか、エンブリオのTypeがメイデンにならないのだ。

そして、扶桑はそういう者こそ月世の会に求めている。何故かって、このフルダイブのゲームこそ真の世界だと、信者は掲げているからだ。まずこのゲーム内を別世界と認識しなければ始まらない教義

なのである。

「……人に近いガードナーかもしれないだろ」

「いいえ、その子はメイデンです。此これの目、同族の目は欺けませんよ？」

ワンチャンぼかしにかかったが、問答無用で見透かされた。突如現れた、扶桑の「エンブリオ」、メイデンであるカグヤに。

ウイル子のTypeを見透かされてはしまったが、逆に言えばそれだけ。メイデンである事以上の情報、本当は「無限インフィニットエンブリオ」相当である事は見透かされていないようだ。

「……はあ。好きに判定してくれ。俺はお前たちが見抜ける以上の情報なんて、絶対に与えないからな。手の内が少しでもバレちまえば、こっちは商売上がったんだ」

「生産系やから、フォートレスとかそこらやろ？ 生産工場の実体はなし、ワールドとかも混じつとるやろか」

「……」

俺はなんの反応もしないよう、唇を噛むくらいに口を噤んだ。扶桑はそんな俺の様子をニヤニヤ見つめてくる。

後ろめたい事は別にないんだけど、狐に睨まれているようで汗がにじんでしまう。

『おい、雌狐。契約は済んだんだろ。いい加減こっちに譲るクマ』

「そうやねー。もつとじっくり話したいさかい、今度はちゃんとした場を用意するわ」

必死に口を噤む俺の様子を見かねてか、はたまた待ちきれなかったのか。シウは交代を急かした。

扶桑は何かご満悦のようで、シウの急かしも邪険にせず、席を立つ。

「また今度なー、『喪失時代』はーん」

できれば二度と会いたくないが、正式なクラン加入のためにも頼みを聞き届けるためにも、絶対にもう一度は会わなくてはいけない。

俺はその未来を憂いながら、にこやかに手を振る扶桑へ、嫌々手を振り返した。ついでに、送られてきたフレンド申請も嫌々許可した。

そうすれば、扶桑とカグヤは二の句を続けずに、魔法馬車の扉を潜る。

馬車内は静かになった――

『じゃあ、最後は俺の番だ』

――凄く嫌な意味で。

第十八話 付けの清算・後編

『じゃあ、最後は俺の番だ』

酷く真面目でシリアスな声音、シユウの綺麗な低温が馬車内に響いた。おしつこ漏れそうだ。

『お前は、何者だ』

「……曖昧すぎてなんとも答えられん。もう少し訊きたい事を明確にしてくれ」

そんな喉元にナイフ突き立てるようなシユウの質問。俺は無駄な足掻きと自覚しつつも、答えを先延ばしにかかる。

『この3日間、〈月世の会〉のメンバーたちが交代でお前の馬車を見張っていた』

シユウが語るのは明確にした質問ではなく、さらにナイフを押し込むような捕捉。もう言い逃れできないだろうと思いつつ、俺は一縷の望みにかけて静聴する。

『なのに、ログアウトした形跡が確認できなかった。【グローリア】を足止めしている時点で3日間ログアウトしてなくて、合わせれば6日間。リアル時間に換算すると、2日間だ』

やっぱり駄目みたいです。リアル時間の事持ち出されてるんだつたら、その異常に気付いているだろう。

『2日間もログアウトしていない。考えられるその理由は大別して2つ。リアルで起きる必要がない状態にあるか、そもそもお前のリアルがここなのか。そのどちらかだ』

さすがは才能の化け物に相当すると称された男。完全に推測されている。

ただ、まだ言い逃れる余地はあった。

「正直に話そう、シユウ・スターリン」

何故ならば、その推測はどちらも完全すぎるが故——
「俺も、どっちか分からない」

——どちらが正しいのか分からないからだ。

『どっちか分からない？ どういう事だ』

「俺はお前たちがリアルとする世界に居た記憶がある。その記憶の最後は、駅の階段を踏み損ねて転び、一瞬だけ猛烈な頭痛が襲ってきた瞬間だ。そうして気付けば、俺はお前たちがゲームとするこの世界に居た」

俺は素直に、原作どうちやらとかの大事な部分を省きつつ、真実を明かした。

『……植物状態になって誰かにデンドロの端末を被されているのか、一時期流行ってたフィクシオンジャンルみたいに転生したのか。お前には判別付かないのか』

細かく説明するまでもなく、シユウはその結論に至ってくれた。ありがとう、天才。騙されてくれて。

「そうなんだよ。ただ、正規の手順を踏んでないのは確かだな。そのせいで管理AIたちに警戒されてる。俺がPKしてるは、あいつらと交渉した結果なんだ。見逃してやるから雑用しろってなもんでな」

管理AIに注目されている。俺はそんなシユウとの共通点を持ち出し、親近感を抱かせようとした。肩を竦めて溜息を吐き、お互いの苦労を分かち合うような雰囲気形成する。

『じゃあ、なんでお前は【邪神】^{ジ・イヴイル}の事を知っていた。今のところ、【邪神】に繋がる話がない』

残念ながら、シユウは雰囲気流されてくれなかった。鋭く矛盾点を指摘し、問い詰めてくる。全然騙されてないわ。

「……俺が何者であるか、その3つ目の可能性を提示しよう」
『3つ目？』

「そう、3つ目だ。俺が何故【邪神】やその他諸々の情報を知り得ているのか、その理由が大方説明できてしまう3つ目の可能性」
『……』

俺はあえて一拍置き、これから真実を話すかのように思わせた。シユウは固唾を飲みながら耳を傾ける。

「そうあれかしと作られた存在、そんな3つ目の可能性だ」
『そうあれかしと、作られた……？』

「言っておくと、俺はこの世界に來た瞬間、奇妙にも既視感に襲われ

た。見た事があるような、これから起こる事がなんとなく分かるような、そんな既に視てきたような感覚があるんだ」

俺は原作知識を既視感と言ひ換え、前述2つとも辻褄が合うように言葉を選んだ。

『……リアルで生きてきた記憶が全て作り物で、このゲームの情報を頭に突っ込まれた存在。そういう事か』

俺は内心シユウの推理力に感嘆する。

いや本当に、よくこれだけの情報でそこまで推測できるな。

「実際、ドーマウスもその可能性を追っていた。だから、管理AIたちの中で、俺への過干渉が危険だつていう意見も出てる」

『……この世界の、何らかの防衛システム。……それこそ、管理AIたちに対抗するためのプログラムかもしれないのか』

シユウは思案し、思考を独り言ちていた。しかも随分ヤバそうな思考を漏らしている。

俺が対現管理者プログラムとか、勘弁してくれよ。13人に勝てる訳ないだろ。

「結局、自身が何者なのかは、俺も分かってないんだ。もしかしたら、ある一定の条件を満たした時に役割を自覚するよう、設定されてたりしてな」

俺は苦笑を浮かべた。シユウの思考に沿うような推測を試みたが、俺としてはできれば当たって欲しくないそれだ。この推測が当たっていない事を、切に祈る。

『【邪神】の情報だけなら、3つ目の可能性が出てくる根拠が薄い。他にも既視感とやらがあるんだろう?』

シユウは俺の持つ情報を絞り出しにかかった。

実に聡いところが、俺の3つ目の可能性を信じた^{てい}いで、俺の持つ情報を絞り出そうとしているところだ。俺が何をどの程度知っているか、探りに来ている。

「じゃあ、王国に現在所属している〈超級〉マスター5人について」

そうはさせないと、俺は^{てい}体に乗っかり、シユウがすでに知っている事を開示する事にした。

「1人目は【破壊王】、シユウ・スターリング。へエンブリオは【戦神艦バルドル】。Typeはガーディアン・フォートレス・ギア・ウエポン」

『……他4人は？』

本人の目の前で本人の情報を言い当てたせいとか、シユウの凄みが増した気がした。凄まれた俺は、否応なく続きを語る。

「2人目、【超闘士】フィガロ。へエンブリオは【獅星赤心 コル・レオニス】。Typeはあ……、アームズ系？」

『なんでそだけ疑問形だ？』

「情報がないからだよ。心臓を代替してるのは知ってるが、Typeは知らん。一部置換だからボディではないってくらい」

原作で明かされてないから知らないとは、口が裂けても言えない。

『……なんでそんな微妙なところだけ知らないんだ』

「俺に言うな」

これも全部、情報を小出しにした原作者が悪い。俺は悪くない。

でもあの小出しにされて焦らされるの、好きだったよ……。なんて感傷に浸っている場合ではない。

「3人目は【女教皇】、扶桑月夜。へエンブリオは、ああくなんちゃら【カグヤ】だ。Typeはメイデン with インベイジョンワールド」

『今度はへエンブリオの方が』

「なんでもは知らないんだよ。原作に載ってた事だけ」

『微妙に名作の名言パクるな』

なんと、シユウに『化物語』の名言が通じた。嬉しい。でもそんな事はどうだって良い。重要な事じゃない。

「4人目はレイレイ。メインジョブは知らね、【毒手拳】には就いてるってくらい。へエンブリオはなんちゃら【エデン】。Typeは知らね」

『もう歯抜けどころか虫食いクマ』

「だって知らないもんは知らないだもん！俺は悪くねえ!!」

『ネタがさつきから古いクマ』

「でも通じてるじゃん」

『『化物語』も『テイルズオブジアビス』も、古き良き名作だからな。そりゃ履修してるクマ』

シユウが履修するくらい、その2つは後世にも名作と語り継がれたらしい。

だけど、『古き良き名作』ってところに哀愁と言うか、ジエネレーションギャップと言うか、そんな感じの寂しさを俺は覚える。時代は変わってしまうんやなって。

『さっさと次に行くクマ』

「……最後に【犯 キング・オブ・クライム 罪 王】、ついでに【聖女 セイント】のゼクス・ヴュルフェル。

へエンブリオへは【始源万変 ヌン】。Typeはボディだ」

『……逆にあいつのは全部埋まるのか』

今までの知識、それらの歯抜けに反し、まさかのゼクス全埋め。そんな意外感があったようで、シユウは難しい顔をしていた。

……なんで着ぐるみが表情豊かなんだよ。

『とりあえず、3つめの可能性を信じてもいいクマ。むしろ、3つ目の可能性が強くなったクマが。……それで、しばらくはどうするクマ?』

途中途中もそうだったけど、ようやくシユウのふざけた『クマ』語尾が完全に帰ってきた。彼の警戒が解けた証だろう。

「当分は王国に居るさ。俺の既視感が最も強いのは王国だからな。既視感が強い分、未知がなくて安心できる。まあ、管理AIとかカルデイナに振り回されるだろうが……」

『同情するクマ……』

伊達にファトウムやハンプティダンブティに振り回されていないシユウ。彼なら俺の苦勞がよく分かるだろう。

『良し。じゃあ王国に新たな仲間が増える事を祝して、これをやるクマ』

少しお茶らけたシユウが送ってきたのは物品ではなく、フレンド申請だった。

「良いのか?自分で言うのもなんだが、結構色々怪しい奴じゃない

か？俺って」

『良い奴と悪い奴の区別は匂いで付く。こいつはくせえ！ゲロ以下の匂いがプンプンするぜえ！』

「怪しい匂いするんかーい！」

あからさまにこつちに合わせて『ジョジョ』の名言を言い放つてくれているが、だからって悪い奴判定はされたくない。

と言うか、シユウから悪い奴判定、ひいては敵判定されるなんて、命がいくつあっても足りない。

『冗談クマ。短時間だが、お前は悪いじゃないって感じたクマ。これは、そんな悪くない奴への友好の証クマ』

「そ、そうなの……？まあ、そう思ってくれたなら、俺は有り難いが……」

シユウの声音が優しげであるため、嘘をついていない事は読み取れる。しかし、少し話しただけで俺の人となりを分析されたとなれば、その観察力に恐怖を感じてしまう。

『されじゃあ、俺ももう行くクマ。また会おう、英司』

「……そうだな。また会おう、シユウ」

差し出されたシユウの手を、俺は握り返した。

どうせ長い付き合いになる。なら、仲良くはしておきたいもんだ。

そんな俺の意思を見抜いてか、シユウは笑顔でハンドシェイクし、後は何も言わず馬車から下りた。

「……期せずして、へアルター王国三巨頭」とフレンドになっちゃまったな」

静かになった馬車の中で、俺は増えたフレンド欄を見つめ、感慨にふけるのだった。

第十九話 お節介焼のフォルテスラ

俺こと、川村英司の話聞いてほしい。

「本当に、貴方には感謝してもし足りない！」

フォルテスラに面と向かってお礼されました。

事の経緯は簡単だ。城塞都市クレームルが無事なのか気になったので行ってみたら、フォルテスラに見つけられた。

フォルテスラはへバビロニア戦闘団のクランメンバー総動員して、俺を捜索していたらしい。どうしても、直接お礼が言いたかったそう
だ。

「俺たちからも感謝させてください。貴方がいなければ、きっとクレームルは滅んでいた。オーナーも、帰ってこなかったでしょう」

〈へバビロニア戦闘団〉サブオーナーのシャルカも、机を叩き割りそうな程頭を下げていた。

俺の魔法馬車における大事な備品なので、間違っても叩き割らないでほしい。

「俺が勝手にやった事だ。アンタらからお礼言われるような事じゃない」

「それでも、俺は感謝しないと気が済まなかったんだ」

ちよつと困り顔で感謝の押し売りに抵抗するも、フォルテスラは訪問販売員の如く感謝し倒してくる。

これは、もう相手の気が済むような事をしてやるほかない。

「じゃあ、2つお願いがある」

「なんでも言ってくれ。できる限りは叶えてみせよう」

(今なんでもって)

真面目な場面で、しかも俺だけに聞こえるようにネタをぶつ込むじゃないよ、ウィル子。それに『できる限り』って言ってるだろ。

と、ツッコむのは脳内に留め、表層では真面目を取り繕う。

「まず、アンタの〈へエンブリオ〉が〈超級〉に至ったかどうか教えてほしい」

「そんなモノで良いのか？」

「これでも情報収集家なんでね。〈エンブリオ〉が〈超級〉に至ってるかどうかってのは、俺の欲しい情報なんだ。もしかしたらどっかに売れるかもしれないし」

フォルテスラはあっけらかんとしており、自身の戦力情報に関する重要性を気にかけてもいなかった。俺がついついそれが如何に重要かを仄めかして教えてしまうくらいだ。

「なるほど、君にとって重要だと言うならば是非もない。ネイが〈超級〉に至っている情報を心置きなく渡そう」

仄めかしたはずなのに、全く警戒せず情報をくれやがるフォルテスラ。この純真さは絶対に後で痛い目を見る。

「ま、まあ。ありがと。〈超級〉に至って得たスキルとかは明かさなくて良いからな」

「ん？そうなのか？喜ぶなら渡そうとしていたんだが……」

「もうちょい渋れ！情報の値が落ちる！」

駄目だコイツ、早くどうにかしないと。などと考えつつも、手遅れ感否めないので怒鳴るだけにしておく。

「はあ……、もう次だ。〈A E T L 連合〉と面会するための渡りを付けてくれ」

「〈A E T L 連合〉か。彼らとは克蘭ランカー同士だから交流がある。渡りを付けるのは難しくないが。一応、訳を聞いて良いか」

相手がPK克蘭という事でもないから、フォルテスラたちは友好関係にあるようだ。

ただ、さすがに他人の情報を渡すのは警戒しているようで、ワンクッション挿んでいる。

「何、ちよつとあの克蘭のオーナーに力を貸してほしいんだ。争うつもりも無理強いするつもりもないから、頼むよ」

〈A E T L 連合〉オーナー、パトリオット。彼は経験値を倍増する〈エンブリオ〉スキルを持っている。扶桑のレベルアップを早々に済ませたいがため、是非とも力を貸してほしいのだ。

「ふむ……。とりあえず連絡を入れてはみるが、すぐに色良い返事がくるかは保証できないな」

「ああ、その事なら大丈夫だ。君たちが崇める者たちの生写真を確保すると、一言添えておいてくれ」

〈A E T L 連合〉は王国第一王女アルティミア、第二王女エリザベート、第三王女テレジア、そして近衛騎士団員リリアーナのファンクラブが合併したクランだ。その者たちの生写真となれば、欲して止まないはずである。

「……それなら確かにすぐ返事がきそうだが。確保できるのか？」
フォルテスラも俺の予想へ暗に賛同したが、俺が本当に確保できるのか心配していた。

フォルテスラの心配は正しく、近衛騎士として露出が多いリリアーナ以外は公務で忙しい身。一般人が写真撮影を頼んだところで、付き合っている暇はない。

ただ、俺が一般人かどうかというのは怪しい。

「『グロリア』を足止めした事、それを出汁にさせてもらう」
そう。俺は捉え方次第で王国の恩人になるのだ。それだけ、「グロリア」の足止めは難関なのである。

クレームを救った点だけでも、その都民たちの命を救っている。そんな多くの人命を救った者の要求なら、充分に通せるはずだ。扶桑より優しい分、そう邪険に扱われたりしないだろう。

「それなら、充分に確保できる可能性はあるか。その事も含めて連絡させてもらう」

フォルテスラも十分な担保がある事を認め、話を進めてくれた。最初から躓くなんて事にはならず、俺は安堵する。

「二人とも、口を挿んで構いませんか？」

話が一段落着いたところで、シャルカが発言許可を求めてきた。なんだか律儀な奴だ。

「構わないが、どうした」

「英司さんが王国に所属する予定なら、是非とも我がクランに勧誘したくて、ですね」

「それは名案だ！どうだろうか！」

シャルカの発言を聞くや否や、フォルテスラは俺にへバビロニア戦

闘団〉への所属するかどうかを尋ねてきた。

そんな行動をするフォルテスラは当然、そんな話を出したシャルカも、俺の〈バビロニア戦闘団〉加入に結構乗り気みたいだ。

「シャルカ、アンタは知ってるだろう。俺はもう〈月世の会〉に内定してるんだよ」

扶桑にそういう言伝を頼んだ相手であるはずのシャルカ。実際に言伝したのは別の人間だが、シャルカの指示で動いた者だ。ならば、俺が〈月世の会〉とどういう取引をしたのか、知っているはずである。

よもや、忘れたんではなからうか。

「そうか……。やはり、〈月世の会〉に押さえられていたか。そうでなければと、一縷の望みを抱いたのですが」

「ああ。残念ながら、あの曰く女狐が俺を見逃すはずもないさ」

シャルカが落胆しているところに、俺もちよつと落胆しながら、扶桑が俺を逃さない原因を出現させる。

「にほほほほほほ。ウィル子はそれだけ希少価値って事なのでですよー」

現状、皆にTypeメイデンと認識されているウィル子。彼女は俺の願いに応え、その身を表した。

そのTypeメイデンである事が、扶桑が逃さぬ原因である。

「そうか、君の〈エンブリオ〉もメイデンなのか。なら、納得せざるを得ないな」

「お仲間さんだったんだねー。そう言えば一時期、団長もあの怖い人に付け回されたっけ」

フォルテスラ、そしてウィル子と引き合うように出てきた少女・ネイリング。彼らは俺が詳細を語るまでもなく、扶桑がそうする事に思い当たる節があるようだ。自然と腑に落ちたようであった。

というか、意外と狙われてたのか、フォルテスラ。まあ、多分〈バビロニア戦闘団〉を立ち上げる前の頃だろう。

「……もし不当にも加入を強制されているようだったら、こっちもそれ相応の対応をするが」

「大丈夫だよ。正当な取引の上だ」

勧誘の手管にまで嫌な思い当たる節があるのか、フォルテスラはそんな懸念を持ち出し、険しい顔をしていた。

俺はその『相応の対応』で発生するだろう被害を避けるべく、しっかり扶桑を擁護しておく。擁護するのは今回の取引に関してのみだが。

「そうか……。彼女との取引という時点で、不当な気がしてならないんだが。君がそう言うのなら、私がでしゃばるのは余計なお世話だろう」

「気持ちだけ受け取っとくよ。今後、お前たちとは仲良くやりたいからな」

「ああ、こちらからもよろしく頼む」

俺が彼らとの友好関係に前向きな姿勢を示したら、フォルテスラから即座にフレンド申請が飛んできた。

結構押しが強いな、この人。

「私もお仲間のお友達が増えるの嬉しい！」

「ああああああ！ステイ、ステイなのですよー！」

傍らでウィル子がネイリングに激しいシエイクハンドされてるが、〈マスター〉があれなら〈エンブリオ〉もそうなるだろう。

とりあえずウィル子たちは放っておいて、今「放っておかないでほしいのですよー！」って聞こえたけど気にせずフレンド申請を許可しておく。

わあい、フレンドが〈超級〉ばっかだあ……。

「まあ、なんだ。トムとの決闘は見に行くよ」

「そうしてくれ。新たなスキルの肩慣らしに少しかかるだろうが、トムに挑む予定ではあるからな。そして、ゆくゆくはフィガロと王者を賭けて戦うさ」

強くなつたがために闘技場への意気込みを表すフォルテスラ。原作では叶わなかった、闘技場での王者篡奪戦が叶うかもしれない。

フィガロにとっても喜ばしいだろう。フォルテスラと王者を賭けた決闘を望んでいたし、王者となってしまうてからはめつきりランクを賭けた決闘はしていないはずだ。

決闘ランク1位は2位からしか挑めないシステムのせいで、現2位のトムが邪魔してるからな。あのトム、チエシヤはあくまでも王者に至る壁役だから、敗れてしまっただけからはフィガロに挑んでないだろう。

「その時を楽しみにしてるぜ」

「ああ、待っていてくれ。そうだ、フダ屋を紹介しておこうか。良い観戦席を得るならフダ屋から——」

「そこまでお節介を焼かんで良い」

「そうか……」

何かと情報を押し売り（無償提供）してくるフォルテスラを突っぱねれば、彼はとてもしよんぼりした顔を披露した。

これ以上はまた何か押し売りされかねないと、この辺りで歓談をお開きとするのだった。

第二十話 答えは己で作り上げる

俺こと、川村英司の話を聞いてほしい。

「そう！剣はその角度！足の開き具合もOK！はい、一枚貰いまーす！」

絶賛写真撮影中である。カメラマンは俺で、被写体はアルティミア・アズライト・アルター。正真正銘、アルター王国の第一王女だ。

ちなみに、今はガイナ立ちと呼ばれる、剣を下段で諸手に毅然と構える立ち方だ。絵面としてはとても生えるが、実用性は皆無である。

「あ、あの……。こんなので良いのでしょうか……」

「ダメダメダメダメ、そんな表情じゃー！さっきのキリツとした顔でー！」「そっちの良し悪しを聞いたのではなく！こんな報酬で良いのかと聞いているんですー！」

第一王女様は謎なポーズを注文されまくって我慢の限界が来たのか、構えを解いて詰問してきた。

「こんなんって言ったって、所属権は貰ってるが？」

当たり前な話、俺は写真を撮影する権利より先に、王国への所属権を交渉した。

ティアンからも俺がやった「グローリア」の足止めを目撃した者が多く、それを伝え聞いていた存命の国王は俺の所属を快諾したのである。

でも謙虚で誠実な国王。それだけでは恩を返せないと申し出たので、俺はこれ幸いにと王女たちの撮影許可を求めたのだ。

すっごい訝しまれたけど、そんなので良かったらとばかりに許可が即下りた。

初めに撮影したのは、エリザベート・S・アルター。第一王女よりは時間がある第二王女が最初の被写体となり、彼女は割とノリノリに撮らせてくれた。

ベッドにあざとく寝そべっているとところだったり、満面の笑顔だったり、勉強している最中だったりを撮らせてもらっている。

（最初、『じゃあベッドに横になろうか』と切り出した時は、よもやマ

イマスターはロリコンなのかと疑ってしまっただのですよー……」

俺はロリコンではない。美しければ幼女だろうが老婆だろうが美しいとするスタンスである。

俺のロリコン疑惑はともかく、アルティミアの詰問に戻ろう。

「貴方の噂は聞き及んでいますが、ロストエイジ『喪失時代』。あのカルディナで指名手配される程の殺し屋だと」

「念のため言っておくけど、ティアンは殺してないからね。あくまで〈マスター〉〈専門〉」

「それも当然聞き及んでいます。ですからなおさら、貴方の力は多くの者に一目置かれていいる。そんな貴方が我が国に所属してくれるのは、私たちにとってさえ好都合なのです」

思わぬ高評価をあのアルティミアよりいただいていた事に、俺は小さくも目を瞠った。

戦力で言えばご本人が一番ヤバいだろうに、たかだか〈超級〉プレイヤーである——という事になっている——俺一人抱えたところで、大した戦力アップではないような気がするんだが。

「貴方方〈マスター〉は自由な存在です。国からの命令で動くような存在ではない。でも、貴方たちこそ時代の変革者だと、父は信じているのです」

「……あなたは、そうでもなさそうだな」

アルティミアは己の父、現国王の意思を持ちだしているが、そうしている本人の表情は冴えない。

「……申し訳ありませんが、貴方の言う通り、私はそう信じておりません。先程も言いましたが、〈マスター〉は自由な存在です」

「悪い言い方すれば、自分本位な奴らだっただって事だろ？」

「……そこまでは」

「濁さなくて構わないさ、王女様。俺もそう思ってるから。どいつもこいつも、自分のためにタイムマン張るわ、宗教勧誘するわ、己が義を遂行するわ、悪になろうと罪を犯しまくるわでよ。もうそのために全然他人を気にせず暴れるのなんのって」

アルティミアの返答にタイムラグがあつた時点で、彼女が〈マス

ターに良い感情を抱いてないのはあからさまだ。まあ、悪い感情を抱いてるって訳でもなさそうだが。

対して俺は、もうそれはそれはへマスター連中が嫌いです。遊戯派は対外倫理観が欠けているし、世界派は対外頭のネジが何処か外れてるし。特にへ超級プレイヤーは、もはや全世界ヤバイ奴選手権だ。「その……。一応明かしますと、私もへマスターの中には良い人もいますよ……。？」

俺が悪し様に言ったものだから、さすがのアルティミアも擁護にかかった。でも、やっぱり擁護したのは全体ではなくて一部だ。

「そうだな。結局のところ、ティアンもへマスターも変わらない。良い奴も悪い奴も、全体の一部でしかない。そんなもんだ。だから、王女様も目を曇らせず、しっかりと見定めてくれ。そうやって、己の結論を得れば良い」

「……ありがとうございます、胸の問えが少し取れたようです。ですが、1つだけ聞かせてください」

「……何かな？」

アルティミアの透き通るような目、されど確固たる信念を宿した目が、俺を射抜く。

「貴方は、何者ですか」

そうして聞かれたのは、本当に俺の核心を射抜くような質問だった。

「……俺自身、俺が何者なのかはまだ分かってない。でも、あえて言うなら、『レイヴン』だ」

『レイヴン』？ 鴉ですか？」

「そう。翼を黒く染め上げるのも、高潔に羽ばたくのも、死肉を漁るのも、全て俺の自由だ。『好きなように生き、好きなように死ぬ』。それが、俺の掟であり、最初の質問もひっくりくるめた答えだ。俺は俺の自由で、ここに居る」

自らの行いを、他人のせいにはしない。誰かを憧れ、その行動を真似たとしても、それは俺の責任なのだ。

そういう風に、俺は吹っ切れた。ない左腕をさすれば、その決心の

証がそこにある。

「……少しですが、貴方の人となりが見えた気がします。同時に、へマスターへの偏見も、少し解消できました」

「そうかい？それは良かったが、俺も数ある人間の一人にすぎないからな。反って全体への偏見にならないように気を付けてくれ」

「助言、感謝します」

そうして、俺と第一王女の初接触は好印象で締める事ができ――

「感謝ついで悪いが。こう、剣を地面に突き立てて、そこに両手を預けるようなポーズを頼む」

「……」

――なかつたかもしれない。というか締まらない。

だって、最後にあの色んな騎士がやつてるポーズ、俺が勝手に『騎士王のポーズ』と呼んでいるヤツをどうしても撮りたかったのだ。

女性騎士には、あのポーズが良く似合う。

「……こんな風ですか」

「そう、それ！」

望み通りのポーズを撮り収め、改めて初接触を締めくくるのだった。

「うん、まあ。君にポーズ要求は控えとこうかな。代わりに、普段の様子を撮らせてくれ」

「そう。ありがとう、からだをきづかってくれて」

途中リリアーナの撮影を挿み、最後の一人となったテレジア・

セレスタイト

C・アルター。その幼い見た目に相応しい呂律で、しかし相応しくない口調をしていた。

そんなチグハグの彼女は虚弱体質として扱われているために、俺も監視が居る場ではそのように扱う。

まあ、当然の話、撮影中に監視と言うか護衛が離れる事はないので、ずっとその扱いになるが。

「……ドーマー」

なんか変な鳴き声の変な生物（ドーマウス）も居るが、とりあえず

一旦無視しておいた。

そうして、俺はテレジアがベッドで横になつてたり、ドーマウスに跨つてたりの姿を撮影していく。

そんな撮影が終わり、俺がそろそろお暇しようとした時だ。

「あなた、すこしおはなしにつきあつてもらえない？」

テレジアの方から、そんな誘いを貰ったのだ。

「せいきしだんいんさん。わるいのだけど、かれとふたりつきりにしてもらえないかしら」

おまけに、人払いをしようともしている。

「そ、それはなりません！私は有事の際に控える護衛役です。テレジア様を守るため、離れる訳には……」

「もしかれがなにかするきだつたら、そもそもあなたではとめられないわ。かれ、ぐるーりあつていうすごいりゆうをみつかもくいとめていたんでしよう？」

「そ、それは……」

「おねがい。かれとだいなおはなしがあるの」

「……分かりました。しかし、不審な気配を察知すればすぐにアルティミア様をお呼びいたしますので」

「それさりげなく俺が極刑されるヤツでは？」

なんか護衛の聖騎士が折れたような流れだったのに、一步間違えば俺が死ぬ道筋が作られていた。

始まりを刻む剣の担い手とか、勘弁してクレメンズ。

何はともあれ、それが妥協点だったようで、聖騎士は引き下がる。

普段からテレジアの身辺警護を務めている者だったのか、テレジアに対してとても聞き分けの良い人だった。

「で、まあ、なんだ。二人つきり、+αで管理AIが居るが。そういう事だよな？」ジ・イーヴル【邪神】

「はなしがはやくてたすかるわ」

この場に留まったのは、奇しくも世界の秘密を知る者たち。そして、テレジア本人が、世界の秘密、その一端たる【邪神】なのである。よく考えると、管理AIのドーマウスとか転生者の俺とかも世界の

秘密な気がするし、そうになると全員世界の秘密だが、今したい話題は【邪神】ついてなので横に置いておく。

「さっそくだけど、わたしをころしてみるきはない？」

「なっ」

「……」

テレジアからまさしく早速切り出された話に、ドーマウスは小さくも驚愕し、俺は呆けてしまった。

彼女が何を言っているのか、俺には分からない。

「管理A I、現管理者の手が加わっているモノでは、前管理者の手による【邪神】は傷付けられない。そのはずなのですよ」

そんな呆けて言葉が出ない俺に代わり、ウイル子が姿を現して、俺の言いたい事を代弁してくれた。

そうだ。管理A Iたちの手によるモノであるへエンブリオでは、【邪神】を倒せない。それは、前管理者、ドーマウスたちが来る前はこの世界を管理していた者たちによって作られたルールだ。現管理者たるドーマウスたちでも、そのルールを改変できない。

「ではきくけど、あなたたちはドーたちにてをくわえられた？」

「そうか！彼らは確かにへエンブリオとへマスターに酷似した存在ではあるが、我々の手によるモノではないのである！」

テレジアが正鵠を射抜く事で、ドーマウスはその真実に気付いた。

そう。俺とウイル子は、現管理者の手による存在ではない。【邪神】を倒せないルールの例外なのだ。

「い、いやいやいや、ちよつと待て！【邪神】が倒せないルールは、いわゆる異物に試練の邪魔をさせないためのモノだろう？なら、ドーマウスたちとは違う異物である俺にも、そのルールは適応されるはずだ！」

一瞬納得しそうになった俺だが、そのおかしい部分に気付けた。

厳密にはそのように言及されていないそのルールではあるが、そのルールが設けられた理由を推測するに、【邪神】を純粋なこの世界の住人に倒してもらうためだ。

だから、ドーマウスたちの手が加わっていないとはいえ、純粋なこ

の世界の住人ではない俺に、「邪神」が倒せる訳がない。

「じゃあ、もうひとつきくけど。あなたたちは、だれによつてうみだされたの?」

「……マジ、か」

テレジアがもう一矢正鵠を射抜くものだから、さすがに頭が良い方ではない俺でも察した。

「俺、前管理者に生み出されたのか……」

「【邪神】を倒せるという事は、つまりそういう事。」

俺は、ドーマウスの仮説通り、前管理者プログラムである真実が振って湧いてきた。

「かんかくてきなものだけど、あなたたちからへますたーのようないぶつかんがないの。だから、あくまでかんかくてきなものだけど、あなたたちなら、わたしをころせるとおもうわ」

「……マジ、なのかよ」

急遽突き付けられた真実。それは俺にとって信じ難いが、されど真実があるものと感じてしまう。

前管理者は、『インフィニット・デンドログラム』でもまだほとんど語られていないが、世界にルールを敷ける程の超越者である。

なら、異世界から死者の魂を1つ持つてくるくらい、造作もないのかもしれない。

ただ、それでも信じきれず、つついウィル子に視線をやって、共感を得ようとしてしまった。

なのに、共感は得られない。何故なら、ウィル子は俺と違って呆けていた訳ではなく、冷や汗を垂らしながら口を固く結んでいたからだ。

ウィル子は俺の知らない事を知っている、何よりの証拠である。

「……ウィル子」

「……なんでしょう、マイマスター」

「今は聞かん、無理矢理も。お前が話しても良いと思つたら、話してくれ」

ただ、それでも聞く気はしなかった。正直、どうでも良いからだ。

俺の生き方は俺が決める。『好きなように生き、好きなように死ぬ』と、決心はついている。『のんびり生きたい』という初志からは大分外れてしまったが。まあ、今でもちよつと平穩に生きたい気持ちはあるけど……。

「アンタを殺すつてのものなしだ。これでも俺は不殺を心がけているんでな」

「へますたー」はたくさんころしているみたいだけど？」

「殺しても死なんやろ、あいつら」

そんな言い訳とも自分ルールともされそうな俺の言い分を聞いて、テレジアは少し笑みを零した。

「ごめんなさい。あなたをひとでなしだとかんちがいしていたわ」

「勘弁してつかあさい」

零した笑みの所以は前評判との差異にあつたようだ。もしくは俺の辛らつな言葉か。どちらにせよ、酷い前評判だった事に対し、俺は強く出られなかった。

2カ月で28人もへマスター（その数もあくまで第6段階へエンブリオ）所持者のみなので、厳密には言えばそれ以上）をキルしたのだ。快楽殺人者と勘違いされてないだけで御の字である。

「とりあえず、いくら金積まれたつて脅されたつて、あんたを殺すつて依頼は受けないからな。たとえそうした方が世界にとつて良かったとしても、だ」

「それは、もうどうしようもないじょうたいで、ころすことがじひだとしても？」

「ああそうだ」

テレジアの少女らしくない自己犠牲の精神が滲む問いかけに、俺は食い気味で肯定した。

ヒデヲだつて、殺した方が世界的に良く、相手にとつても慈悲深い状態となつても、その相手を殺さなかつたのだ。

川村ヒデヲは、俺の憧れの人物は、『殺す』という選択を取らなかつた。憧れによる真似で終わるつもりはないが、俺は彼の意思に倣う。「生きたいから守つてつて依頼だつたら、まあ……。敵次第かなあ」

「そこは何が何でも守るといふところなのですよー……」

最後までかっこつけられないヘタレな俺に、ウイル子は落胆していた。

いやだって、敵がティアンだったら殺せないし。ヘセフィロトと
か、へアルター王国三巨頭とかがだつたら、多分俺が出張ったところで
せいぜい時間稼ぎしかできない。

「うふふ、ありがとう。きもちだけ、うけとらせてもらうわ」

そんなヘタレな俺にも、テレジアは笑いかけていた。

もしかしたら、真実を知つてなお守る意思がある俺に、本当に感謝
しているのかもしれない。まあ、ただのお世辞という線も拭えない
が。

「じゃ、そういう事で。俺はお暇させてもらうぜ。このまま幼女と話
し込んでたら、ロリコン疑惑が広まってしまう」

「もう遅いかもしれないですよー」

「遅くない！生きてりや遅いなんて事はない！」

エリザベートやテレジアを熱心に撮影したから、彼女らの護衛につ
いていた聖騎士らからは確かにそんな疑いの目を向けられていた。

でも、あくまで俺は美しい女性が好きなだけで、リリアーナもアル
ティミアも熱心に撮影したのだ。

ウイル子からは考えたくない可能性を提示されるが、俺はまだ諦め
ない。まだ年齢問わない女好きで通るはずだ。

「それはそれでアウトな気が……」

まだ2ストライクだ。

「とりあえず、サラダバー」

そろそろこの謎コントをテレジアに見せ続けるのは恥ずかしいの
で、俺は本当に退出する。

部屋の外には、誰も居なかった。護衛の聖騎士も不慮の事後で盗み
聞きしないよう、そこそこ離れてくれたようだ。

「ウイル子」

「なんでしよう、マイマスター」

「彼女を救う方法、探すぞ」

「イエス、マイマスター」

そんな誰も居ない廊下で、小さくも誓いを立てるのだった。

【邪神】なんてくだらない運命に囚われた少女を救うと、俺は誓ったのだ。